
もしも笑っていいともの“テレフォンショッキング”に東方キャラが出演したら？

月見草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも笑っていいもの“テレフォンショッキング”に東方キャラが出演したら？

【Nコード】

N9799V

【作者名】

月見草

【あらすじ】

タイトル通りです。全ては想像ですが、楽しんでいただけると嬉しいです。

次回に出演するゲストにリクエストがあったらお書きください。出来る限り引き受けます。

毎日更新…とはいきませんが、番組と同じく正午に更新いたします！

祝！50回を迎えました！記念にいいとも増刊号を書きました。

第一回・魂魄妖夢（前書き）

これは“もしも”の話です。なのでこのキャラならこう答えるのでは？という想像のもと書きました。原作と少し離れてるかもしれませんが。

短編として投稿しましたが、連載してほしいとの声を受け連載することになりました。よって短編として投稿したものを削除し連載として出しました。

申し訳ありませんがお気に入り登録された方はもう一度登録し直してください。

また、セリフが誰のものかわかりやすくするため台本みたいに書きました。このため“タモリさん”ではなく“タモリ”と書いた点多くあります。

テンポよく読んで頂けるためにこのように致しました。ご了承下さい。

またテーマソングが流れる所は“ ”マークで表しました。あまりいいともを見ない方には少しわかりづらいかもしれません。

それではどうぞ！

第一回・魂魄妖夢

）

タモリ

「今日も暑いね〜」

『そうですね!~!』

タモリ

「こんな暑い日はそうめん食べたいよね!」

『そうですね!~!』

タモリ

「でも冷や麦もいいよね〜」

『そうですね!~!』

タモリ

「どっちなんだよ!」

タモリ

「では登場していただきましょう。初登場、魂魄妖夢ちゃんです! どうぞ〜」

）

パチパチパチパチ!!

拍手と共に妖夢登場！

妖夢

「ど、どうも…よろしくお願いいたします！」

過剰にペコペコ頭を下げつつ、緊張した面持ちで妖夢が出てくる！

『可愛い〜！〜！』

『顔ちっちゃ〜い〜！』

妖夢

「あ、ありがとうございます〜！」

顔を赤面させつつ、照れ隠しで少しうつむいた顔で妖夢がタモリの横に歩み寄る

緊張で少し動きが硬く、手を体の前でつないでいる…

タモリ

「これは？」

妖夢

「あ、はい。東方シリーズ第13作目、“東方神霊廟”のポスターです」

タモリ

「へえ〜。もう13作か〜。初出演だったけ？」

妖夢

「あ、自機としてはそうですね」

タモリ

「へえ、もうすぐ発売だっけ？」

妖夢

「そうですね。もうすぐです」

夕モリ

「これ貼っといて」

夕モリ

「花輪のほつも随分と…」

妖夢

「ありがたい限りで…」

夕モリ

「八雲家一同にゆうゆう」

妖夢

「いえ、幽々子様です！」

はにかみつつ夕モリに突っ込む

夕モリ

「あ、霊夢ちゃんに魔理沙ちゃん、早苗ちゃんも…神霊廟つながり
ですかね」

妖夢

「ええもうありがたい限りで…」
緊張で頭が空回りしてるのか何か知らないが花輪にペコペコ頭を下げる

タモリ

「あれ、ZUNさんから…上海アリス幻樂團！すごい花輪だね」

妖夢

「お気づかいありがとうございます！」

タモリ

「え、初の東方キャラですが…」

タモリが席につくの促され、妖夢も席につく

タモリ

「髪切った？」

妖夢

「あ、はい…。初の自機なんで…」

タモリ

「イメチェン？前髪辺りがずいぶんふんわりと…」

妖夢

「ええ、早苗さんに現代風の髪型にしてくださいと頼んでみたらこうなりました」

照れ笑いを浮かべつつ指摘された前髪をさわる。

タモリ

「前と比べてどう？」

妖夢

「そうですね、切った時はずいぶん髪が軽くなって違和感がありました。慣れてくるとずいぶん風が通り抜けて気持ちいいですね

！」

タモリ

「あ、そう〜ここんとこずっと暑いからね〜。スタジオにくるまで大変だったでしょ？」

妖夢

「いやまあ、紫様に送って頂いたので迷うことはなかったですが、やはり刀があると人目を引きますね〜」

タモリ

「銃刀法とかどうだったの？」

妖夢

「大変でしたね〜。なかなか許可が下りなくて…。最終的に上海アリス幻楽団の方々などに支援していただいて…」

タモリ

「うわ〜、大変だったんだ…」

妖夢

「ええ…役所の方々に相当頭を下げましたよ！ついには紫様や映姫様まで役所に押しかけて…」

タモリ

「これがその…楼観剣と白楼剣…だっけ？」

妖夢

「あ、はいこちらです」

楼観剣と白楼剣を腰から抜き、お客さんにも見えるよう少しかかげ

る。

タモリ

「ほく、桜柄の飾り…。斬れる物などあんまりない?」

妖夢

「それじゃ役立たずですよ! 斬れ“ぬ”物などあんまりない、ですよ!」

少し緊張が解けたのか、笑いつつタモリに突っ込みを入れる

タモリ

「はっははは…。それじゃ一つ披露してもらえるかな?」

そういつとADさんが厚さ3cmほどの鉄板を持って来た!

妖夢

「うわ、いつのまに…」

タモリ

「いけそう?」

妖夢

「ええまあ…。あ、お客さん、すいませんが少し身を引いておいてくださいね」

お客さんが少し下がるのを確認すると、刀を帯刀し直し構えを取る

妖夢

「では…いきます!“断霊剣”成仏得脱斬!!!」

スパァン！！

振り下ろされた二刀は鮮やかに鉄板を切断し、桜色の閃光がスタジオ
オにきらめく！

『おおー！！』

妖夢

「…力、弱めたんですけどね」

タモリ

「…わお」

あ然とした顔で鉄板を見つめていた…

）

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当する
アンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

妖夢

「わゝ、凝ったデザインですね」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

妖夢

「そうですねゝ。私これでも庭師の端くれなんで…“庭に桜の木が
ある方”なんてどうでしょうっ？」

タモリ

「ほお……。やっぱり桜が好きなんだ？」

妖夢

「そうですね。一番好きです」

タモリ

「では“庭に桜の木がある方”スイッチオン！」

）

妖夢

「わ！一人！！」

両手で口を覆いつつ、喜びながらモニターを見つめる！

タモリ

「すごい！お、あの人だ！」

照れながら手を上げるお客さんを指さす。

妖夢

「ありがとうございます！！」

ADさんからストラップを受け取ると、すぐに立ち上がり深々とお辞儀する。

）

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!!』

妖夢

「あはは…。私、幽々子様に仕えていますけど…その従者つながりで八雲藍さんを紹介したいと思います!」

タモリ

「おお〜九尾のキツネか〜」

妖夢

「実際に会うと相当な迫力ありますよ、あの尻尾!」

ちようどそのときADさんが見つがった電話を妖夢に渡す

妖夢

「あ、もしもし妖夢です」

藍

「あ、もしもし〜」

妖夢

「今、何されていたのです?」

藍

「ちようどお昼ご飯中です〜見ていましたよ!」

妖夢

「わ、ありがとございます!それじゃあタモリさんに代わりますね!」

受話器を丁寧にタモリに渡す

タモリ

「もしもしタモリです」

藍

「もしもし、八雲藍です。こんにちは」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

藍

「あ、はい。大丈夫です！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

藍

「いいとも〜！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

パチパチパチ…

音楽と共に鳴り響く拍手で無事に終了した…

第一回・魂魄妖夢（後書き）

いや、トーク番組を二次創作するのは大変でした。ほんと芸能人って大変ですよ。タモリさんは本当にすごい方だと思います。何の参考もなくなっていたので少し違和感があるかも…。実際、私はいともをあまり見ないんですよ。時間的に見れないんです。妖夢が髪切ったことをきっかけにひらめいて書いてみましたがいかがでしたか？

読了ありがとうございます！

第二回・八雲藍

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「お盆はどうでした？高速は混んでましたか？」

『そうですね！』

タモリ

「やっぱり列車かな。でも新幹線も混むよね」

『そうですね！』

タモリ

「となると飛行機？でも混むかな？」

『そうですね！』

タモリ

「どうすりゃいいんだよ！」

タモリ

「では今日のゲストに来ていただきましょう。昨日の魂魄妖夢ちゃん
の紹介で、初登場、八雲藍さんです！どうぞ」

パチパチパチパチ！！
拍手と共に藍が登場！

『キレ〜』

『尻尾かわいい〜』

藍

「どうもありがとうございます！」
いつもどおり、両手を式服の袖に入れた中国人のような構えで藍が登場！だが…

フワッ！

藍

「あ、すいません尻尾が…」
登場と共に藍の尻尾がタモリさんの後頭部をさする！

タモリ

「おおぅ…びっくりした〜」

藍

「す、すいません！」
と、頭を下げるとセットに尻尾がぶつかる！

タモリ

「おおつととと…大丈夫!？」

藍

「すみません…」

タモリ

「その尻尾苦労しそうですね。お、それは？」

藍

「あ、はい。栃木県の余笹川ふれあい公園で9/26に行われる第9回那須九尾まつりのポスターです」

タモリ

「へえ、行ったりしてるの？」

藍

「いや、行きたいんですけどね。流石に色々と問題が…。影からこっそり見てる程度で…」

タモリ

「そ、なんだ」

藍

「一度作るのに参加したいんですけどね。日本一長いお稲荷巻き…」

タモリ

「どれくらいあるの？」

藍

「全長124.9mです！」

タモリ

「うへえ〜。そりゃすごい…」

藍

「ぜひ食べたいんですがね…」

タモリ

「そうですか〜。これ貼つといて〜」

藍が席につく

タモリ

「お花も届いてますね〜。白玉楼に八雲家…。お、萃香さんからも！」

藍

「紫様の式だからですかね〜」

タモリ

「あれ、ZUNさんからも…上海アリス幻樂團！」

藍

「ありがとうございます…」

少し照れ笑いしつつうなづく。

タモリ

「これは？マヨヒガ一同って…」

藍

「あ、それおそらく式の橙の部下からでしょう！余計な気を使わせちゃって…」

タモリ

「あの子ちゃんと猫の管理できてんの？」

藍

「大体は出来てるかと…」

苦笑いしつつ答える。実際のところはそうでもないのかも…

タモリ

「しかし大きいね。その尻尾…。見た目はいいけど大変でしょ？」

藍

「ええ…家事の際には大変ですね」

タモリ

「たとえば？」

藍

「テーブルに置いといたお茶碗に尻尾が当たってお茶碗落として割ったとか…」

タモリ

「あゝ、そう言つのありそうだし…」

藍

「でも冬は役立ちますよ？」

タモリ

「確かにそうだろうね」

藍

「座って新聞読んでたら橙が尻尾にくるまってきたりとか」

タモリ

「上質の天然毛布みたいなもんだからね」

藍

「触ってみます?」

そっつい、尻尾を軽く振る。

タモリ

「どれどれ…あ、すごくきめ細かい…。ずいぶん細かい毛だね」

藍

「キツネの式ですからね」

タモリ

「おおっ…こりゃ眠れるわ」

藍

「ありがとうございます!」

タモリ

「主人の紫さんとはどうなの?」

藍

「もう長い付き合いですからね。大抵のことは察しがつくようになったのですが…なにぶん自分の本心を表にあまりだしませんからね」

タモリ

「確かにすこしミステリアスな雰囲気あるからね〜」

藍

「ときどき私でも「何考えているのだろう?」「って思うことありますから」

タモリ

「確かにそんなところあるからね〜。藍さんにも…こっつ、隙のない感じなんだ?」

藍

「いや〜、私と二人きりの時は少し気がゆるんだりしてますね。橙が寝た後、尻尾にくるまったりしてきますから」

『ええ〜!〜!』

タモリ

「あ、そうなんだ〜」

藍

「それに冬眠の前後には少し気も緩んでますし」

タモリ

「冬眠中の仕事は全部藍さんが?」

藍

「そうですね。ただあまりにも難しい仕事は冬眠前に紫様がやってくれるので問題はありませんが…」

タモリ

「仕事ってどんな？」

藍

「結界の管理と八雲亭の警固が主ですね」

タモリ

「敵が来たらくるんくるん回りながら戦うんだ？」

藍

「そうですね。その時尻尾が役立つんですよ」

タモリ

「え、どうゆうこと？」

藍

「尻尾が一つの照準になるんです。飛んでる位置の確認とかに」

タモリ

「あ、そんな役割もあるんだ。橙とはどんな感じで？」

藍

「一言で言つと親子のようなものですかね。いやほんと可愛いくて……」

「いままで凜としていた顔がゆるみにやける藍。」

タモリ

「今が一番可愛い盛りだからね」

藍

「ええもつ…私が言うのもなんですけど可愛いですよ！」
さらに口元が緩む藍。

『あはははは…』

タモリ

「…っと、いったんCMです」

）

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

藍

「おお〜」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

藍

「そうですね〜。ここはやはりキツネなんで…“昨日おいなりさんを食べた人”なんてどうでしょう?」

タモリ

「では“昨日おいなりさんを食べた人”スイッチオン！」

）

藍

「あ、ゼロ…」

タモリ

「あゝ、お盆の時食べたから今は食べないのかな？」

藍

「あゝ、それ考えてなかったなあ…。残念です」

）

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!』

藍

「すみませんねえ。では…紫様を通じて何回か面識がある博麗霊夢さんを紹介したいと思います」

タモリ

「ついにきますか、主人公の定番…」

ADさんがつなげた電話を藍に渡す

藍

「もしもし、藍です〜」

霊夢

「もしもし」

藍

「今なにしてみました？」

霊夢

「お茶飲みながら見てたわ…。いやびつくりした！」

藍

「はは、すみません…。ではタモリさんに代わりますね」
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

霊夢

「もしもし、霊夢です。こんにちは」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

霊夢

「大丈夫です！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

霊夢

「いいとも〜！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

）

第二回・八雲藍（後書き）

第二回目は藍でしたが…いかがでしたか？

短編で出して高評価を頂けたので連載しましたが…私は星蓮船と地
霊殿しかプレイしてないので違和感があるかも…

できるかぎりキャラが言いそうなセリフを考えたいと思います。大
きく外れていたらすいません

このテレフォンショッキングは出来る限り毎日正午に投稿したいと
思っています。夏休み中にはなんとかなりそうです…

読了ありがとうございます！明日も見てくれるかな？

第三回・博麗霊夢

）

タモリ

「こんにちは！」

『こんにちは〜!〜!』

タモリ

「今日は何と、私の誕生日なんですよね〜」

『そうですね!〜!』

タモリ

「同じく8月22日が誕生日の人に、みのもんたさんがいらっしやるんですよ」

『そうですね!〜!』

タモリ

「そしてこの作者の月見草さんも8月22日生まれなんですよ!〜」

『そうですね!〜!』

タモリ

「知らなかっただろ!〜!」

タモリ

「それでは今日のゲストに登場していただきましょう、昨日の八雲藍さんからの紹介で初登場、博麗霊夢ちゃんです！どうぞ」

）

パチパチパチパチ！！

拍手と共に霊夢が登場！

『かわいい〜』

『巫女服似合ってる〜』

霊夢

「ど、どうも…」

普段見た目を褒められることがないからか、少し照れつつ霊夢がタモリさんに近づく。

タモリ

「ん、それは？」

霊夢

「東京ビックサイトで9月11日に開かれる博麗神社例大祭SP2のポスターです」

タモリ

「おお〜。そろそろ例大祭か…。同人誌の発売が主だっけ？」

霊夢

「他にもコスプレや痛車の展示、ゲームやステージイベントなんか

があります」

タモリ

「規模大きいね〜。貼っといてちょうだい！」

霊夢が席に着席

タモリ

「お花もいっぱい届いてますね〜」

霊夢

「うわ…こんなにいっぱい…。持って帰れるかしら？」

タモリ

「持って帰る気!？」

霊夢「流石にもったいないし…」

タモリ

「かなり多いから無理だと思っよう。ZUNさんに上海アリス幻樂団、八雲家に紅魔館、霧雨魔法店に妖怪の山一同…。アリスさんに守矢神社からも…」

霊夢

「うわあ…」

タモリ

「スタジオに入りきれず玄関まで続いていますね〜。おや、霧之助さんからも…」

霊夢

「紫に頼まないと無理そうね…」

タモリ

「ほんとに持っていく気なんだねえ」

霊夢

「そりゃ当然！」

緊張が少し解けたせいか、いつもの口調に戻っていく霊夢

タモリ

「はっははは…。なんか巫女らしくない巫女だねえ…」

霊夢

「そうかしらね？」

タモリ

「けっこう言いたいことズバズバ言うタイプ？」

霊夢

「確かにそうかもね」

タモリ

「“素敵なお賽銭箱はそこ”なんて誘導する巫女はなかなかいないと思うよ…」

霊夢

「いや、そうでもしないと賽銭入れないのよ！みんなして！」

タモリ

「はははは…切実だねえ」

霊夢

「ただでさえお賽銭少ないのに、守矢神社や命蓮寺が出来てより一層厳しくなってるねえ…」

タモリ

「あゝ、確かにそうかもね」

霊夢

「それで博麗神社で夏祭りとかやろうとしてるんだけどね」

タモリ

「お、そんなイベントを？」

霊夢

「ただ予算がね。紅魔館や八雲亭に協力を頼んでみたけど花火がね」

タモリ

「あ、花火やるんだ？」

霊夢

「それがお金かかるんですよ。河童でも作れる人少ないし…」

タモリ

「弾幕を代わりにすればどう？フランちゃんあたりに頼んでみるとか…」

霊夢

「いやあ…恋の迷路とか495年の波紋は似てるけど、それだと花火独特の音とかが無いから代わりにならなくて…」

タモリ

「あゝなるほどな。ならお守りでも売ってみたら？」

霊夢

「売ってるけど売れないのよ…。守矢神社のは神が二人いるから売れるけどうちは神いないし」

タモリ

「いなかったっけ？」

霊夢

「いないのよ！誰に聞いても知らないし！紫も知らないってどうゆうこと!？」

タモリ

「…ご先祖様は神がないのに神社建てたのかもね」

霊夢

「それじゃ信仰するわけがない!！」

タモリ

「ま、異変解決でなんとかなってるでしょ？」

霊夢

「まゝそうね。あと魔理沙とかレミリア、紫からの差し入れとかでなんとか…」

タモリ

「あ、それならいけそうだね。しかし一度は戦った妖怪とよく仲良
くできるね?」

霊夢

「仲良く…ってほどでもないけどね。いやだって、妖怪退治も余り
にやりすぎると恨みを貰うしね」

タモリ

「懐が深いね」

霊夢

「幻想郷は全てを受け入れるのよ!」

タモリ

「すごい考えだね…。いったんCMはいりま〜す」

一日CM

〜

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当する
アンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

霊夢

「へえ〜。サービスいいわね」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか?」

霊夢

「そうねえ…“ここ一週間で神社にお賽銭入れた人”でいこうかしら?」

タモリ

「あ、そうきますか?では“ここ一週間で神社にお賽銭入れた人”スィッチオン!」

）

霊夢

「…いないか?」

タモリ

「お盆でお寺に墓参りに行く人は結構いるんだけどね?」

霊夢

「…博麗神社から博麗寺に変えようかしら?」

タモリ

「それじゃ巫女辞めることになるでしょ!」

霊夢

「あ、そうか。一輪みたいに尼さんになるわね」

）

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい!」

『え〜!!』

霊夢

「そうねえ…友達というより腐れ縁ってところかしら？レミリアを紹介するわね」

タモリ

「吸血鬼の当主ですか…少し怖いですね」

ADさんがつながった電話を霊夢に渡す

霊夢

「もしもし、霊夢よ」

レミリア

「もしもし…」

霊夢

「今なにしてた？」

レミリア

「紅茶飲みながら見てたわ…。私を指名するとは、あなたやはり見る目があるわね！」

霊夢

「そう…。じゃあタモリさんに代わるわね」
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

レミリア

「もしもし、レミリアよ。初めまして」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

レミリア

「大丈夫よ！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

レミリア

「いいともー！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

）

第三回・博麗霊夢（後書き）

え、第三回となりました。予想以上に好評の感想をいただきありがとうございます。ありがとうございます。

今日は私、月見草の誕生日なんで同じ誕生日のタレントさんを調べてみたらタモリさんと一緒に本当にびっくりしました！何かの縁ですかね！？

これからも頑張っていきますのでよろしくお願いいたします。明日も見てくれるかな？

第四回・レミリア・スカーレット

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちははー！！』

タモリ

「あと一週間ほどで夏休み終わっちゃいますね」

『そうですね！』

タモリ

「どんな夏休み過ごしましたか？海行きました？」

『そうですね！！』

タモリ

「でも山でキャンプもいいよね」

『そうですね！！』

タモリ

「私の夏はずっと“スタジオ(ここ)”です
地面を指さし苦笑いするタモリさん

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日の博麗霊夢さんからの紹介で初登場、レミリア・スカーレットちゃんです！どどどぞ〜」

〜

拍手と共にレミリアがさっそうと登場！

『可愛い〜！〜！』

『レミリア〜！〜！』

レミリア

「ふふ…ありがとう」

優雅に笑いつつ、レミリアがタモリさんのもとに近づく

タモリ

「お、それは？」

レミリア

「少し早いけど…九月中旬にフランスのテン・エミルタージュで開催されるブドウ収穫祭のポスターよ！〜」

タモリ

「え！？行ったりするの！？」

レミリア

「不本意だけど…子供に変装してね」
少ししかめっ面になりつつレミリアが答える。あまり言いたくなかったらしい…

タモリ

「はっははは…そりゃ大変で…」

レミリア

「バレたら最悪、カトリック教徒達と戦うはめになるからね」

タモリ

「そうまでして行くんだ…」

レミリア

「もう大変よ…。咲夜が保護者役。時折鼻血が出てるのが妙に気になるわ…」

タモリ

「メイド冥利に尽きるってやつなんでしょ？ね…どんな祭りですか？」

レミリア

「ん〜、仮装パレードもあるけど…最大の魅力はそこで振る舞われる新酒のワインね。たまらないのよ〜」

タモリ

「いつものヴィンテージ物とはまた違うんだ？」

レミリア

「新酒はまだ発酵途中で、甘く濁ったワインなのよ。それにうちのヴィンテージはほとんど咲夜が急速に反応させて作ったものだしね」

タモリ

「そうですか〜。これ貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻樂團、紅魔館、妖精メイド一同。あ、博麗神社からも…」

レミリア

「あら、靈夢がきくじゃ…」

そこでふと、レミリアがあることに気づき目を丸くする

レミリア

「ってこれ、昨日靈夢が貰った花を寄せ集めたものじゃない！なんで水仙の花と、私あげた紅いバラが一緒になってんの！アンバランスでしょー！」

花を指さしツッコむレミリア

タモリ

「新しく花を買う余裕なかったんでしょーな…」

タモリさんも流石に苦笑。レミリアにはれないよう含み笑いを浮かべつつ司会を務めている。

レミリア

「まあいいわ…」

少し呆れつつレミリア着席

タモリ

「しっかし…結構西洋の祭り行ったりしてんだ？」

レミリア

「そうね。色々見たわ〜。パリのルーブル美術館とか…」

タモリ

「へえ〜」

レミリア

「出来た時から人が多いから一度きりしか行ったことないけどね」

タモリ

「出来た時って…すごいセリフだねえ」

レミリア

「設立当時は凄かったわ〜。あの時は酸性雨なんてなかったから石像がきれいで、パリ自体が一つの美術館みただったわ！」

タモリ

「実際見た人に言われると説得力あるなあ。500歳だっけ？」

レミリア

「まあ500歳なんてまだまだ若いけどね。紫とかあの月の姫様とかはいくつなんだか…」

タモリ

「…なんか想像をはるかに超えそうだね〜」

レミリア

「まあ聞いたらもめ事になりそうだから聞かないけどね」

タモリ

「へえ〜。最近はどうですか？」

レミリア

「そうねえ…ちょっと不満かな？」

タモリ

「とうとうと？」

レミリア

「西洋のキャラが少ないなあ…と思ってね」

タモリ

「ああ、確かに…」

レミリア

「私なんかの横文字のキャラ自体少ないし、西洋風となると…紅魔館メンバーにアリス、プリズムリバー…数えるほどしかないのよ！」

タモリ

「服装だけなら西洋風の人いっぱいいますけどね」

レミリア

「ほんとよ！特に最近出てきたあの聖白蓮！寺にいたのに紫と金の髪で魔女服みたいな着てたのにはびっくりしたわ！！」

タモリ

「知らない人が見たら寺の住職には見えないだろうね…」

レミリア

「文々。新聞で写真見た瞬間飲んでた紅茶吹きこぼしそうになったわよー！」

タモリ

「まさにスカーレットデビル。ドレスが真っ赤に…」

レミリア

「だから西洋妖怪の代表として自機になりたいのよ！」

タモリ

「ええ！？でもレミリアはかなりの異変に関わっていない？」

レミリア

「そうなんだけど、人数多すぎてちょっとね…。だから昔の永夜異変の時みたいに出たいのよ！…」

タモリ

「ああ、咲夜さんと一緒に異変解決に行ったあの…」

レミリア

「そう、あの時みたく出たいんだけどね…」

タモリ

「でも昼間は外歩くと危険だからね、レミリアの場合」

レミリア

「私、病弱っ子なのよ」

タモリ

「…吸血鬼にあるまじきセリフですねえ」

）

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

レミリア

「さて…。どういこうかしら？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

レミリア

「うん…。私、B型の血液が好きなんで…“家族全員がB型の人”でいこうかしら？」

タモリ

「では“家族全員がB型の人”スイッチオン！」

く

レミリア

「あ、いた！一人！」

手で口を押さえ驚きつつ、ADさんからストラップを受け取る

タモリ

「あ、あの人だ！」

満面の笑みで手を上げる一人の女性を指さす。

レミリア

「へえ…：そうなんだ」

タモリ

「あの、そんな獲物を見つけたようなキラついた眼でお客様を見るの止めてもらえます？怖いですよ？」

レミリア

「冗談よ。だいたい死ぬほど吸わないし」

『家に来て〜！！吸っていいわよ〜！！』

レミリア

「あら、ありがとう」

タモリ

「すごい熱烈なファンだなあ…」

）

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！！！！』

レミリア

「そうねえ…：友達というより部下ってとこね。美鈴を紹介するわね」

タモリ

「門番さんですか」

ADさんがつながった電話をレミリアに渡す

レミリア

「もしもし、私よ」

美鈴

「……」

レミリア

「もしもし？美鈴？」

美鈴

「あ、はい何でしょうかお嬢様！見えましたよ！」

レミリア

「何よさっきの空白の時間？まさかあんた…私が出演中に寝てたんじゃないでしょうね！？」

美鈴

「いえいえ！！滅相もございません！！」

レミリア

「まあいいわ…。じゃあタモリさんに代わるわね」
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

美鈴

「もしもし、美鈴です。初めまして！」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

美鈴

「大丈夫です！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

美鈴

「いいとも！」

タモリ

「はい、お待ちしております」

）

第四回・レミリア・スカーレット（後書き）

まだ第四回なのに好評いただきありがとうございます！

自身、初の毎日投稿を目標に頑張っていますが：知らないこと多くて大変です。

初めのタモリさんとお客さんとの掛け合いで既に迷うんですね。毎日考えてくるタモリさんは本当にすごいです。

次回のゲストのリクエストは感想で受け付けております。無理がない限り（今回と次回のゲストに何の接点もないなど）それを優先的にしたいと思います。

明日も見えてくれるかな？

第五回・紅美鈴

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは〜!』

タモリ

「最近は夕立が多いですね〜」

『そうですね!〜!』

タモリ

「いきなり雨降ってきてびっくりするんですね」

『そうですね!〜!』

タモリ

「傘がいいけど激しい雨には意味ないし、やはりカッパかな?」

『そうですね!〜!』

タモリ

「でも着るの面倒なんですよね〜」

『そうですね!〜!』

タモリ

「まあどちらも雷には意味無いんですけどね」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日のレミリア・スカーレットさんから紹介で初登場、紅美鈴さんです！どうぞ」

）

拍手と共に美鈴が登場！

『可愛い〜！！』

『綺麗〜！！』

美鈴

「はは…どうも」

頭に手を当て照れ笑いしつつタモリさんの元にやってくる。

タモリ

「お、それは？」

美鈴

「9月11日に広島県立総合体育館で開催される、第28回オープントーナメント全中国空手道選手権大会のポスターです！！」

タモリ

「え？まさか出場とかは…」

美鈴

「いや〜、やってみたいですけど流石に…ねえ？」

少し首をかしげつつ苦笑いする

タモリ

「あゝ、確かに人間と妖怪が拳を交えたらヤバいかな」

美鈴

「だから映像で見るだけなんですけどね」

タモリ

「どう？妖怪から見て？」

美鈴

「いやあゝ、人間といえど『この人すごいな』って人いっぱいいますよ！動きとかすごく滑らかで…いや凄いな…」
あごに手を当てうなずく

タモリ

「あ、そうなんだ！相当生きてるからてつきり、まだまだ甘いとか言うかと」

美鈴

「いえいえ、そんな…。武道の道はもつと奥深いです。私がそんなこと言えませんよ…」

タモリ

「そうですかゝ、貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますねゝ。ZUNさんに上海アリス幻楽団、紅魔館…。守矢神社からも！意外ですね、守矢神社からは…」

美鈴

「以前に非想天則で共演したからですかね。ありがたいです」

タモリ

「すごいですね、ボタンに菊、蘭にサザンカ、梅に水仙、レンゲも…」

美鈴

「…ありがたいんですけど、何でみんな中国の十大名花を選んでるんですかね？」

若干納得いかないような顔で美鈴が席につく

タモリ

「最近どうですか？」

美鈴

「そうですね。前に比べればマシになったかと…。格闘ゲームですが自機にもなれましたし」

タモリ

「活躍してますからね」

美鈴

「私からしてみれば弾幕より武術の方が断然得意なので嬉しいです！まさか思う存分拳を交えられる日が来ようとは…」

タモリ

「弾幕では紅魔郷と文花帖以来出てなかったからね」

美鈴

「紅魔異変の後は大変でしたよ。中国だの“みすず”だの…」

タモリ

「はははは…。確かに読みづらいからね」

美鈴

「それにパソコンで“めいりん”って打っても出ませんからね…。
かくいう作者も“みすず”って打って変換してますし」

タモリ

「まあでも、“みすず”っていう店ありますからね。函館に…」

美鈴

「え、そうなんですか!？」

タモリ

「1932年創業の老舗のコーヒー焙煎工房ですよ。知らなかった
?美鈴みすずコーヒーなんてのも販売してますよ?」

美鈴

「うわ、じゃあそれが原因なのかなあ…」

タモリ

「地名や人名にもありますからね。アナウンサーの高橋美鈴さん、
女優の田中美鈴たなかみれいさん、とかも…」

美鈴

「あちゃ、誤解が生まれるわけだなこりゃ…。いつそ改名しようか
な?」

頬に手を当て苦笑する美鈴

『ええ〜!』

タモリ

「止めときなって…より一層ややこしくなるから!」
笑いつつそれを制止するタモリさん

タモリ

「仕事の方はどうなの?」

美鈴

「いつもと変わらず順調ですね。ときどき咲夜さんから注意されてはいますけど」

タモリ

「あ、そうなんだ〜」

美鈴

「でも少しの小言だけなんですよね。昔ほど警戒して屋敷を守る必要ありませんし。だいたいあの巫女や魔女は止めない方がいいんですよ。逆に」

タモリ

「え、それどういうこと?」

美鈴

「あいつらは確かに大した用もなく屋敷に来ては、ご飯や魔術書を持って行くんですけど…」

タモリ

「やっぱりそうなんだ〜」

美鈴

「でも無理に止めて門の前で戦うと、かえって被害が大きくなるんですよ。室内だと二人も流石に加減するんですけど、野外だと遠慮なく暴れるから…」

タモリ

「あゝ、なるほど〜」

美鈴

「魔理沙なんか外だと遠慮なくマスタースパーク撃つから、門はむちゃくちゃになるし、爆風で花壇の花がなぎ払われるし…」

タモリ

「花が曲がったりしちゃうんだ？」

美鈴

「そうなんですよ〜。だから止めないのが暗黙のルールになりつつあるんです。お嬢様もパチュリー様も認めちゃったみたいで…」

タモリ

「え？じゃあ君の仕事がなくなるんじゃない？」

美鈴

「だから“霊夢や魔理沙以外の、紅魔館の人たちが会う必要のない人を通すな”と命じられているんです。例えばチルノとかは通すなと…」

タモリ

「だんだん仕事が変わってきているんだ」

美鈴

「時代の流れですかね。真面目に緊張感を持って門を守ってた時代が懐かしい…」
ちよつと遠い目で天井を見つめつつ、美鈴がつぶやく

タモリ

「今となつてはちよつと想像しづらいな…。一旦CMです」

）

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

美鈴

「うーん、どうしようかなあ？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

美鈴

「それじゃあ…“ 武道で三段以上を持っている人” にします」

タモリ

「武道ならどれでもいいんだ？」

美鈴

「はい。空手、柔道、剣道、何でも構いません」

タモリ

「では“武道で三段以上を持っている人”スイッチオン！」

）

美鈴

「あちゃ〜、三人…」

ひたいに手を当て悔しがる美鈴

タモリ

「意外にいたねえ？」

美鈴

「やはりまだまだ日本は武道が盛んですねえ…。流石、侍の国」

タモリ

「侍か〜。なんか久しぶりに聞いたなあ…」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！！』

美鈴

「それじゃあ…。非想天則で共演したチルノちゃんを紹介しますね」

タモリ

「氷の妖精さんですか？」

ADさんがつながった電話を美鈴に渡す

美鈴

「もしもし、美鈴です」

チルノ

「んあ、何か用？」

美鈴

「なんかすつごくだらけてますね…。何してたんですか？」

チルノ

「いや、暑いから日陰で大ちゃんと一緒にかき氷食べてた！」

美鈴

「そうですか。じゃあタモリさんに代わりますね
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

チルノ

「もしもし！チルノだよ」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

チルノ

「ん〜、大丈夫だよ！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

チルノ

「まっかせとけ！」

美鈴

「ええ！？」

大妖精

「チ、チルノちゃん違うでしょ！！貸して！！」

チルノ

「え、え！？」

急にノイズが入ること数秒後……

大妖精

「あ、あのえつと…いい、いいとも！！」

しどろもどろになりつつ大妖精が代わりに言っちゃった！

チルノ

「い、いいとも〜？」

わけもわからないままそれに続くチルノ

タモリ

「はい、お待ちしてます……」

笑みを浮かべつつ答えるタモリさん

）

タモリ

「明日大丈夫かなあ？」

明日の放送に少し不安になるタモリさんでした…

第五回・紅美鈴（後書き）

第五回、紅美鈴編 いかがでしたか？

毎回、タモリさんの前口上とポスターに苦戦しています。ポスターは東方関係のイベント、もしくはゲストが参加しそうなイベントにしています。

違和感のない仕上がりにいいのですが…

今回、美鈴という人名、地名を調べたのですが…。

白鳥美鈴というAV女優が出てきてびっくりしました。ネタとして出そうかなとは思いましたが止めました。

下ネタ路線にはいかないことにしています。いいともは下ネタには行かない！と思う…

今回はチルノです！乞うご期待！明日も見てくれるかな？

第六回・チルノ

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはは〜!〜!』

タモリ

「夏だつて言うのに寒いね〜!」

『そうですね!〜!』

タモリ

「スタジオがすごい冷気に包まれています」

『そうですね!〜!』

タモリ

「一足早くスーツの上着を着ました。なんかすごく新鮮な感じですよ」

『そうですね!〜!』

タモリ

「街のサラリーマンはみんな半袖ですからね。すごい違和感を感じます」

『そうですね!!』

タモリ

「まさかこの歳で学生の衣替えの気分を味わうことになるとは……」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日の紅美鈴さんからの紹介で初登場、チルノちゃんです!どうぞ」

）

拍手と共にチルノが元気よく登場!

『可愛い〜!!』

『チルノ〜!!』

チルノ

「ふふん、ありがと。私のすごさわかってるわね!」
胸を張り自慢げにタモリさんの元にやってくる。

タモリ

「お、それは?」

チルノ

「まだ先の話になるけど、二月初めに開催されるさっぽろ雪まつりのポスターよ!!」

そついい誇らしげにポスターを広げて見せるチルノ

タモリ

「お祭り行くの?」

チルノ

「行きたいんだけど無理だから、こーりん堂にある本で見てる」

タモリ

「ガイドブックとかを？」

チルノ

「あゝ、そんなやつ。すごいよね。あんな雪像作るなんて！」

タモリ

「そゝだよねゝ。よくあんな凝ったの作れるよ。リアルな物もいっぱいあるし」

チルノ

「あたかも行きたいんだけどねゝ。こゝんなおっきなあたいの像を作って欲しい!!」

両手をいっぱいに広げてその願望をアピールする

タモリ

「問題はその水色の羽だねゝ。どうやって作ればいいのか？」

チルノ

「だいじょゝぶ！氷で作ればいい!!」

タモリ

「それじゃ雪像じゃないでしょ！まあいいや…。これ貼つといてちようだい！」

タモリ

「お花もずいぶん届いていますね。ZUNさんに上海アリス幻楽団、大妖精ちゃん、リグルに三月精からも！」

チルノ

「ん？三月精が花わたすなんてねえ…まあいいわ！あたいのすごさに感動したんでしょ！」

タモリ

（彼岸花送ってきてるから、おそらく皮肉なんだろうけど…。黙っておこう）

タモリ

「最近はずいぶん活躍してるようだねえ？」

チルノ

「ふふん。あたいなら当然ね。なんたって“さいきよー”なんだから！」

タモリ

「強気だねえ…。でも夏はけっこうツライでしょ？」

チルノ

「へーき…といたいたいけど、ここ数年はきついな。なんか暑さが増している気がする」

タモリ

「あ、幻想郷にも異常気象の影響が？」

チルノ

「たしかに異常だね。さすがのあたいも“ねっとーしょー”になり

かけたし」

タモリ

「いや熱中症ね！冬妖精にしてみれば熱湯風呂に入れられたような気分だろうけど！」

チルノ

「暑いからずっと湖で水浴びしてたわ！これはまちがいに異変だよ！なんでもあの巫女は動かないの？」

タモリ

「いやいや、これは巫女でもどうにもならんでしょう……」

チルノ

「おかげでレティも早く消えるようになったし……。きっとあの地下のカラスのせいね！今度ぎったんぎったんにしてやる！」

タモリ

「止めときなさいって、ろくなことにならないから……」
興奮してきたチルノをなだめるタモリ

タモリ

（今まで見たことのないくらい不毛な戦いになるだろうなあ……。話もかみ合わないまま戦って、結局つやむやに終わるかも）

タモリ

「それじゃ、今は暑い事以外は何の不満もないんだ？」

チルノ

「いや、まだやりたいことがある……！」

タモリ

「え、何？」

チルノ

「妖精初のEXボスになりたい！！」

『ええ〜！？』

チルノ

「何で意外そうな顔してんのよ！」

タモリ

「おお、ずいぶん大きく出たねえ！」

チルノ

「いやだつてさ、さいきよーのあたいが2ボス止まりじゃ嫌でしょ？」

タモリ

「いやでも、EXボスっていったら強い人ばかりだよ？フラン、藍、紫、妹紅、諏訪子、こいし、ぬえ…」

チルノ

「カエルに出来るならあたいだつて出来るでしょ！いつもカエルを凍らせてるんだよ？楽勝、楽勝！」

タモリ

「いやいや！あの人神様だからね！？土着神の頂点だよ？」

チルノ

「神と言ってもたかが力エル！」

タモリ

「ZUNさんは認めないんじゃない？EXボスの大役は？」

チルノ

「うーん…じゃあ手始めに紅魔館に攻め入って、吸血鬼の姉妹でも倒してみれば認めてくれるかな？」

タモリ

「まず門番とメイドに止められるでしょ！」

チルノ

「そこは大ちゃんトリグルに協力してもらい、あたいはあのレミリアを倒す！」
腕を組みつつ自信満々に語るチルノ

タモリ

「そしたらカリスマブレイクどころの騒ぎじゃないでしょ！当主名乗れなくなる！」

チルノ

「やってやれないことは無い！」

タモリ

「こつこつ元気が活躍する秘訣なのかもしれませんね」

）

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

チルノ

「よーし！当ててやる！」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

チルノ

「それじゃあ…“カエルを凍らせたことがある人” 調べてみよう！」

『ええ〜！！』

タモリ

「いやいや！いるわけないでしょそんな人！」

チルノ

「そんじゃあ…“冬眠しているカエルを見たことある人” ならどう？」

タモリ

「あ、確かにそれなら…。では“冬眠しているカエルを見たことある人” スイッチオン！」

）

チルノ

「あちやゝ、いないか…」

タモリ

「意外にいなかったねえ？」

チルノ

「じゃあ力エルを凍らせたことある人は？」

タモリ

「一応やってみます？じゃあスイッチオン！」

チルノ

「ゼロかゝ。人間ってのはわからない…」

タモリ

「妖精にしてみればそうかもねゝ」

ゝ

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『えゝ！！』

チルノ

「それじゃあ…。大ちゃんを紹介する！」

タモリ

「あ、やはり大妖精さんですかゝ」

ADさんがつながった電話をチルノに渡す

チルノ

「もしもし、チルノだよ」

大妖精

「もしもし？」

チルノ

「今何してた？」

大妖精

「香霖堂で見てたよ！まったくもう…私、嫌だからね！あの紅魔館に攻め込むなんて…」
呆れたような声で語る大妖精

チルノ

「え、だめ？」

大妖精

「だめ！まあとにかく、タモリさんに代わって
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

大妖精

「もしもし！大妖精です。こんにちは！」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

大妖精

「はい、大丈夫です！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

大妖精

「いいとも〜!!」

タモリ

「はい、お待ちしております！」

）

第六回・チルノ（後書き）

早いもので六回目となりました。こんなハイペースで連載するのは自身初なんですごく変な気分です。

目次見るたびに「あれ、もうこんな書いたっけ？」といった感じですよ。

今回のチルノ編は結構難産でしたね。なんでだろう？書きやすいイメージだったけどずいぶん苦労しました。

私はどうも性格が単純な人ほど書きづらいのかもしれない

次回は大妖精です！明日も見えてくれるかな？

第七回・大妖精（前書き）

今回は、前回のチルノ編を読んでいないとわかりにくいですが、読んでいない方はチルノ編を一読することをおすすめします。

第七回・大妖精

）

タモリ

「はい、こんちは」

『こんちははー！..!』

タモリ

「こんこんちは」

『こんこんちはー！..!』

タモリ

「こんこんこんこんちは」

『こんこんこんこんちはー！..!』

タモリ

「こんこんこんこんこんちはー！..!」

『こんこんこんこんこんちはー！..!』

タモリ

「さあ、読者の皆さんはきちんと読めましたか？」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日のチルノちゃんの紹介で初登場、大妖精ちゃんです!どうぞ」

拍手と共ににはにかみつつ大妖精が登場!

『可愛い〜!』

『大ちゃん〜!』

大妖精

「ど、どうも初めまして!大妖精と申します!本日は、あの、ご足労ありがとうございます!」

緊張しつつ、まずはお礼の言葉を述べる大妖精

タモリ

「はっはは…。まあ楽に。それは?」

大妖精

「はい、長野県で開催されている女神湖妖精祭りのポスターです!」

タモリ

「ん?聞いたことないなあ…」

大妖精

「2010年5月に第一回が開催された比較的新しいお祭りなんです。それから不定期に行われています」

タモリ

「へえ〜。どんなことするの?」

大妖精

「専門家の方をお呼びしてのフェアリートークとか、ミュージックコンサートとかですね。日本のお祭りとはちよつと趣向が違つかも…」

タモリ

「へえ〜。貼つといてちようだい！」

タモリ

「お花もずいぶん届いていますね。ZUNさんに上海アリス幻樂團、リリーホワイトちゃんに三月精…あ、チルノちゃんからも！」

大妖精

「わー、ありが…」

お礼をいいつつお花を見た瞬間、大妖精は目の前が真っ白になった！

大妖精

「つて！チルノちゃん…氷で作ったひまわりの花束じゃないの！すごい！」

そこには光り輝く氷のひまわりのオブジェがあった！

タモリ

「こりやまた凝つたの作つたね〜」

大妖精

「すごいです…。でも…」

そう、こんな物を作つたら…

タモリ

「でも…すでに溶けてきてますね。花の下に水たまり出来てる…」

大妖精

「すいません…気持ちはありがたかったのですが」

という訳で、チルノの力作“氷の花束”は早々に片付けられてしま
った…

タモリ

「最近はどう?」

大妖精

「あの、これ昨日のチルノちゃんの後日談になるのですが…。昨日
は大変でしたよ…。あのあとチルノちゃん、本当に紅魔館に攻め入
ろうとして…」

タモリ

「え!?!行つたの?」

大妖精

「いえいえ、私が全力で引き止めましたよ!門番さんならまだ穩便
に済みますが…。これがメイドさんなら大変なことに…」

タモリ

「それこそナイフの雨あられですからね」

大妖精

「それで、なんとかチルノちゃんをなだめていたのですが…。目を
離れた隙に、今度は地底のお空さんにケンカしに行つて…」

タモリ

「ええ!!」

大妖精

「私が来た時はすでに弾幕の嵐…」

タモリ

「で、また止めに？」

大妖精

「止められませんよ…。(妖精界では)最強のチルノちゃんと、神様を宿したお空さんですよ!私が割って入れるわけがないです…」

タモリ

「で、結局どうなったの？」

大妖精

「話もかみあわないまま戦って、そうこうしてるうちにお隣さんと、さとりさんが止めに来てくれたんですけどね」

タモリ

「結局ぐだぐだになったんだ!」

大妖精

「しかも本人たちは戦っているうちに当初の目的を忘れていて…本当に不毛な戦いでした…」

タモリ

「苦労してんだね。自分のことはどう?満足?」

大妖精

「あ、はい。私はもともと好戦的ではありませんから、中ボスで丁度いいと思っています。それに、本名なくとも“大妖精”として定着していますし」

タモリ

「あ、確かにね」

大妖精

「でも、少し注文を言わせてもらえるとするなら……。能力が欲しいですね」

タモリ

「あゝ。“何々程度の能力”ってやつ？」

大妖精

「そうですね！私も東方キャラの端くれですし、何か欲しいんです！だって能力ないの私と小悪魔ちゃんぐらいのものですよ！」

『ああ〜！』

タモリ

「あ、確かに……」

大妖精

「中ボス界の中でも最低レベルですよ……。スペカはないし、能力ないし……」

少し涙目になりつつ力説する大妖精

タモリ

「まあまあ…。でもいいんじゃない？なんだかんだ言いつつもキラの一人として定着しているのは」

大妖精

「それはそうですけど…」

タモリ

「それに能力と言っても色々だよ？霊夢なんて“空を飛ぶ程度の能力”だよ？主人公なのに」

大妖精

「いいじゃないですか！私にはその肩書きすらないんですよ！うう…能力を持つ人が妬ましい…」

タモリ

「ちよつとちよつと！だんだんパルスイさんみたいになってるから！」

大妖精

「ZUNさん！ご一考よろしくお願いします！！」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

大妖精

「はい！頑張ります！」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

大妖精

「それじゃあ…“サイドテールにしたことある人”でお願いします
！」

タモリ

「では“サイドテールにしたことある人”スイッチオン！」

）

大妖精

「ああ、5人もいましたか？」

タモリ

「あんまり街では見ないけど…文化祭とかでやってるのかな？」

大妖精

「でもうれしいです！サイドテールにしている人がいて！」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！〜！』

大妖精

「では…。リリーホワイトさんを紹介したいと思います！」

タモリ

「あ、春妖精さんですか。でも大丈夫？」

大妖精

「大丈夫です。会話はちゃんと成立しますから」

ADさんがつながった電話を大妖精に渡す

大妖精

「もしもし、大妖精です」

リリー

「もしもし？お久しぶりです」

大妖精

「今何してました？」

リリー

「彼岸にいました。ここは年中過ごしやすいですから」

大妖精

「そうですね。タモリさんに代わりますね」
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

リリー

「もしもし！リリーホワイトです。こんにちは！」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

リリー

「はい、大丈夫です！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

リリー

「いいとも〜！！」

タモリ

「はい、お待ちしております！」

）

第七回・大妖精（後書き）

大妖精は書きやすかった。

苦勞人のイメージを膨らませていったらすらすら書けましたね。

苦勞人だからこそチルノとコンビ組めるんでしょうけど。

次回はリリーホワイトです！明日も見えてくれるかな？

第八回・リリーホワイト

）

タモリ

「はい、こんにちは！」

『こんにちはは〜！〜！』

タモリ

「暑いですね〜」

『そうですね〜！〜！』

タモリ

「台風が2つも近づいているそうですね！」

『そうですね〜！〜！』

タモリ

「速度は“ゆっくり”だそうです

『そうですね〜！〜！』

タモリ

「ゆっくりしててね〜！」

『そうですね〜！〜！』

タモリ

「いい訳ないだろ！」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日の大妖精ちゃんの紹介で初登場、リリーホワイトちゃんです！どうぞ〜」

〜

拍手と共にリリーホワイトが登場！

『可愛い〜!!..!』

『リリー!!..!』

リリーW

「リリーですよ〜!!..!」

両手を広げ、まずは決まり文句を言うリリーホワイト。その時!!

???

「ちょっと待った!!..!」

タモリ

「え!?!何?」

リリーB

「私も出さないよ!どうせなら!」

いきなり生放送にリリーブラックが乱入!!

タモリ

「ええ！？なんでリリーブラックが？」

リリーB

「いいじゃないの！私たちは二人で一つ！」

リリーW

「ええ〜！？…まあいいでしょう。特別ですよ？」

タモリ

「いいとも史上初だと思えますよ？こんな登場…。では改めて、ゲストはリリーホワイトちゃんとリリーブラックちゃんです！」

リリーB

「よろしく〜！」

タモリ

「お、それは？」

リリーW

「はい。日本三大美祭の一つ、岐阜県の高山祭のポスターです。春の山王祭（4月14・15日）と、桜山八幡宮の秋の八幡祭（10月9・10日）の二つがあります」

タモリ

「すごいねえ…日本三大美祭！山車とか出るの？」

リリーW

「屋台という山車みたいなものがあります。からくり人形仕掛けが施された屋台で、総勢数百名におよぶ祭行列、お囃子や雅楽、獅子舞もありますよ！」

リリーB

「からくり人形は歴史ある匠の技です。にとり直伝の！」

リリーW

「いや違つてしょ！」

タモリ

「はっはは…貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻楽団、大妖精に三月精、白玉楼に冥界からも！」

リリーB

「まさか映姫様からくるとは…。律儀ですねえあの人…」

リリーW

「裁判長ですからね…。とはいえ私達にまでとは」

タモリ

「最近は…また中ボスとして出演したそうですね？」

リリーW

「ありがたいですね」

リリーB

「本当に…でもセリフないのがちょっと残念…」

タモリ

「え、あるでしょ？」

リリーW&B

「「春ですよ」の「っ」だけでしょう!？」

タモリ

「さすが…きつちりカブリましたね。姉妹？」

リリーW

「違いますよ…。でも、名は知れてるのにセリフないですからねえ…」

タモリ

「何かしゃべりたいんだ？」

リリーB

「あたしの屍を越えて行け」とか？」

リリーW

「不釣り合いにも程があるでしょ!?!本気でピチユられたらどうするの!?!？」

タモリ

「霊夢さんなら間違いなく夢想封印されますね」

リリーW

「怖すぎますよ…」

タモリ

「まあでも、春妖精のポジションが確定していますよね？」

リリーB

「いやまあ確かに……。でも正直面倒なんですよね」

タモリ

「ええ!？」

リリーW

「私たち二人で幻想郷中に春を広めるの大変なんですよ……」

タモリ

「ああ、確かに……」

リリーB

「とはいえ、サボると異変と間違われて騒ぎになりますからね」

タモリ

「ああ、妖々夢の時みたいになっちゃったんだ？」

リリーW

「そうなんですよ……。レティとチルノは喜んでですけどね」

タモリ

「まあそうでしょうね」

リリーB

「冬が長く続いて欲しいからって、チルノが弾幕勝負挑んできたこともありましたけどね」

タモリ

「え？そうなんですか？」

リリーW

「妖精総出で相手しましたけどね」

タモリ

「なにそれ！？妖精大戦争？」

リリーW

「いえ、主にレティと大妖精が説得したんですけどね」

タモリ

「あ、総出で説得したんだ？」

リリーB

「さすがに弾幕で争うと霊夢さんに退治されますからね」

リリーW

「それで何か効率的に春を伝えられないかな？って思いまして」

タモリ

「でも電話もパソコンもありませんからねえ、幻想郷は」

リリーB

「だから半鐘で知らせようかと」

リリーW

「火事と間違っでしょ！紛らわしいよ！」

リリーB

「はるですよ」って言いながら鐘を鳴らす訳

タモリ

「絶対にダメでしょ！火消しが来ちゃいますよ！」

リリーB

「団長が妹紅の？」

リリーW

「いや、やってそうだけど！」

タモリ

「それじゃ弾幕で知らせるとか？」

リリーW

「それが、スペカありませんもの……」

リリーB

「だから、にとりに頼んで作ってもらいました」

タモリ

「何を？」

リリーB

「拡声器」

リリーW

「選挙じゃないのよ！？」

）

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

リリーW

「わゝ、どうしようかなゝ！」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

リリーB

「それじゃあ…“春の甲子園に出場または観戦した人”をお願いします—！」

タモリ

「あ、知ってるんだ？」

リリーW

「ルールはよくわかりませんが知っています。とても楽しそうですよね」

タモリ

「では“春の甲子園に出場または観戦した人”スイッチオン！」

）

リリーW

「2人ですか」

リリーB

「うっん、残念…」

タモリ

「意外にいたんですねえ…」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！！』

リリーB

「では…。レティさんを紹介したいと思います！」

タモリ

「え、冬のレティちゃんを？大丈夫？」

リリーW

「大丈夫です。何とか来れますから」

ADさんがつながった電話をリリーWに渡す

リリーW

「もしもし、リリーホワイトです」

レティ

「もしもし？お久しぶりです」

リリーW

「今何してました？」

レティ

「妖怪の山の洞窟です。溶け残った雪があるので……」

リリーW

「そうですね。タモリさんに代わりますね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

レティ

「もしもし。レティです。こんにちは！」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

レティ

「はい、大丈夫です！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

レティ

「いいとも〜！〜！」

タモリ

「はい、お待ちしています！」

）

第八回・リリーホワイト（後書き）

第八回、リリーW & amp ; Bでしたが、いかがでしたか？

リリーブラック登場で作品初の二人ゲストとなりました。何か少し漫才みたいになりましたが……。しゃべらないキャラ動かすところな
ります、すみません。

二人とも真面目に話すと面白くないし、二次創作みたいにリリーB
をツンデレみたいに書くのは私には無理だし…というわけでこうな
りました。

次回はレティさん！果たして登場できるのか？明日も見てくれるか
な？

第九回・レティ・ホワイトロック

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは〜!』

タモリ

「暑い日が続きますね〜」

『そうですね!〜!』

タモリ

「こんな日に冬妖怪呼んでも大丈夫なんですかね?」

『そうですね!〜!』

タモリ

「エアコン28 で何とかなるかな?」

『そうですね!〜!』

タモリ

「人間でもつらい温度なんですけどね〜。汗がにじみ出る……」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日のリリーホワイト&ブラックちゃんの紹介で初登場、レティ・ホワイトロックちゃんです」

「!どござ〜」

〜

拍手と共にレティが登場!

『ええ〜!!』

『レティ!?!』

レティ

「どうも〜」

現れたレティ、だがすごくお腹や胸が膨らんでいる!!

タモリ

「え…あの、レティちゃん…。もしや…おめでた?」

レティ

「違うわよ!!お相手なんていませんし!これですよ!」
「そっぴい藍色のベストを脱ぐと!」

タモリ

「うわ!こんなにいっぱい保冷剤入れてるの!」
「ベストの裏には凍っている保冷剤がたくさん!」

レティ

「にとりさんに頼んで作ってもらいましたわ」

タモリ

「幅広いなあの子!あれ、それは?」

レティ

「はい、北海道は旭川市で2012年2月8日（水）～12日（日）に開催される旭川雪まつりのポスターです」

タモリ

「ああ、やっぱり雪像作ったりするんだ？」

レティ

「そうですね。ですが、さっぽろ雪まつりと違い、かなり巨大な雪像を作っています」

タモリ

「そんなに!？」

レティ

「世界一大きい雪像としてギネスに登録されたこともあります」

タモリ

「そうですね、貼っついてちょうだい!!」

タモリ

「お花も届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻楽団、大妖精に三月精、チルノちゃんからも!」

レティ

「さすがに氷の花は止めたようですね」

タモリ

「おそらく大妖精にたしなめられたんでしょうね」

タモリ

「最近はどうですか？」

レティ

「前に比べるとマシになりましたかね。太ましいネタも少なくなりましたし」

タモリ

「ああ、確かに。でも今日の収録でまた再燃するんじゃない？」

レティ

「ああ！？確かに…。いや、勘違いしないで下さいよ皆さん！！身ごもった訳でも太った訳でもありませんからね！」

力説しながらベストをはだけ、保冷剤をアピールするレティ

タモリ

「まあまあ落ち着いて…。ちゃんと編集でテロップ入れときますから」

レティ

「また再燃したらどうしよう」

タモリ

「そう深刻にならずに」

レティ

「いや、この服のせいですからね！脱いだらけっこうスレンダーですよ？」

タモリ

「そうなんですか？」

レティ

「射命丸さんに頼んでセミヌード写真集でも出そうかしら？」

タモリ

「止めときなさいって！」

レティ

「たましい疑惑解消にいいかと……」

タモリ

「いやいや……。ところでレティちゃんって春には何しているの？」

レティ

「妖怪の山の洞窟とか、天界の隅とか……。高い所にいますね」

タモリ

「あ、そうなんだ」

レティ

「それで、たまに寒冷前線を操ったりして」

タモリ

「何してんの!？」

レティ

「私、寒気を操る能力ですからね……。冷たい風を作り出して寒冷前線を強めたりして」

タモリ

「それやっちゃダメだって…」

レティ

「いやまあ、これも一つの仕事ですよ。夏は特に雲が多いから、たまに雨を降らさないとバランスおかしくなるんですよ」

タモリ

「あ、そうなんだ〜！」

レティ

「でも寒冷前線って嫌われるんですよ〜。突然激しい雨が降るから」

タモリ

「積乱雲、俗に言う“入道雲”ってやつですね」

レティ

「河童や雲山は喜ぶんですけどねえ…」

タモリ

「雲山喜ぶんだ…想像できない」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

レティ

「どっしょいよっかしら〜!」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか?」

レティ

「それじゃあ… “去年雪合戦をしたことある人” お願いします!」

タモリ

「では “去年雪合戦をしたことある人” スイッチオン!」

）

レティ

「1人!! やった!」

ADさんがストラップをレティに渡す

タモリ

「お、あの人だ!」

手を挙げている女性を指さす

タモリ

「出身は? 新潟! なるほどねえ…」

レティ

「ありがとうございます!」

）

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!』

レティ

「では…。同じ季節を操る者として、秋静葉さんを紹介したいと思っています！」

タモリ

「秋の神様！これから大活躍しますね！」

ADさんがつながった電話をレティに渡す

レティ

「もしもし、レティです」

静葉

「もしもし？お久しぶりです」

レティ

「今何してました？」

静葉

「妖怪の山です。紅葉やイチョウの様子を見に来ていました」

レティ

「そうですね。タモリさんに代わりますね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

静葉

「もしもし。静葉です。こんにちは！」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

静葉

「はい、大丈夫です！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

静葉

「いいとも〜!!」

タモリ

「はい、お待ちしております！」

〜

第九回・レティ・ホワイトロック（後書き）

第九回・レティ編、いかがでしたか？

レティに対する想像を膨らませたらこうなりました。寒冷前線はも
しや…。そう思うと積乱雲も少し笑って見れますね。

私としては雷が嫌いなので積乱雲はカンベンして欲しいのですが…
次回は秋静葉！明日も見えてくれるかな？

第十回・秋静葉

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはは〜！』

タモリ

「もうすぐ八月も終わり…。秋になりますね」

『そうですね〜！』

タモリ

「秋には色々ありますね」

『そうですね〜！』

タモリ

「イベントもありますね。収穫祭に紅葉狩り…」

『そうですね〜！』

タモリ

「どちらがいいかは言わないでおきます。争いの火種になりそう…」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日のレティ・ホワイトロ
ックちゃんの紹介で初登場、秋静葉ちゃんです!どうぞ」

拍手と共に静葉が登場!

『かわいい〜!〜!』

『静葉〜!』

静葉

「ありがとうございます!」

嬉しそうに笑いつつ、もみじ 紅い紅葉をスタジオにばらまく静葉

タモリ

「すごい登場だねえ…」

静葉

「一足早い紅葉狩りですわ」

タモリ

「お、それは?」

静葉

「山梨県は富士河口湖で10月29日〜2011年11
月20日に開催される富士河口湖紅葉まつりです!」

タモリ

「あ、もうすぐ紅葉のシーズンですからねえ…」

静葉

「ライトアップされた紅葉の道、紅葉トンネルがすごくきれいですよー！天候によっては紅葉と共に富士山も見えて！」

タモリ

「そりやすごそうだ…貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻楽団、秋穰子ちゃんに鍵山雛ちゃん、守矢神社からも！」

静葉

「神としてですかね〜。ありがたいです。でも博麗神社からは？」

タモリ

「博麗神社からは…来てませんね」

静葉

「あの巫女…今年の博麗神社は葉が緑のまま冬を迎えるでしょうね！」

タモリ

「止めときなさいって。あとが恐ろしいでしょ…」

静葉

「あー、私も軍神になりたかったー！」

タモリ

「最近はどうじっ？」

静葉

「んー、不満を言い出せばきりがないけど…まずボスになる気はあまりないのよね。戦闘は苦手だから」

タモリ

「あ、そうなんだ?」

静葉

「だからボスで出演することはなくていいけど…せめてもの願いがあるの」

タモリ

「何ですか?」

静葉

「まず紅葉狩りをする人が少ないな」と思って」

タモリ

「そりゃ確かに」

静葉

「遠くから見るだけで山に入らないのが残念…。私が準備万端で待ってるのに」

タモリ

「準備って何の?」

静葉

「連休とかに合わせて葉が赤くなるよう調整したり、人が通ると共に葉が散るよう仕向けたり」

タモリ

「そんなことやってんだ!？」

静葉

「でもお客増えないのよね。いやおすすめよ?紅葉狩り。黄昏の淡い光に照らされて輝く紅葉たち。爽やかなムード。この中で告白したら落ちるわよ?」

タモリ

「え、そうなんですか?」

静葉

「ドラマチックだと思わない?辺りは静かで、そこには二人だけの空間が広がる。たわいもない会話が紅葉狩りという日常と違う空間で変わっていくの!」

タモリ

「そうですかね?」

静葉

「そして近づく二人の距離。紅葉の様に赤く染まる二人の顔が近づいて…きゃ〜!もう恥ずかしい!」

ほほに両手を当てぶんぶんと頭を横に振る静葉

タモリ

「あの、静葉ちゃん?現実の世界に帰ってきてきて!」

静葉

「私には、いえ紅葉にはこんな力があるの!」

タモリ

「本当ですか？」

静葉

「私は紅葉を司る神。人の顔も赤く染めて見せましょう！」

タモリ

「そりゃ無理でしょ！」

静葉

「でも幻想郷じゃあ妖怪の山のふもとは有名なデートスポットのつよ？」

タモリ

「そうなんですか!？」

静葉

「人里、香霖堂、太陽の畑、そして妖怪の山なのよ！」

タモリ

「それどこからの情報ですか？」

静葉

「文が発行した幻想郷ガイド誌に載っていたわ！」

タモリ

「信用できるのかなあ…！」

静葉

「あとは…たまに穰子と静葉のどっちが姉かわからない人いるのよね。あれシヨックだわ」

タモリ

「あゝ。それあるわ」

静葉

「だいたい東方って妹が姉より上なのよね。フラン、こいし、依姫…。みんな姉より上みたく思われているのよね」

タモリ

「姉が妹にいいところ譲ったんじゃない？」

静葉

「でも私たちの場合1ボスと中ボスだからどっちが姉か忘れられるのよね」

タモリ

「あゝ、確かに」

静葉

「だから私自身、より印象に残る服を着ようと思うのよ。外の世界のアーティストみたいに」

タモリ

「どんな服？」

静葉

「全身にモミジの葉っぱを貼り付けて…」

タモリ

「レディー・ガ!？」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

静葉

「はい!頑張ります!」

タモリ

「頑張ってください。伺いますか?」

静葉

「それじゃあ…“母校にモミジの木がある人”をお願いします!」

タモリ

「では“母校にモミジの木がある人”スイッチオン!」

）

静葉

「ああ、0人でしたか」

タモリ

「イチヨウの木ならあるのかな?」

静葉

「木がある学校も減ってきているのかなあ」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！！』

静葉

「そうですねえ…。穰子と言いたいところだけど…。予想を超える人を呼んじゃおうかしら」

タモリ

「お、誰ですか？」

静葉

「同じく八百万の神の一人、八坂神奈子様です！！」

『ええ〜！！』

タモリ

「一気に飛びましたねえ…。大丈夫？」

静葉

「大丈夫です。同じ山に住む者同士、多少なりとも親交ありますから」

A Dさんがつながった電話を静葉に渡す

静葉

「もしもし、静葉です。お昼時に申し訳ありません」

神奈子

「もしもし？お久しぶりね」

静葉

「今、何されていました？」

神奈子

「守矢神社で早苗や諏訪子とご飯食べながら見てたわ。いや、一
気に私へ出番が回るとはね」

静葉

「お客さんが予想できない展開の方が面白いと思ひまして…。では、
タモリさんに代わりますね」
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

神奈子

「もしもし。八坂神奈子です。こんにちは！」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

神奈子

「ええ、問題ないわ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

神奈子

「いいとも〜!〜!」

タモリ

「はい、お待ちしております!」

）

第十回・秋静葉（後書き）

第十回、秋静葉編。いかがでしたか？

今回は少し恋愛みたいなお話を語っていましたが、私にはそんな経験全くありません。紅葉狩りで告白が上手くいく保証はありませんので悪しからず。

今回は神奈子様です。一気に飛びましたね。

これまでを振り返ると藍様を除いてみんな幼女〜少女の年代なので、ここで一つ大人の女性を出すことにしました。誰だババアといった奴？

神奈様は一体何を語るのか？明日も見てくれるかな？

第十一回：八坂神奈子

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはは〜！』

タモリ

「今日のゲストは神様だそうです」

『そうですね！！』

タモリ

「私も見るのは初めてですねえ…」

『そうですね！！』

タモリ

「神って何か悟りの一つでも開かないと見れないですもんね」

『そうですね！！』

タモリ

「私は何の悟りの境地に立ったんだろっ…?」

タモリ

「それでは登場していただきましたしよう、昨日の秋静葉ちゃんで紹介で初登場、八坂神奈子様です！どうぞ」

拍手と共に神奈子が登場！

『きゃ〜！〜！』

『神奈子様〜！』

神奈子

「我を呼ぶのは何処の人ぞ？」

威厳たつぷりに腕を組みつつ現れた神奈子！だが…

タモリ

「ちょ、ちょっとイスどけましょうか？」

そう、トレードマークのしめ縄が邪魔でまっすぐ歩いてこれないから力二歩きで登場してきた！なんともシニールである。

神奈子

「改めまして、八坂神奈子です」

タモリ

「歩くとき大変そうですね…」

神奈子

「…まあ、そう思う時も少々あるわ」

タモリ

「お、それは？」

神奈子

「今年の秋に守矢神社で開催予定の“第一回五穀豊穰奉納祭”の知らせよ」

タモリ

「へえ、そんなのやるんですか？」

神奈子

「うちも博麗神社例大祭に負けないようなイベントを作ろうと思っ
てね。それで乾、すなわち天を創造する私による豊穰祈願祭をやる
うってわけ」

タモリ

「そうですか。てっきり御柱祭のポスターと思っていましたが…」

神奈子

「諏訪子に頼まれたのよ。『御柱祭は諏訪大社最大の行事だから私
から説明する！』って聞かなくてねえ…」

タモリ

「そうですか…これ貼っとしてちょうだい!!」

タモリ

「お花もいっぱい届いていますね〜！ZUNさんに上海アリス幻樂
団、守矢神社に秋姉妹、妖怪の山一同、鍵山雛ちゃん…あれ？地霊
殿からも!？」

神奈子

「地獄鴉じごくからすに八咫鳥やたがらすの力を与えたからかしら？おそらく本人は忘れてるだろうから、主人の古明寺さとりが渡したんでしょうけど」

タモリ

「律儀ですねえ…」

神奈子

「それにひきかえ、なんで博麗神社は何もないのかしら？」

タモリ

「いやまあ…あの人はよその神社ですし」

神奈子

「…まあいいでしょう」

少し呆れ気味に神奈子が着席

タモリ

「この世界から幻想郷に移住して結構たちますが、信仰の方はどうですか？」

神奈子

「いきなり痛いところ突くわね…。まあ早苗も立派に妖怪退治ができ、着実に広まりつつあるわね」

タモリ

「そうですね」

神奈子

「ただ、最近やってきた命蓮寺に少し信仰を奪われつつあるかな」

タモリ

「あゝ、そうなんですか？」

神奈子

「あそこの住職は私と違って威厳を振りまく感じではないから人が寄るのよね。まあ、私のやり方と命蓮寺のどっちがいいのかは知らないけど」

タモリ

「確かに、最近じゃあ妖怪が寺に入門しようとしてるとか」

神奈子

「びっくりしたわ。まさかヤマビコが仏門に入門しようとは…時代は変わったわね」

タモリ

「天狗や河童とかにも仏門を目指す人が出てきたりして」

神奈子

「いや、あの辺は上下関係強いから私を無視して仏門に行くとは考えづらいけど…。だいたい天狗は情報、河童は技術にしか興味がないし」

タモリ

「確かにそうですね」

神奈子

「まあいたらオンバシラくらわすけどね」
不敵に笑みつつ淡々と語る神奈子

タモリ

「物騒だなあ……」

タモリ

「でもまあ、信仰は上手くいっている様ですから悩みもないんですか？」

神奈子

「ん〜、一つあるとするなら早苗かしらね〜」

タモリ

「神奈子様、諏訪子様にしてみれば娘みたいなものですからね」

神奈子

「あの小さかった早苗がいまや立派に妖怪退治……してるのは嬉しいけど、なんか重大なミスしてる気がするのよねえ……」

タモリ

「といたしますと?」

神奈子

「いや少し強引すぎるかなあと。あの霊夢や魔理沙も強引だけど、早苗も強引だし段々おかしくなってるような気が……」

タモリ

「ああ〜、聖輦船の時の……」

神奈子

「あれ以来妖怪退治に生きがいを感じてるような気が……いや大丈夫かしらあの子?」

タモリ

「確かにそんな気が…」

神奈子

「少し倫理とか神のあり方について論議する必要があるそうね…。このままだと早苗が説法できないような気がする」

タモリ

「え？現人神も説法するんですか？」

神奈子

「いずれはそうなってほしいのよ。あと五年ぐらいしたら…」

タモリ

「説法できるかもしれないね。その時には結婚して母親になってたりして」

神奈子

「…けっ、こん…？」

いままで普通に会話してきた神奈子の顔が急に引きつる。

タモリ

「あの、神奈子様？」

神奈子

「いや！早苗はまだまだ、結婚するにはまだ早い！まず相手がいない！まだあの子は幼い！」
いきなり立ち上がって熱く語り始めた！！

タモリ

「ちょ、神奈子様！？落ち着いて…」

神奈子

「あの子はまだ嫁には渡さない！絶対に！渡してなるか断じて！！」

タモリ

「…こりや当分早苗さんは箱入り娘のまんまだなあ」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

神奈子

「ええ、当てて見せましょう」

先ほどとうって変わって落ち着きと威厳を取り戻しかけた神奈子様

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

神奈子

「それでは…“長野の御柱祭を実際に見たことがある人” お願いします！」

タモリ

「では“長野の御柱祭を実際に見たことがある人” スイッチオン！」

）

神奈子

「ああ、0人でしたか」

タモリ

「七年に一回だから、長野出身の人以外は忘れてること多いのかも
しれませんね？」

神奈子

「うーん、年数をあけるのも善し悪しかな」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!!』

神奈子

「そうねえ…では昨日の静葉のように意外な人を呼んじゃおうかし
ら」

タモリ

「お、誰ですか？」

神奈子

「同じく八百万の神の一人、鍵山雛さんです!!」

『ええ〜!!』

タモリ

「お、あの方とも親交が？」

神奈子

「ええ、元は人形といえど同じ山に住む神同士ですから
ADさんがつながった電話を神奈子に渡す

神奈子

「もしもし、神奈子です。お久しぶりね」

雛

「もしもし？お久しぶりです」

神奈子

「今、何されています？」

雛

「妖怪の山で厄を集めていました」

神奈子

「そう。では、タモリさんに代わるわね」
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

雛

「もしもし。雛です。こんにちは！」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

雛

「ええ、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

雛

「いいとも〜!!」

タモリ

「はい、お待ちしております！」

）

第十一回：八坂神奈子（後書き）

第十一話：八坂神奈子編　いかがでしたか？

大人の女性&威厳ある神様というテーマは少し難しかったですね。

てなわけで最後は少しカリスマブレイクしましたが。誰です吸血鬼想像したの？

でもまあ、神奈子様は早苗のことを気にかけてると思いますよ？あの星蓮船編での会話で神奈様は早苗の将来に不安を感じたに違いない…

それから、実際には守矢神社での五穀豊穰奉納祭なんてありませんからね？全くの想像の産物なんで悪しからず。

次回は神つながりで雛です！明日も見えてくれるかな？

第十二回：鍵山雛

）

タモリ

「はい、こんにちは〜！」

『こんにちは〜！〜！』

タモリ

「今日で八月も終わりですね〜」

『そうですね〜！〜！』

タモリ

「学生は夏休みの宿題に追われているでしょうね〜」

『そうですね〜！〜！』

タモリ

「漢字の書き取りに問題集、読書感想文なんてのもあるのかな？」

『そうですね〜！〜！』

タモリ

「この厄ばかりは今日のゲストも抱えきれないでしょうね」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日の八坂神奈子様の紹介

で初登場、鍵山雛ちゃんです！どつぞ〜」

拍手と共に雛が登場！

『きゃ〜！〜！』

『雛〜！〜！』

雛

「どつも〜！」

フィギュアスケートばりの綺麗な回転をくるくると見せつつ雛が登場！〜！

ガツンッ！！

だが雛の脇腹が机に直撃！！

雛

「……………つつ、ああ……………」

脇を抱えつつ座り込む雛

タモリ

「だ、大丈夫ですか！？」

雛

「…ちょっと張り切りすぎました」

タモリ

「さっそく厄が集まっていますねえ…」

雛

「だ、大丈夫です。どうも…」

タモリ

「お、それは？」

雛

「まだ早いですが…福岡県の柳川市で平成24年2月11日から4月3日にかけて行われる柳川雛祭りさげもんめぐりです！」

タモリ

「ずいぶん期間があるんですね。それに“さげもん”とは？」

雛

「さげもんとは天井からつるす飾りです。女の子の一生の幸せを祈るもので、流し雛や水上パレードなどがあります」

タモリ

「すごいですねえ…貼っついてちょうだい!!」

タモリ

「お花も届いてますねえ……！ZUNさんに上海アリス幻楽団、守矢神社に秋姉妹！」

雛

「ありがたいですねえ……」

タモリ

「しかし…雛さんって、確か周りの人に厄が降りかかるんですよ

「？」

雛

「あ、大丈夫です。これ着けてますから
そういい、手首のシユシユを見せる。」

タモリ

「何ですか？それ」

雛

「にとりのシユシユです。一時的に厄が周りに放出されるのを抑えるんです」

タモリ

「はーっ、にとりさん幅広いですねえ……」

雛

「ありがたい限りですね」

タモリ

「最近はどうですか？」

雛

「うーん…厄が多すぎて手が回らない状態かなあ？すごく忙しい」

タモリ

「あ、そうなんですか……」

雛

「毎日フル稼働で回っています」

タモリ

「頑張ってください！」

雑

「いつもより余計に回っておりま〜す！〜！」

タモリ

「いや違っつて！それ傘の上でマスを回す人！！海老一染之助・染太郎さんね！」

雑

「こんどあの唐傘お化けにすすめてみようかしら？」

タモリ

「いや、見た人は驚くでしょうけど…恐怖は無いでしょうね」

雑

「それは置いといて。まあ、厄が多いことありますが…ひな人形自体、飾る家が少なくなりましたからねえ…」

タモリ

「そうですね〜」

雑

「私としても飾ってほしいのですが…出し入れが大変ですからねえ」

タモリ

「並べるのも大変ですからねえ」

雛

「そのぶん流し雛は普通に行われていますがね」

タモリ

「あゝ、そうなんですか？」

雛

「ええ……」

タモリ

「ひな人形も大変ですねえ……」

雛

「いえいえ、これが私たちの役目ですから……」

タモリ

「ありがとうございます！」

雛

「そう感謝していただくとありがたいですねえ。それにひきかえ幻想郷の人間は……せっかく忠告してもらくくに聞かず撃つてくるんだから」

タモリ

「まあまあ、霊夢さんや魔理沙さんにもわかってもらえる日が来ますよ」

）

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていきますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

雑

「さて、どうしますかね」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

雑

「それでは…“今年、家でひな人形飾った人”をお願いします！」

タモリ

「男の人でも家に飾ったらOKなんですね？」

雑

「ええ、家に女の子がいる方は可能性ありますし」

タモリ

「では“今年、家でひな人形飾った人”スイッチオン！」

）

雑

「うーん、3人でしたか」

タモリ

「結構いましたね？」

雛

「でもうれいんです！まだ残っていたんだ…」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！！』

雛

「では…河城にとりさんを紹介したいと思います」

タモリ

「お、意外ですね？」

雛

「妖怪の山でよく会いますし、外の世界では漫才で優勝したそうですから」

ADさんがつながった電話を雛に渡す

雛

「もしもし、雛です。どうも」

にとり

「もしもし？お久しぶりです」

雛

「今、何されていますか？」

にとり

「妖怪の山で新しいメカの開発しました」

雑

「ご苦労さまです。それでは、タモリさんに代わるわね」
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

にとり

「もしもし。にとりです。こんにちは！」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

にとり

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

にとり

「いいともー!」

タモリ

「はい、お待ちしております!」

）

第十二回：鍵山雛（後書き）

第十二回：鍵山雛編、いかがでしたか？

今回は少ししまともになりましたかね？神奈子編が壊れ過ぎたようなので少し戻しました。けど少し短くなりましたね。反省します。また、第五回東方M-1グランプリのネタも少し混ぜました。見たことない人にも違和感ないように仕上げたつもりですが…大丈夫ですかね？

伝わるか不安なネタには傘回しもありますが…。ご存じですかね？正月の特番とかで「おめでとうございま〜す！いつもより余計に回しておりま〜す」が決まり文句のあの方々です。あれを小傘は取り入れるのか？いや、それはないか…

次回はにとりです。明日も見えてくれるかな？

第十三回・河城じやうじ

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはー！ー！』

タモリ

「今日から九月ですねえ」

『そうですねー！ー！』

タモリ

「学生は始業式が始まっているでしょうね」

『そうですねー！ー！』

タモリ

「そこでの校長先生の話が長いんですよ」

『そうですねー！ー！』

タモリ

「私も前フリはこれくらいにしときましよう、無駄に長くなる……」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日の鍵山雛ちゃんの紹介で初登場、河城にとりちゃんです！どうぞぞぞ」

拍手と共に扉が開く！だけど…にとりが出てこない

タモリ

「あ、あれ？にとりちゃん？おっい」

にとり

「はっい！！」

いきなりタモリさんの目の前ににとりが登場！！

『おおっ！！』

タモリ

「うわぁ！？あっびっくりした！！どうやって僕の前！？」

にとり

「おなじみの“光学迷彩”です！改めましてこんにちは！河城にとりです！」

『にとりっ！！』

『かわいいっ！！』

タモリ

「お、それは？」

にとり

「9月18日に大分県中津市山国町、中摩亀岡八幡宮で行われる白地楽・カッパ祭りのポスターです!!」

タモリ

「あるんだねえ、かっぱ祭り」

にとり

「相当長いですよ、このお祭り。1733年から伝えられる河童楽で民衆の繁栄と五穀豊穰を祈願して行われます」

タモリ

「そうですか。貼っついてちょうだい!!」

タモリ

「お花も届いてますねえ……！ZUNさんに上海アリス幻楽団、文々。新聞に守矢神社、地霊殿、鍵山雛さんに霧雨魔法店！すごいですね」

にとり

「いや、ありがたい限りです」

タモリ

「それにしても…幻想郷唯一のエンジニアとして忙しいようですね」

にとり

「まあそうですね。私だけがエンジニアというわけではないんですがね。自分で何か作るのは魔法使いも同じです」

タモリ

「ああ、確かに」

にとり

「その“作りたいた物”にどう近づけていくかが違うだけですよ。私は工学、魔法使いは魔術、それだけです」

タモリ

「へえ〜。その工学の知識はいつたどこから？」

にとり

「人間からですよ」

タモリ

「え？そつなんですか？」

にとり

「昔は河童が身近にいたのはご存知ですよね？」

タモリ

「ええ…言い伝えとかではよく出てきますね」

にとり

「そこで人づてに習ったり、機械をバラしたり直したりして覚えました」

タモリ

「へえ〜！でもどうしてそこまで？」

にとり

「う〜ん。私自身、こういったことが好きだったってのもあるけど…」

タモリ

「ほづ?」

にとり

「何より可能性を感じたから、かな?川から町を眺めていたけど、技術の発展がとつともなく早いんですよ。人間って」

タモリ

「高度経済成長の時代は特に凄かったですからね」

にとり

「でしょう?まさかあんな速い電車、新幹線が出来るなんて想像もしなかった!」

タモリ

「いや、当時は本当に驚きましたよ」

にとり

「だからそこに可能性を感じたんです。何でも出来そうな可能性を。確かに工業の進歩で環境に悪影響も出ましたけど、改善する手立ては必ずある!」

タモリ

「おお…」

にとり

「私はそう信じてますね。その工学の力で世界をよりよく出来ると思っています」

タモリ

「日本も、ですか？」

にとり

「ええ、もちろん！」

そついうと、自信満々に微笑む

タモリ

「じゃあ幻想郷にも工業化を？」

にとり

「いえいえ、私は工学により得られる利益が上手く幻想郷に調和することを望んでいます。無理に機械化すると弊害が出るでしょうから」

タモリ

「かつての日本の風土と、工学による利益の調和…難しいですねえ」

にとり

「気長にやりますよ。時間はまだまだありますから」

タモリ

「がんばってくださいー！」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

にとり

「さて、どうしようかな？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

にとり

「それでは…“家に電気ドライバーがある人”をお願いします！」

タモリ

「電気ドライバーって、電動でネジ回すあの？」

にとり

「ええ、あれです。欲しいんですよ〜」

タモリ

「では“家に電気ドライバーがある人”スイッチオン！」

〜

にとり

「ひゅい！？1人！！やった！」

タモリ

「いましたね〜！？お、あの人だ！」

客席にいた一人の男性を指さす

タモリ

「職業は何を？」

『建築業者に務めています』

にとり

「ありがとうございます！いや、嬉しい！」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！〜！』

にとり

「では…霊鳥路 空さんを紹介したいと思います」

『ええー！〜！』

タモリ

「あ、あの人はですか!？」

にとり

「大丈夫ですよ。絶対に」

ADさんがつながった電話をにとりに渡す

にとり

「もしもし、にとりです。どうも」

お空

「もしもし？えつと…誰だっけ？」

にとり

「私です！前に魔理沙と一緒にやってきた河城にとりですよ！！今、何されていますか？」

お空

「間欠泉地下センターで温度調節の仕事をしていました」

にとり

「ご苦労さまです。それでは、タモリさんに代わりますね」
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

お空

「もしもし。お空です。こんにちは！」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

お空

「はい、大丈夫です。炉はきちんと停止しておきますから」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

お空

「いいともー！！」

タモリ

「はい、お待ちしています！」

）

第十三回・河城にとり（後書き）

第十三回・河城にとり編、いかがでしたか？

今回はえらく真面目な話になりましたね。にとりは、なんかこう職人気質なイメージなので、それを膨らませていたらこんな風になりました。

なんかテレフォンショッキングというよりプロジェクトXやガイアの夜明けみたいになりましたね。

次回はお空です。一つ言っときますが真面目な話になるでしょう。もちろんお空らしい雰囲気も出しますが。

こんな時になぜお空なのかと思われる方もいらっしゃるでしょう。ですが今だからこそ語らせたいと思います。

私は九州にいるので語る資格は無いのかもしれませんが、私なりにお空に語らせたいと思います。

それでは…

第十四回：豊島路 空

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはー！』

タモリ

「台風が近づいてますね」

『そうですねー！』

タモリ

「速度は依然、ゆっくりだそうです」

『そうですねー！』

タモリ

「偏西風に乗ったら速くなるかなあ？」

『そうですねー！』

タモリ

「ど〜なんでしょー!？」

タモリ

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日の河城にとりちゃんの紹介で初登場、靈鳥路 空ちゃんです!どつぞつ」

）

拍手と共にお空が登場!!

お空

「ども!初めまして!」

『お空〜!〜!』

『可愛いい〜!〜!』

タモリ

「ども!こんにちは」

お空

「こんにちは!えっと…誰だっけ?」

タモリ

「ちょっと!?!タモリですよ!タモリ!」

お空

「ああ、そうそう。タモリさん!」

タモリ

「お、それは?」

お空

「はい、福島県福島市で9月30日〜2011年10月2日に行われる飯坂けんか祭りのポスターです！」

タモリ

「けんか祭り…激しいお祭りなんだ？」

お空

「はい、2日目の「宮入り」の儀が祭りのハイライトで、6台の太鼓屋台が激しくぶつかり合います」

タモリ

「そうですか。貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますねえ…！ZUNさんに上海アリス幻楽団、守矢神社、地霊殿、河城にとりさん！すごいですね〜」

お空

「ありがとうございます！」

タモリ

「最近はずいぶん注目されちゃいましたね〜」

お空

「まあ、しょうがないことですよ」

タモリ

「お空ちゃんはあの福島のことどう考えてるの？」

お空

「うーん…私、あんま難しいことはよくわからないんですけどねえ…。新聞とかロクに読まないし」

タモリ

「あ、そうなんだ」

お空

「でもあえて言うならば…最悪の事態は回避できたんじゃないか？と考えていますけどね」

タモリ

「へえ…」

お空

「地震直後に制御棒が働き核分裂を止めたまではいいけど、発電機が津波で破壊されて冷やす作業が行き詰ったじゃないですか？」

タモリ

「あゝ、ありましたね。それでへりとポンプ車で放水して…」

お空

「それに加えて海水や淡水の注水で原子炉の崩壊、メルトダウンはなんとか免れたようじゃないですか？」

タモリ

「詳しい所は不明ですが、まあそのようですね」

お空

「それで今も作業員の方々がその冷却と封じ込めにあたっているようですけどね。これから気温も下がれば、より一層作業も進みそう

ですけど」

タモリ

「うーん、もう少し早く収束してほしいですよね」

お空

「そうですね。使い方と安全管理さえ完璧ならば、原子力はすばらしいエネルギーなんですけど……」

タモリ

「今は一旦止めといた方がいいでしょう。余震も気になりますし」

お空

「そうなると電力不足はどうなるんだろうか？って話ですよねえ。火力には限界あるし……やはり節電になるかな？」

タモリ

「ただ企業には痛い話ですよね」

お空

「それで生産量が減ると不景気がひどくなりそうだし……あれ？なんか何が正しいのかわかんなくなってきた！あれ？」

すでにお空の脳は考えられる許容量をオーバーしてしまっただらしい。

タモリ

「まあ、節電も一つの手ですよ。それで節電グッズや節電タイプの家電とか売れていますし」

お空

「それが一番、経済的にもエネルギーの面からもいいのかもしれないま

せんね」

タモリ

「確かにそうかもね」。改めてみると電気の使いすぎだった気もするし」

お空

「あとは昔からの核の力、太陽エネルギーとかに代用するとかかな？」

タモリ

「それは確かにいいですよ」

お空

「いつそのこと太陽光パネルを設置するのに補助金が出れば電力問題が解決しそうなんだけどなあ……」

タモリ

「あとは新しい総理大臣がどう動くかですよ」

お空

「あゝ、あの辺はわかんないなあ。私。新しい総理なんて誰だかよく覚えてないし」

タモリ

「確かにそうですね」

お空

「ただ私、なんでもめてるのが良くわからないんだよなあ……。やらなきゃいけないことはもう眼に見えてるんだし、それに全力で取り

組めばいいのに」

タモリ

「それが一番の疑問なんですよねえ…」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

お空

「さて、どうしようかな？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

お空

「それでは…“太陽光発電で電気代がほぼゼロの人”をお願いします！」

タモリ

「では“太陽光発電で電気代がほぼゼロの人”スイッチオン！」

）

お空

「あ、5人！多いねえ！」

タモリ

「いましたね〜!?!?」

お空

「これから広まっていくといいんですけどね〜」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい!」

『え〜!!!』

お空

「それじゃあ…お隣を紹介したいと思います」

タモリ

「やはりそうきますか」

お空

「ええ、そりゃあまあ」

ADさんがつながった電話をお空に渡す

お空

「もしもし、お空よ〜」

お隣

「もしもし?お隣よ」

お空

「今、何してた？」

お燐

「さとり様と一緒に見てたよ！いや、あなた結構真面目なこと考えてんのね」

お空

「私も伊達や酔狂で核を扱う程バカじゃあないさ」

お燐

「お空…あなた変わったねえ…。いや嬉しいよあたしゃあ…。あ、これくらいにしてタモリさんに代わって」

お空

「へ？タモリさんって？」

お燐

「あなたの横にいる黒い眼鏡かけてる人！！そのへんは変わってないんかい！！」

お空

「ああそっか！それじゃあ、タモリさんに代わりますね
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

お隣

「もしもし。お隣です。こんにちは！」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

お隣

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

お隣

「いいともー！！」

タモリ

「はい、お待ちしております！」

）

第十四回：豊島路 空（後書き）

第十四回・お空編いかがでしたか？

私も出すべきか迷いましたが、新総理が誕生した今だからこそ語らせたいと思い出演させました。

お空は確かに記憶力悪いけど大切なことはきちんと覚えている。一言で言うと“笑えるおバカ”だと思っているんですよ。

ですからこんな感じに仕上げました。私の力不足で正直大したことは言えていませんけどね。

新総理の判断が少しでも日本を好転させることを祈っています。

さて、次回のお隣編からはいつもの感じに戻します。ええもう、大暴れしちゃいますよ！あのゴスロリ猫が！

次回をお楽しみに！明日も見えてくれるかな？

第十五回：火焰猫 燐

）

タモリ

「どうもこんにちは」

『こんにちはは〜！』

タモリ

「今日は猫ちゃんがゲストですね〜」

『そうですね〜！』

タモリ

「飼うとしたらやっぱり猫かな？」

『そうですね〜！』

タモリ

「でも犬も捨てがたいですよね〜」

『そうですね〜！』

タモリ

「お燐と椀…甲乙つけがたいな〜！いやほんと」

タモリ

「それでは登場していただきますよう、昨日の霊烏路 空ちゃん
紹介で初登場、火焰猫 燐ちゃんです！どうぞ」

拍手と共にお燐が一輪車を押しつつ登場！

お燐

「どうも！初めまして！お兄さん、お姉さん方！今日はよろしくお
願います！」

『お燐！！！』

『可愛い！！！』

お燐

「いいねいいねこの感じ！無理してでも来たかいあったよ！
予想以上の反響にやけるお燐」

タモリ

「お、それは？」

お燐

「いや、もう終わっちゃったんですが…8月の最終土・日曜に北
海道の登別温泉町で行われている登別地獄祭りのポスターです！」

タモリ

「へえ、そりやまたすごそうな…」

お燐

「年に一度、地獄谷の地獄の釜のふたが開き、閻魔大王が鬼たちを

引き連れて登別温泉を訪れるとされるお祭りですね…。閻魔や鬼の神輿がすごいのよ!」

タモリ

「そりやすごそうだ!」

お燐

「だろう?ただ私にしてみりゃ少し笑えるけどねえ」

タモリ

「え、なんで?」

お燐

「だって人間が思う閻魔と実際の閻魔が全然違うからさあ!あんな厳つい顔してないよ閻魔は!」

タモリ

「いや四季映姫様と比べちゃダメでしょ!??」

お燐

「そりや説教は上手いけど、背だつてあたいの胸ほどしかないよ?ありゃ死神が働かないわけだ」

タモリ

「止めときなさいって!!」

これ以上はお燐がヤバいと感じ制止するタモリさん

タモリ

「初っ端からいきなり爆弾発言出ましたねえ…。あ、お花も届いてますねZUNさんに上海アリス幻樂團、地霊殿…」

お隣

「あれ！？さとり様あたいにも花くれたのかい？ありがたいねえ…」

タモリ

「いい主人に巡り合いましたなあ…」

お隣

「こりゃ何かいいものもってかないと怒られるねえ…」

チラリ

お隣の目線がタモリさんに向けられる

タモリ

「ちょっと！僕はダメですよ！まだまだこの世には未練がある！」

お隣

「冗談ですって！火車流のジョークさ」

タモリ

「あゝびっくりした！お隣ちゃんが言うと冗談に聞こえないんだから…」

お隣

「大丈夫だって！そんなことしたらさとり様になんて言われるか」

タモリ

「それで…最近どう？」

お隣

「うーん、お空は異変の時以来おとなしく真面目に仕事してるし、さとり様もこいし様もいつも通りだし…」

タモリ

「いたって平穩なんだ？」

お燐

「だからこそちよいと退屈だなあと。いや仕事はあるけどねえ、代わり映えしないもんだからさあ…」

タモリ

「異変でも起こす気!？」

お燐

「いやいや!そんな気はさらさら…。いやねえ、あたいは怨霊を操ることが出来るじゃない？」

タモリ

「ええ、そうですね」

お燐

「だからさあ、この怨霊使って何か楽しいこと出来ないかな」と

タモリ

「あゝ、なるほど!」

お燐

「いろいろ考えてはいるんだよ?たとえば地底の熱を使った地霊温泉街作るとか!従業員は怨霊でさあ!あたいはその女将になる!」

タモリ

「いやいや、お客さん来るかなあ？」

お燐

「来るさ〜！まず地底の鬼達が絶対やってくる！」

タモリ

「それじゃより一層来なくなるでしょ！鬼がいる温泉って！」

お燐

「じゃあ鬼専用の“釜ゆでの湯”とか作って、人間と妖怪はそれ以外の湯に入らせる！」

タモリ

「いや、釜ゆでって…」

お燐

「他にも“血の池の湯”とか“灼熱の湯”とか…」

タモリ

「ネーミング悪い！！もっと温泉らしくしようよ…！」

お燐

「あとは熱を利用したサウナとか」

タモリ

「それいいですね〜」

お燐

「その名も“業火の部屋”！…！」

タモリ

「いや怖いよ！なにその五分で倒れそうな名前！！」

お燐

「まあ名前は後で決めるとして、これなら人も妖怪も来れるんじゃないのかねえ？」

タモリ

「あゝ、なるほど…でも地底ですよ？来る人は限られるんじゃない？」

お燐

「そこは大丈夫！あたいにはちゃんとお客さんアップの秘策があるのさ！ぜひ行きたいと思う秘策がねえ！」

タモリ

「お、どんな？」

お燐

「全部混浴にしてみました！」

タモリ

「女性客減るでしょ！」

お燐

「大丈夫だと思うよ。それこそ妖怪は百年なんてザラに生きてるんだよ？男に見られた程度でわめくような器じゃないさ」

タモリ

「いやまあ確かにそうだけど…」

お燐

「あのスキマ妖怪とかは男がいても一切隠そうとしないと思うけどねえ。自然な感じで来た男達と普通に喋りそうだし」

タモリ

「うーん、どうなんだろう?」

お燐

「“あら、いらっしやい。ここは本当にいい湯ね”なんて世間話するんじゃない?胸とかアレとか見せたままで」

タモリ

「生々しいよ!」

お燐

「あとは名物のおみやげ作るとか」

タモリ

「あゝ、それいいですねえ!たとえばどんな?」

お燐

「まずは、熱い地底で作り上げた地霊酒!」

タモリ

「あ、地霊殿で作ったお酒ね!」

お燐

「勇儀姐さん認定の辛口に仕上げました!」

タモリ

「きつすぎるでしょ！人間が飲んだら倒れるでしょうに!？」

お隣

「じゃあ怨霊風の青白い炎のキャンドルとかは？」

タモリ

「あ、それキレイですね」

お隣

「すごいでしょ。何もなくてもついたり消えたりしますよ！」

タモリ

「何で!?!心霊現象!？」

お隣

「あとはパルスィさんに頼んで縁切りのお守り作ってもらおうとか」

タモリ

「売れないでしょ!?!すごい発想だなあ……」

）

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

お隣

「さして、どうしようかねえ？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

お燐

「それじゃあ…“飼ってる猫が十年以上生きてる人”でお願いします！」

タモリ

「たしか化け猫になるんだっけ？」

お燐

「あたいの知り合いになるかもしれないからね」

「

タモリ

「では“飼ってる猫が十年以上生きてる人”スイッチオン！」

「

お燐

「あれ？0人？」

タモリ

「うーん、難しかったかなあ」

お燐

「あたいも九尾のキツネさんみたく部下が欲しかったんだけどなあ」

「

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

お隣

「それじゃあ…さとり様を紹介したいと思います」

『おおー!』

タモリ

「ご主人様ですか」

お隣

「まあ当然の流れって奴ですかね」

ADさんがつながった電話をお隣に渡す

お隣

「もしもし、さとり様？」

さとり

「もしもし？」

お隣

「今、何されていますか？」

さとり

「地霊殿であなたを見てたわ。すごいわね、にとりが作った“地

底デジタル放送”は！鮮明に映ってるわ！」

お隣

「ありがとうございます！それでは、タモリさんに代わりますね」
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

さとり

「もしもし。さとりです。こんにちは」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

さとり

「はい、大丈夫です。心配しなくてもいいですよ？地霊殿の主といえど結構ヒマですから」

タモリ

「きつちり心を読みますねえ…じゃあ、明日来てくれるかな？」

さとり

「いいとも〜！〜！」

タモリ

「はい、お待ちしています！」

〜

第十五回：火焰猫 燐（後書き）

第十五回：お燐編いかがでしたか？

いや、かなり苦戦しましたね。東方M-1の“さとりんおつきゅん”のネタである地霊温泉の話を元に作り上げました。

なんかかなり暴走したなあ。いや、もともとお燐は明るそうだしこれでいいのかな？

もし出来たら行ってみたいですけどね。地霊温泉で汗を流して地熱で一気に焼き上げた焼き魚とか食べたりして…

支配人はさとりで女将がお燐で…いやいや、何を言ってるんだ私は！？

今回はさとりです！明日も見えてくれるかな？

第十六回・古明地をとり

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはは〜！』

タモリ

「そろそろ文化祭や体育祭の練習とか始まりますかね？」

『そうですね〜！』

タモリ

「懐かしい話ですね」

『そうですね〜！』

タモリ

「リレーに綱引き、文化祭では出店まわったりして」

『そうですね〜！』

タモリ

「そうだったっけな？もう何十年前の話だか…」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日の火焰猫 燐ちゃんの紹介で初登場、古明地 さとりちゃんです!どうぞ」

拍手と共にさとりが登場!

『やとり〜!〜!』

『ジト目可愛い〜!〜!』

さとり

「ど…どうも」

かなり照れながらさとりがタモリさんの近くに寄る。心から褒めてることが分かるせい、人一倍褒め言葉に弱いらしい。

タモリ

「お、それは?」

さとり

「はい、11月21日に徳島県三好市藤の里公園で行われる妖怪まつりのポスターです」

タモリ

「あるんだそんなの?」

さとり

「三好市山城町上名藤川谷周辺は妖怪 児啼爺こなきじいの故郷ですから。妖怪みこし、妖怪バンド、妖怪行列、手作り妖怪コンテスト等があります」

タモリ

「すごいねえ…貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻樂團、地霊殿、守矢神社からも！」

さとり

「ありがたいですねえ…でもZUNさん大丈夫でしょうか？毎回花贈ったりして…」

タモリ

「大丈夫じゃないんですか？」

さとり

「財布が空になったZUNさんが見えそうね」

タモリ

「最近はどうですか？」

さとり

「いたって平穩ですね〜。こいしも少しずつ第3の目を開きつつありますし」

タモリ

「いい傾向ですね〜」

さとり

「ただ自分自身を少し変えたいな〜とは思っていますけどね」

タモリ

「とうとうと…イメチェン？」

さとり

「そうですね」

タモリ

「ほう、具体的には？」

さとり

「まず服装を変えようかと」

タモリ

「服装？」

さとり

「いや私、実年齢より幼く見られてるな〜って
そついい、会場のお客さんを見渡す

さとり

「……小学校低学年程度に思ってますね」

ギクッ！！

お客さんの顔が急にこわばる。

タモリ

「なるほどね〜」

さとり

「とはいえどうしたものか…」

タモリ

「難しい女の子の悩みですねえ」

さとり

「ドレスやワンピースにしようと思いますが…どんなデザインがいいのか？」

タモリ

「うーん、レミリアさんみたいなドレスとか？」

さとり

「今“そうしたらレミリアと姉妹みたいで可愛いな”って思ったでしょー!」

タモリ

「あはは…」

さとり

「紫の髪と合う服って選びづらいですねえ」

タモリ

「それは確かに…」

さとり

「あとは…外の世界で流行ってる“つけまつ毛”をしてみようかと」

『ええ〜!』

さとり

「“変わりすぎ”ですか…」
即座に読み取るさとり

タモリ

「大胆なこと言ったねえ…」

さとり

「いや、たまには“おめめパツチリしたさとり”なんてのもいいかな」と

タモリ

「またすごい事を…」

さとり

「このジト目は誤解を生みやすいですからね。怒ってないのに怒ってるように見える、普通にしても不機嫌にみえるって訳で…」

タモリ

「“心読めても理解はされず”ってやつですか…」

さとり

「うーん、心というのは難しい…」

）

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

さとり

「うーん…」

タモリ

「心読むのは無しですよ？頑張ってください。何いきますか？」

さとり

「では…“高所恐怖症の人”をお願いします！」

タモリ

「では“高所恐怖症の人”スイッチオン！」

）

さとり

「ああ、3人でしたか」

タモリ

「意外に多かったですね」

さとり

「トラウマ見せたましょうか？」

ジト目でにやけるさとり

タモリ

「止めときなさいって」

）

一回CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

さとり

「では、妹の古明地こいしを呼びます!〜!」

『おお〜!〜!』

タモリ

「大丈夫?いつもふらふらしてるそうだけど」

さとり

「大丈夫です」

ADさんがつながった電話をさとりに渡す

さとり

「もしもし、お姉ちゃんよ?」

こいし

「もしもし?」

さとり

「今、何してた?」

こいし

「守矢神社あたりをお隣と散歩中。よく私の位置がわかったね」

さとり

「お隣の怨霊と私のペットをフル稼働させて探したのよ。では、タモリさんに代わりますね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

こいし

「もしもし。こいしです。こんにちは！」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

こいし

「大丈夫だよ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

こいし

「いいとも〜!」

タモリ

「はい、お待ちしております!」

）

第十六回・古明地さとり（後書き）

第十六回・古明寺さとり編いかがでしたか？

いや、今回は少し女の子の悩み入りましたね。あんま上手く書けなかったです。女の子の心は難しい

心を読めるのはメリットもデメリットも大きいですからね。他人が思う自分の第一印象丸わかりな分、見た目に悩むのかもしれない
と思います。

さて次回は古明寺こいしちゃんです！明日も見てくださいかな？

第十七回・古明地こいし

く

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日は無意識を操る方ですね」

『そうですね!』

タモリ

「私にも色々クセがあるんですが…それを操れるんですかね?」

『そうですね!』

タモリ

「だったら作者のびんぼうゆすりのクセを直して欲しい…」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日の古明地さとりちゃんの紹介で初登場、古明地こいしちゃんです!どうぞ」

く

拍手と共にこいしが登場!

『111111!』

『可愛い!』

こいし

「どうも!」

タモリ

「お、それは？」

こいし

「7月下旬〜8月下旬に栃木県巴波川綱手道及び巴波川橋で開催されるうずまの妖怪祭りです！」

タモリ

「ほ〜、妖怪のお祭りって結構いっぱいあるんですね〜」

こいし

「そうみたいですね〜。蔵の街ナイトクルーズで溶解に扮した船頭さんが怪談話を語りつつ夜の川を巡ります」

タモリ

「そうですか〜貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻楽団、地霊殿、守矢神社からも！」

こいし

「山の神社からも来たんだ〜！今度また参拝しよう」と

タモリ

「最近はどうですか？」

こいし

「ん〜、閉ざした第三の目は徐々に開きつつありますが…」

タモリ

「それはいいことですね」

こいし

「でも無意識状態でふらついているといいこともあるんですよ」

タモリ

「といたしますと？」

こいし

「気配を完全に消せるからいろんなところに入り込めるんですよ」

タモリ

「それいいですね〜」

こいし

「山の神社だろうと紅魔館だろうと、いろいろ入れるんですよ。ですからいろんなネタ持ってるんです」

タモリ

「え!？」

こいし

「たとえば…普段のみんなの会話とか難なく聞けますね」

タモリ

「うわあ…」

こいし

「あと着替えシーンとか」

タモリ

「それダメでしょ!!」

こいし

「だから射命丸さんにスカウトされてるんですよね」

タモリ

「ええ!?!」

こいし

「“私に変わり入り潜入取材を敢行してくれ”って…」

タモリ

「いや絶対だめですよ!!」

こいし

「まあ私自身あんまり新聞には興味ないんですけどね」

タモリ

「あ、そうなんだ」

こいし
「でも探偵なら興味あるかな〜」

タモリ
「幻想郷初の？」

こいし
「そうそう！私が潜入して決定的な情報や証拠を手に入れ、お姉ちゃんに犯人を追いつめる！」

タモリ
「それ最強じゃないですか！！百パーセント当たりますし！」

こいし
「でしょう？コンヤ金ーなんてメじゃない！！」

タモリ
「心が読める時点で犯人の目星つきますからね」

こいし
「“姉妹探偵 古明寺” かつこいし〜！！」

タモリ
「それいいね〜」

こいし
「私たち姉妹だったら事件が起きて30分で解決しますよ？」

タモリ
「それいいですね〜」

こいし

「だから心の目を自由に開け閉めできないかな」と

タモリ

「がんばってくださいー!」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

こいし

「うーん…」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

こいし

「では…“クセが5つ以上ある人”をお願いします!」

タモリ

「無くて七癖なんて言いますからね」

こいし

「でも自分じゃ気付かないんですよ」

タモリ

「では“クセが5つ以上ある人”スイッチオン！」

）

こいし

「ああ、0人でしたか〜」

タモリ

「人間わからないものですからね〜」

こいし

「見せたげようか？自分の癖を」

タモリ

「知りたいような知りたくないような…」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！！』

こいし

「では…意外な人を呼びます！！橋姫のパルスィさん呼びますね」

『おお〜！！…』

タモリ

「あ、あの人呼ぶんですか？」

こいし

「あの人ほど裏表ある人いないよ。ひとのいない所ではいい人なんだから」

ADさんがつながった電話をこいしに渡す

こいし

「もしもし？」

パルスィ

「もしもし？」

こいし

「今、何してた？」

パルスィ

「いつもどおり橋の警護中」

こいし

「では、タモリさんに代わりますね」
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

パルスィ

「もしもしパルスィです」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

パルスィ

「大丈夫よ。ヤマメに変わってもらうから」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

パルスィ

「いいとも〜!〜!」

タモリ

「はい、お待ちしております!」

）

第十七回・古明地こいし（後書き）

第十七回・古明地こいし編いかがでしたか？

こいしの無意識能力って潜入に最適じゃね？というアイデアのもと、
こんな感じに仕上がりました

実際に古明寺姉妹が探偵コンビ組んだら最強と思います。

次回はパルスイです！明日も見えてくれるかな？

第十八回：水橋パルスィ

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはは〜!〜!』

タモリ

「やっと台風行っちゃいましたね」

『そうですね!〜!』

タモリ

「大雨で大変でしたよ」

『そうですね!〜!』

タモリ

「でも庭の花は無事だったんですよ」

『そうですね!〜!』

タモリ

「根が強いんでしょうね。これがホントの根魂ねたましこ? 怒っちゃやーよ!」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日の古明地こいしちゃん
の紹介で初登場、水橋パルスィちゃんです！どうぞ〜」

〜

拍手と共にパルスィが登場！

『パルスィ〜！！』

『可愛い〜！！』

パルスィ

「そのストレートな褒め言葉が妬ましいわ…そして司会のダジャレ
が妬ましいわ！！」
いきなり鋭い眼光をタモリさんに浴びせる

タモリ

「言わせたの作者ですよ！！」

パルスィ

「そう…月見草さん、地底の地獄にご招待してあげようかしら？」

タモリ

「止めときなさいって…お、それは？」

パルスィ

「京都府の宇治市、あかたじんじや県神社で毎年6月5日から6日の未明にかけて
行われる県祭りのポスターよ」

タモリ

「ほー、京都ですか…」

パルスィ

「珍しい事にこの祭りは、ともしし火をともしないことから「暗夜の奇祭」と言われてるわ」

タモリ

「へえ〜」

パルスィ

「でもね…ホントは宇治市の橋姫神社をアピールしたかったんだけどね…祭りが無いのよ！縁切りの神社だから！」

タモリ

「そうだったんですか!？」

パルスィ

「だから代わりに同じ宇治市の県神社紹介したのよ…。県神社は縁結びだから。妬ましいわ!!橋姫神社もお祭り作りなさいよ!」

タモリ

「縁切りの神社の祭りですか？」

パルスィ

「アイデアなんかあるでしょ!縁を完璧に切りたい人の写真を燃やす“縁切りお焚きあげ”とか」

タモリ

「暗いよ!呪いの儀式みたいでしょ!」

パルスィ

「じゃあ嫌な縁を切るといふ願いを込めて日本刀で丸めたゴザを斬るとか」

タモリ

「危ないでしょ！いや楽しそうだけどもー！」

タモリ

「えゝ、お花も届いてますねゝ。ZUNさんに上海アリス幻樂團、地霊殿、旧地獄街道からも！」

パルスィ

「ありがたいわねゝ」

タモリ

「最近どうですか？」

パルスィ

「暇ねゝ。いやほんと」

タモリ

「そうなんですか？」

パルスィ

「忌み嫌われた者たちの巣窟である地底にわざわざ降りてくる奴なんて、巫女か魔女くらいなものよ。あの余裕が妬ましいわ！」

タモリ

「で、実際にはロクに橋を通る者はいないと？」

パルスィ

「そうね。まあそれはそれで楽でいいんだけど…」

タモリ

「ほう？」

パルスィ

「いやあたし、元は嫉妬に狂った女でしょう？」

タモリ

「あ、なんかそんな説ありますね。橋姫といえば先ほどの“宇治の橋姫”は有名なようすし」

パルスィ

「いやまあ、その時は若かったからこんな風になったんだけどさあ…もう一度若いころのように、燃えるような恋をしてみたいのよねえ…」

遠い目で遙か昔のことを語るパルスィ

タモリ

「あゝ、そうなんですか。でも…」

パルスィ

「わかってる。私は嫉妬を操る者。人が近づきにくい者…。でもさあ、それでも寄ってくるような酔狂な奴がいたら、それでもいいかなあ…なんて」

少し苦笑しつつ語るパルスィ

『おお〜！〜！』

タモリ

「おお、東方テレフォンショッキング初の恋バナですか!!」

パルスィ

「橋姫が恋の話とは、少しおかしな気もするけどね。でもまあいいじゃないの。嫉妬は恋の一つの形よ？その人を一人占めしたいという気持ちの形」

タモリ

「いいこと言いますねえ…」

パルスィ

「もう一度味わってみたいのよ。他の女にとられて気が狂いそうなほど嫉妬するような、そんな熱い恋を」

タモリ

「ずいぶん詩的なこと語りますねえ…」

パルスィ

「でもまあ、なかなか相手いないんだけどね…。骨のある男がないのか、あたしが男をはねのけているのか？」

タモリ

「時代は草食系男子が多くなりつつありますからね」

パルスィ

「その中に作者も含まれるんだけどね」

タモリ

「ははは…」

パルスィ

「ん、いつそのこと外の世界みたく合コンでもやってみたいけどね」

タモリ

「地底に男いますかね？」

パルスィ

「そこが問題なのよ！！全く、地上の世界が妬ましいわ！！」

タモリ

「こりゃ相手探しは難航しそうだなあ…」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

パルスィ

「どうしようかしら？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

パルスィ

「じゃあ“両想いの恋が上手く成就した人”をお願いします！」

タモリ

「おお、ロマンチックですね。では“両想いの恋が上手く成就した人” スイッチオン！」

）

パルスィ

「ああ、0人か」

タモリ

「恋は難しいですね」

パルスィ

「その難しさが妬ましいわ!!」

タモリ

「それが恋ですって!!」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!!』

パルスィ

「では…星熊勇儀様を呼びますね」

『おお〜!〜!』

タモリ

「ついに来ますか？語られる怪力乱神！」

ADさんがつながった電話をパルスィに渡す

パルスィ

「もしもし？パルスィです」

勇儀

「もしもし？」

パルスィ

「お久しぶりです。今、何されていました？」

勇儀

「いつもどおりさ。飲み連中と酒食らった」

パルスィ

「では、タモリさんに代わりますね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

勇儀

「もしもし。どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

勇儀

「大丈夫さ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

勇儀

「いいとも〜!〜!」

タモリ

「はい、お待ちしております!」

）

第十八回：水橋パルスィ（後書き）

第十八回：水橋パルスィ編いかがでしたか？

パルスィは嫉妬を操るところから、昔大恋愛してるイメージがあるのでこうなりました。“妬ましいわ”は寂しさや思い出の現れかもしれませんね。

次は勇儀姐さんです。明日も見えてくれるかな？

第十九回：星熊勇儀

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは〜!〜!』

タモリ

「鬼が来るそうですね」

『そうですね!〜!』

タモリ

「なんと怪力だそうですね」

『そうですね!〜!』

タモリ

「でも炒った豆が苦手そうですね」

『そうですね!〜!』

タモリ

「私も苦手なんです、炒った豆。歯に挟まって取れないのなんのつて…」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日の水橋パールスイさんの紹介で初登場、星熊勇儀さんです!どうぞ!」

拍手と共に勇儀が登場!

勇儀

「おおおう、よろしく頼むわ皆の集!」
盃片手に勇儀がさっそうと登場!

『勇儀姐さ〜ん!』

『かつこいい〜!』

勇儀

「ははは、いいねえ外の世界は華やかで!」

タモリ

「豪快な登場ですねえ!」

勇儀

「なあに、軽いもんさ!」

バシッ!

勇儀は照れ隠しで軽くタモリさんの肩を叩いた!!

タモリ

「ぐえっ!」

勇儀

「おおっと！いや失敬！軽くしたつもりだったんだが…」

タモリ

「十分痛いよ！！鬼だつてこと自覚してください！！」

勇儀

「あゝ、すまんすまん」

タモリ

「お、それは？」

勇儀

「愛知県は岡崎市の滝山寺で旧暦1月7日に近い土曜日に開催の滝山寺鬼まつりのポスターよ！」

タモリ

「鬼は祭りと関わり合い大きいですからね」

勇儀

「天下泰平・五穀豊穰を祈るものでねえ…私も混じって呑みたいものさ」

タモリ

「本物出てきたら怖すぎるでしょ…！」

勇儀

「あっはっは！そりゃそうだ！」

タモリ

「お花も届いてますね〜ZUNさんに上海アリス幻楽団、地霊殿、妖怪の山一同、伊吹萃香さんからも!」

勇儀

「お、あいつ気がきくね〜!今宵はいい酒持ってあいつと飲み明かすか!」

タモリ

「すごい飲み会でしょうね…最近はどうですか?」

勇儀

「うーん、酒飲んで宴会して十分満足してんだけどさあ…。腕試しがしたいのよ!」

タモリ

「強い奴と戦いたい、鬼の性分ってやつですか?」

勇儀

「よくわかってるね〜」

タモリ

「でも相当な奴つれてこないとダメでしょ…」

勇儀

「そうなんだよなあ…」

タモリ

「地底の外にはいろいろいるんですけどねえ。暇そうな天人くずれとか、幽閉されてた吸血鬼とか」

勇儀

「一度手合わせ願いたいものさ」

タモリ

「あ、いやマズイかも。周りに相当な被害が…」

勇儀

「そんなときゃ私と萃香で直すさ。あとは旨い酒でも持っていけば問題なし！」

タモリ

「豪快だねえ…いやほんと」

勇儀

「いやまあ、それがダメならせめて派手な祭りでもしようかと思ってるけどね」

タモリ

「いつも宴会してるのに？」

勇儀

「確かにそうなんだけどさ…。宴会とは違う雰囲気味わいたいのさ」

タモリ

「たとえばどんな？」

勇儀

「けんか祭りとか」

タモリ

「大問題でしょ!!」

勇儀

「火事と喧嘩は江戸の華、でしょう?」

タモリ

「いや鬼が神輿かついでぶつけ合ったら相当マズイでしょう…」

勇儀

「でも壮大だと思うよ?」

タモリ

「確かに圧巻のスケールだけど…あなたは参加できないでしょう?」

勇儀

「そうかな? なんなら一人で神輿かついてもいいけど?」

タモリ

「相手が多数の鬼でも“力の勇儀”の前では歯が立たないでしょ!」

勇儀

「ちゃんと加減するよ? 盃の酒をこぼさないまま神輿がつぐとが」

タモリ

「もうそれ自体がすごいイベントだなあ…」

）

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

勇儀

「さ〜で、どうしようかねえ？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

勇儀

「そんじゃあ…“昨日お酒を一升のんだ人”で頼む！」

タモリ

「一升か〜。でも一人いるかも知れませんか。では“昨日お酒を一升のんだ人”スイッチオン！」

〜

勇儀

「お！1人！！」

タモリ

「あの人だ！」

手を上げる一人の男性を指さす

勇儀

「兄さんいけるクチだね〜」

ADさんからストラップを受け取る

勇儀

「そんじゃあこの鉄の腕輪に付けようかね」

タモリ

「ありがとうございます!!」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい!」

『え〜!!』

勇儀

「では鬼の四天王の一角、伊吹萃香を呼びます!!」

『おお〜!!』

タモリ

「やはりそうきますか〜」

ADさんがつながった電話を勇儀に渡す

勇儀

「もしもし?」

萃香

「ぐー、ぐー」

勇儀

「あん？おいつ！酒食らって寝てんのか！？起きろ！」

萃香

「あー…もしもし？その声勇儀か？どしたの？」
今起きたばかりの寝ぼけた声で萃香が返事する

勇儀

「明日のテレフォンショッキングにあんたを紹介したの！それじゃタモリさんに代わるから」
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

萃香

「もしもし？」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

萃香

「大丈夫だよ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

萃香

「いいとも〜!」

タモリ

「はい、お待ちしています!」

）

第十九回：星熊勇儀（後書き）

第十九回：星熊勇儀編いかがでしたか？

勇儀姐さんは金髪なのに和のイメージありまくりですからね。もうハッピー着て神輿かついだら男顔負けじゃないかと。そこからこんな話になりました。

勇儀姐さんなら右手で神輿かついで左手にある酒を飲むなんて楽勝でしょうね。

次回はいよいよ二十回目！明日も見てくれるかな？

第二十回・伊吹萃香

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはは〜!〜!』

タモリ

「今日も鬼ですね」

『そうですね!〜!』

タモリ

「お酒をよく飲むそうですね」

『そうですね!〜!』

タモリ

「二日酔いしないでしょうね」

『そうですね!〜!』

タモリ

「あんなに飲んでアル中にならないのかなあ?」

『そうですね!〜!』

タモリ

「あの人絶対にウコンの力やキャベジンいらなんでしょうね」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日の星熊勇儀さんの紹介で初登場、伊吹萃香さんです！どうぞ」

）

拍手と共に萃香が登場！

萃香

「どうもー！！いやー初めましてー！！」

いつもどおり酔っ払いつつ萃香が登場！！

『萃香ー！ー！！』

『可愛いー！！』

萃香

「いやー、やっぱり外の世界は賑やかだねえー！！」

タモリ

「相変わらず飲んでますねえー！！」

萃香

「飲む？」

腰の瓢箪ひょうたんをかかげて見せる

タモリ

「いや〜、そういうわけには…」

萃香

「昼から酒飲めないとは…大変だねえ」

タモリ

「お、それは？」

萃香

「10月15日に京都府京都市一条通り、大將軍商店街で行われる
一条百鬼夜行のポスターよ!!」

タモリ

「百鬼夜行ってことは、妖怪の仮装行列ですか？」

萃香

「まあそうだね〜。でも本物と比べたらまだまだだね」

タモリ

「いやいや！本物と比べちゃダメでしょ！」

萃香

「何だったら出てもいいけど？私先頭で、勇儀や紫とか、あとは天
狗や河童なら大勢呼べると思うけど？」

タモリ

「たしかに壮大でしょうけど…絶対やっちゃダメですよ！」

萃香

「ちえ〜、でも幻想郷で百鬼夜行しても面白くないもんなあ…」

タモリ

「もはや見慣れたものでしょうからね」

タモリ

「お花も届いてますね〜ZUNさんに上海アリス幻楽団、妖怪の山一同、星熊勇儀さん、比那名居 天子さん、博麗神社、八雲家からも！」

萃香

「おお、来たねえ！！」

タモリ

「霊夢さんから来るとは…流石ですね」

萃香

「能力で萃^{あつ}めたんだよ」

タモリ

「強制的に！？」

萃香

「そつでもしなきゃ花出さないでしょ？」

タモリ

「いや確かにそつかも…」

タモリ

「最近はどうですか？」

萃香

「あいかわらず酒飲んでいるんだけどね」

タモリ

「あ、そうなんですか。どこで飲んでるんです？」

萃香

「まあ、天界だったり霊夢とこだったり…」

タモリ

「なるほど」

萃香

「でもまあ最近はや雀んところで飲んだりするかな？」

タモリ

「ミスティアさんのですか？」

萃香

「そうそう！あの八目ウナギの！」

タモリ

「よく行くんですか？」

萃香

「週五だね」

タモリ

「すごいな」

萃香

「あそこ面白いんだよね。普段会わない奴と飲めるから」

タモリ

「たとえばどんな？」

萃香

「それがさあ、最近…あの不死の、火を使う…」

タモリ

「藤原 妹紅さんですか？」

萃香

「そうそう、あの妹紅！死なないから思いっきり飲ませてやったわ
〜！あの時は楽しかった！」

タモリ

「そんなことやってたんですか!？」

萃香

「すでにベロベロの状態から、さらに瓢箪の酒飲ませたっけな？完
壁につぶしちまった。もう意識失いかけてたな。目がうつろだった
し」

タモリ

「止めときなさいって!」

萃香

「そんでやってきたあの蓬莱山 輝夜も瓢箪の酒でつぶしちまって
さあ…。いや、あいつら不死のせいか、普通の酒じゃ効きにくいの

よね

タモリ

「お姫様つぶしたの!？」

萃香

「あんときゃヤバかったな〜!!後からやってきた薬師と半獣が怒り狂って弾幕の雨あられ!!“今夜を無かったことにしてやる!!”なんてね…」

タモリ

「そうなるでしょ!!」

萃香

「すでにその時は酒飲み過ぎててさあ…こりゃ流石にマズイと思って天界まで飛んでって、追って来た二人と天子が弾幕始めて…」

タモリ

「その隙に逃げたんだ？」

萃香

「そうそう!」

タモリ

「人騒がせだなあ…」

萃香

「まあ良かったと思うよ?里の人たちや流星群と思ってたらしいし。いい夏の思い出だったろうよ?」

タモリ

「いいのかなあ？天子はやられたんでしょう？」

萃香

「いいんじゃないかな。天子暇そうだったし。終わりよければすべてよし。酒は人付き合いを円滑にするのさ。人工の天体観測もいいんじゃない？」

タモリ

「確かにそうかもしれませんが……」

萃香

「まさに“瓢箪から星”……」

タモリ

「いやなってるけども……新しい格言作らんで下さい……」

）

一日CM

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

萃香

「どうしようかねえ？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

萃香

「それじゃあ…“泣き上戸の人”で！」

タモリ

「泣き上戸ですか？」

萃香

「あたしゃ見たことないんでね。そんな奴いるのかと思ってさあ…」

タモリ

「では“泣き上戸の人”スイッチオン！」

）

萃香

「あれ！？3人！！」

タモリ

「いますね〜！！」

萃香

「そいつらとは飲みにくいだろうね〜」

タモリ

「いやまあ…飲んでどうなるかはわからないものですからねえ」

）

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

萃香

「では昔からの旧友、八雲紫を呼びます!〜!」

『おお〜!〜!』

タモリ

「ついに来ますか〜大妖怪!」

ADさんがつながった電話を萃香に渡す

萃香

「もしもし?」

紫

「もしもし?」

萃香

「何してんの?」

紫

「家で見てたわ。まったくもう、あの流星群あんたが黒幕だったの?」

萃香

「まあいいじゃないか。それじゃタモリさんに代わるから」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

紫

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

紫

「ええ大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

紫

「いいとも〜!〜!」

タモリ

「はい、お待ちしております!」

〜

第二十回：伊吹萃香（後書き）

第二十回・伊吹萃香編、いかがでしたか？

萃香の前が勇儀で、勇儀は腕力の話でしたからお酒の話にしようと思っ
て書いたらこんな形になりました。

萃香は相手が死なないとわかったら、文字通りつぶれても飲まずで
しょうね。

皆さんは絶対やらないように！！

次回は紫、その次はkameさんのリクエストで阿求さんにします
ね。

転生しつづける阿求さんと紫さんは長年の付き合いありそうですし。
明日も見えてくれるかな？

第二十一回・八雲紫

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日はスキマ妖怪だそうですね」

『そうですね!』

タモリ

「いろんなとこワープするそうですね…いいですね」

『そうですね!』

タモリ

「世界旅行簡単に出来ますからね」

『そうですね!』

タモリ

「彼女なら世界旅行も小旅行になるんだらうなあ…」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日の伊吹萃香さんの紹介で初登場、八雲紫さんです！どうぞ」

拍手と共に紫がスキマを開けて登場！

紫

「ふふ、どうも初めまして」
傘をさしつつ紫が登場！！

『おお〜！！』

タモリ

「また一風変わった登場ですねえ！」

紫

「これが私らしいと思ってね」

タモリ

「お、それは？」

紫

「神奈川県鎌倉市、八雲神社で7月中旬の土・日・月曜に行われる八雲神社例大祭のポスターよ」

タモリ

「ほ〜、あるんですねえ八雲の祭り」

紫

「町内じゅうで行われる大々的な祭りよ。4基の神輿が練り歩くわ」

タモリ

「そうですか…貼っついてちょうだい!」

タモリ

「お花も届いてますね〜ZUNさんに上海アリス幻樂團、伊吹萃香さん、博麗神社、白玉楼、八雲家、稗田阿求さんからも!」

紫

「ふふっ、ありがたいわねえ」

タモリ

「最近はどうですか?」

紫

「私としては順風満帆、何も不自由してないんだけどね」

タモリ

「自機、サポート、EXボス、全て制覇しましたしね」

紫

「いやまあ、私は正面切って何かやらかすより裏から手を回す方が好きなんだけどね」

タモリ

「確かにそうですね〜」

紫

「私としてはこの性格と能力、いい具合に合ってると思うわ」

タモリ

「スキマ能力ですか…潜入にもってこいですからね」

紫

「でもそのせいで謎多いキャラになってるけどね」

タモリ

「ああ、確かに」

紫

「だから外の世界の創作物だと、本物の私からかけ離れた人になってるのよね」

タモリ

「いや、それは他のキャラもそうでしょ？」

紫

「確かにそうなんだけど、私ほど振れ幅大きいのもいないと思うわよ？」

タモリ

「そうなんですか？」

紫

「あるときは幼児体型、あるときはナイスボディの大人の女性、またあるときは怠け者…」

タモリ

「安定しませんね」

紫

「あの悪魔の妹なみのイジられっぶりよー!」

タモリ

「謎多いですからね。冬眠するし、どこにいるかわからないし」

紫

「もうすこし謎を明かしてみようかしら」

タモリ

「とーとー?」

紫

「自伝を書くとかどうかしら?」

タモリ

「おお、それいいですね」

紫

「私の出生から今までを書くの」

タモリ

「うわ…」

紫

「幻想郷誕生から私が関わった様々な異変や出来事を書くの!これなら私への誤解も拭える!」

タモリ

「え、それって…書ききれます?」

紫

「……やっぱり無理そうね。書くスピードが追い付きそうにないわ」

タモリ

「相当な量ありますからね……」

紫

「……タモリさん、紳士として歳には触れないで自分で言っときながら少しへこむ紫でした。」

）

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

紫

「どっしよっかしらね？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

紫

「それじゃあ……外では常に日傘をさしてる人”でお願いします」

タモリ

「では“外では常に日傘をさしてる人”スイッチオン！」

）

紫

「0人か…」

タモリ

「夏真っ盛りならいたかもしれませんけどね」

紫

「さすがに秋に変わりつつあるからね」

）

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！！』

紫

「では稗田阿求を呼びます！！」

『おお〜！！』

タモリ

「あの方ですか」

紫

「昔からの付き合いがありますからね」

ADさんがつながった電話を紫に渡す

紫

「もしもし?」

阿求

「もしもし?」

紫

「今何してるの?」

阿求

「執筆のかたわら見てました。」

紫

「あら、ありがと。それじゃタモリさんに代わるから
受話器がタモリさんに渡される」

タモリ

「もしもしタモリです」

阿求

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか?」

阿求

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

阿求

「いいとも〜!」

タモリ

「はい、お待ちしております!」

）

第二十一回・八雲紫（後書き）

第二十一回：八雲紫編いかがでしたか？

紫ほど謎多いキャラいないでしょうね。彼女はホントどんな日常を送ってるんだろっ…

次回の阿求はもっと謎なんですよね。求聞史紀持ってないんです。どうなることやら…明日も見えてくれるかな？

第二十二回・稗田阿求

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日の方は見た物全て覚えるそうですね」

『そうですね!!』

タモリ

「テストの時役立つでしょうね」

『そうですね!!』

タモリ

「作者は逆に“大切なことから先に忘れる能力”を持っています」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日の八雲紫さんの紹介で初登場、稗田阿求さんです!どうぞ」

）

拍手と共に阿求が登場!

阿求

「こんにちは。どうも初めまして」

『可愛い〜!』

『阿求〜!』

阿求

「すごいですねえ、外の世界は…」

タモリ

「あ、それは？」

阿求

「はい、毎年8月16日に奈良県大和郡山市稗田町の売太^{めた}神社で行われている阿礼^{あれ}祭のポスターです」

タモリ

「ほう…どんな祭りなんです？」

阿求

「日本最古の歴史書、古事記の編纂をした稗田阿礼の遺徳を偲び、神事や舞、お神輿も出ます。1930年から行われて今年で82回を迎えました」

タモリ

「そうなんですか…」

阿求

「私もこんな方になりたいですわ」

タモリ

「そうですね！貼っついてちょうだい！！」

タモリ

「お花も届いてますね〜ZUNさんに上海アリス幻樂團、八雲家、人里一同、上白沢慧音さんからも！」

阿求

「ありがとうございます！！」

タモリ

「よかったですね〜」

阿求

「同じ本数返すことにしましょう」

タモリ

「ものすごい律儀ですねえ…」

タモリ

「最近はどうですか？」

阿求

「そうですねえ…あいかかわらず執筆を続けてはいるのですが」

タモリ

「幻想郷縁起ですね」

阿求

「いやあ…あの取材のときは大変ですよ。人によっては危ないし」

タモリ

「あ、そうなんですか？」

阿求

「たまに紫さんが手伝うこともあるんですが、出来る限り自分の手で取材するように心がけているんです。それで…」

タモリ

「ああ、確かに危険な妖怪いますからねえ」

阿求

「風見幽香さんやフランドールさんに取材した時は大変でしたよ」

『ええ〜!!』

タモリ

「ええ！？あの二人と!？」

阿求

「まあ、幽香さんの時は紫さんが、フランさんの時はパチュリーさんとレミリアさんが同席していたんですけどね」

タモリ

「それで、どうでした？」

阿求

「フランさんは常識があつて無事に済んだんですが、幽香さんはか

なり緊張しましたね」

タモリ

「そうですね…」

阿求

「百戦錬磨の賜物とでもいうのでしょうか、あの眼光と気迫が凄くて…」

タモリ

「そうですね」

阿求

「それこそ下手なこと言ったら食虫植物の餌にされそうですね。冷や汗が溢れるほど流れて…」

タモリ

「お疲れさまでした」

阿求

「まあでも、最近現れた方々は友好的で取材が楽でしたね」

タモリ

「といますと？」

阿求

「命蓮寺の方々とか…」

タモリ

「ああ、あの方たちは友好的でしょうね」

阿求

「快く引き受けて下さいました。ただそこでちょっとした事件が…」

タモリ

「何があったのです?」

阿求

「命蓮寺で取材していたらすっかり遅くなりまして、その日は一泊お世話になったんです」

タモリ

「ほう?」

阿求

「美味しい精進料理とお湯を頂いて、もう床に着こうとロウソクの火を消したときに…障子の向こうに青白い光が…」

タモリ

「うわ…」

阿求

「正直見なくなかったんで、布団に潜り込んで目を閉じていたら“カラン、コロン”という下駄の音が廊下に響いて…」

タモリ

「ほうほう」

阿求

「その音がだんだん近づいて…もうダメと思ったときにふと、下駄

の音がフツと消えたんです」

タモリ

「それで？」

阿求

「どうしたのかと思って、布団からゆっくり顔を出すと！！そこに一つ目のカラカサお化けが！！」

タモリ

「おお！！小傘ちゃんに驚かされたんだ？彼女喜んでいたでしょ？驚いてくれたから」

阿求

「いえ、それが…。私、あまりの恐怖で反射的に彼女の顔に正拳を」

タモリ

「ええ！？殴ったの！？」

阿求

「見事に鼻に入りましたね」

タモリ

「うわあ…小傘ちゃん泣いてたでしょ？」

阿求

「いえ、“殴るほど驚いてくれてうれしい”って笑ってました」

タモリ

「大したプロ根性だなあ…」

一旦CM

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

阿求

「どうしようかしら？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

阿求

「それじゃあ…“元素記号をすべて暗記している人”をお願いします」

タモリ

「そつきますか…では“元素記号をすべて暗記している人”スイッチオン！」

阿求

「ああ、2人か…」

タモリ

「理系の大学生の方ですかね？」

阿求

「いらっしやいましたか〜。う〜ん」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

阿求

「では上白沢慧音さん呼びます!〜!」

『おお〜!〜!』

タモリ

「あの方ですか〜」

阿求

「同じ歴史を書く者同士、親交があるんです」

ADさんがつながった電話を阿求に渡す

阿求

「もしもし?」

慧音

「もしもし?」

阿求

「お久しぶりです。今何してましたか？」

慧音

「テストの採点のかたわら見てました」

阿求

「ありがとうございます。それじゃタモリさんに代わります」
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

慧音

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

慧音

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

慧音

「いいとも〜!〜!」

タモリ

「はい、お待ちしております!〜!」

}

第二十二回・稗田阿求（後書き）

第二十二回、稗田阿求編いかがでしたか？

かなりこれは難産しました。原作の知識不足がモロに出ましたね。
正午更新できずすいません

驚かされて顔に正拳を喰らわせたことが、実は私にはあります。相
手は何と女の子！あの時はかなり気まづくなっ たなあ…

次回は慧音先生です。明日も見えてくれるかな？

第二十三回・上白沢慧音

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日のゲストは歴史の先生です」

『そうですね!』

タモリ

「歴史の授業：中学、高校以来ですかね？」

『そうですね!』

タモリ

「いい国作ろう鎌倉幕府!なんてね」

『そうですね!』

タモリ

「いい国作ろう野田内閣!言ってみただけです」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日の稗田阿求さんの紹介で初登場、上白沢慧音さんです!どうぞ」

拍手と共に慧音が登場!

慧音

「こんにちは。どうも初めまして」

『慧音先生〜!〜!』

『ぎゃ〜!〜!』

慧音

「ど…どうも。いや凄いな」

どうもこのような雰囲気には慣れていないらしい

タモリ

「あ、それは？」

慧音

「ああ、群馬県は沼田市で毎年七月下旬に開催される白沢ふるさと祭りのポスターです」

タモリ

「白沢という地名あるんですねえ」

慧音

「いえいえ、道の駅“白沢”で行われるのです。14台の神輿をはじめ、地酒や焼きまんじゅう、トマトなどの特産物提供、伝統芸能

の発表が主です」

タモリ

「そうですか。貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻樂團、人里一同、稗田阿求さん、藤原妹紅さんから！」

慧音

「ありがたいですね。いや気を使ってくれなくとも良かったのに」

タモリ

「まあいいんじゃないでしょうかね」

慧音

「ふむ。どうしたものか」

タモリ

「最近はどうですか？」

慧音

「うーん、歴史の授業は上手くいってるかが心配なんですよねえ」

タモリ

「気になるところですね」

慧音

「まずどう興味を持たせるかが鍵ですよ。最近じゃ“歴史だけじゃ運命は変えられない”とか言う子もいますし」

タモリ

「ほぼ間違いなくレミリアさんの影響でしょうね」

慧音

「否！私は声を大にして言いたい！！歴史とは！未来を切り開く一つの道しるべになる！私はそう信じている」

タモリ

「おお…熱いですねえ」

慧音

「でなきゃ長いこと教師やろうなんて考えませんよ」

タモリ

「まあ確かに」

慧音

「だからたまにテストをして悪いと気落ちしますよ…」

タモリ

「お疲れ様です。問題児でもいるんですか？」

慧音

「なんといったらいいのかなあ…。根は真面目だけどなぜか珍回答を出すんですよね」

タモリ

「ああ、なるほど」

慧音

「どろしたものが…」

タモリ

「最近じゃあテレビ番組でテストやらせてみると、もの凄い珍回答返してくる人いますからねえ」

慧音

「嘆かわしいですねえ…一度私の手で育て上げてみたいものです」

タモリ

「慧音さんが？そしたら…頭の形変わったりしません？」

慧音

「いやいや！そこまでスパルタではないぞ？」

タモリ

「まあでも、最近じゃ戦国武将に興味を持つ人が多いですね」

慧音

「俗に言う歴女ってやつですね。嬉しいです」

タモリ

「そつでしゅうね〜」

慧音

「ただ、その人の好きな英雄のみ見ている気がするんですよ」

タモリ

「とていひと〜」

慧音

「歴史とは多くの人々が影響し合って紡ぎあげた物。そこには多くの人々のドラマがある。そこを理解してほしい」

タモリ

「確かに…」

慧音

「歴史にはきちんと“なぜ起こったか”という理由があるんです。それを理解すれば、世の流れがわかり人生の道を開くカギとなると思っんですがね」

タモリ

「すごいですねえ…」

慧音

「けども、寺子屋で教えるのはたいがいが子供。どうしたものか…」

タモリ

「切実な悩みですねえ」

慧音

「衣装を変えてみるかな？」

タモリ

「といたしますと？」

慧音

「平安時代の授業では十二単を着るとか…」

タモリ

「無理があるでしょ!!!」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

慧音

「さて、どうしようか?」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか?」

慧音

「それでは…“旧作から最新の神霊廟まで東方のゲームを全て持っている人”をお願いします」

タモリ

「えっ、何故?」

慧音

「東方の歴史と共に歩んだ人というわけです」

タモリ

「そうきますか…では“旧作から最新の神霊廟まで東方のゲームを

全て持っている人”スイッチオン！」

）

慧音

「おお、2人か…！」

タモリ

「やはり根強い人気ですね」

慧音

「いらっしゃいましたか…！」

タモリ

「…あの、（歴史を）食べないで下さいよ？」

慧音

「ええまあ、もちろん」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！〜！』

慧音

「では藤原妹紅を呼びます…！」

『おお〜!〜!』

タモリ

「ついに来ますか蓬菜人!!」

ADさんがつながった電話を慧音に渡す

慧音

「もしもし?」

妹紅

「もしもし?」

慧音

「今何してた?」

妹紅

「寺子屋で生徒のみんなと共に見てたよ」

慧音

「ありがとう。それじゃタモリさんに代わるから
受話器がタモリさんに渡される」

タモリ

「もしもしタモリです」

妹紅

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

妹紅

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

妹紅

「いいとも〜!」

タモリ

「はい、お待ちしております!」

）

第二十三回・上白沢慧音（後書き）

第二十三回、上白沢慧音編いかがでしたか？

慧音先生はすごい楽だった！いやあ、私の歴史の先生の台詞をアレンジして書いたらすぐできました！

慧音先生は長年教師やってるくらいだから、おそらく熱い先生だろうと考えることができました。頭突き怖い…

次回は藤原妹紅です！明日も見えてくれるかな？

第二十四回・藤原妹紅

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはー!!』

タモリ

「今日は不死鳥をモデルにした人ですね」

『そうですね!!』

タモリ

「背中に火の翼持ってますね」

『そうですね!!』

タモリ

「懐かしいなあ、手塚先生の火の鳥…小さい頃読んだなあ」

タモリ

「では登場していただきますしょう、昨日の上白沢慧音さんの紹介で初登場、藤原妹紅さんです!どうぞ」

）

拍手と共に妹紅が登場!

妹紅

「どうも、初めまして」

『妹紅！！』

『綺麗！！』

妹紅

「すごいな…私が人の時からはや千年、人とは賑やかになったものよ」

タモリ

「貫禄のあるセリフですねえ…」

妹紅

「なら私も少し羽目を外そうか？」

妹紅が力を込めると、背中に燃える炎の翼！！

『おお！！』

タモリ

「ちょっとちょっと！！」

妹紅

「さて、これくらいにしとしましょうか」「
すぐに翼は一瞬で消えた…」

タモリ

「あ〜びつくりした！あ、それは？」

妹紅

「例年、福井県で毎年8月1日から8月3日の3日間にかけて行われている福井フェニックスまつりのポスターよ」

タモリ

「なんか凄そうな祭りですねえ…」

妹紅

「戦災、震災、水害、雪害など多くの苦難を乗り越えてきた福井市を不死鳥、つまりフェニックスに例えているのです」

タモリ

「それはいいねえ」

妹紅

「花火によさこい、民踊にマーチング…すごく豪華なお祭りです！」

タモリ

「すごいですねえ…貼っといてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻楽団、人里一同、上白沢慧音さん、蓬莱山輝夜さんからも！」

妹紅

「ありがたいね…って輝夜！？どうゆうこと!？」

タモリ

「意外ですねえ…。これはまた綺麗なユリの花」

妹紅

「何かあるに違いない…」

つかつかと花に寄る妹紅

妹紅

「きつと何か…」

花に手をかけたその瞬間！！

ビヨン！！

仕込まれた人形がバネの力で飛び出してきた！！

だが妹紅、これは読んでいたのか即座に避けた！！

タモリ

「おおー！！！」

妹紅

「全く輝夜め…こんなことだろうと思ったよ！！やることが子供じみているんだから…」

タモリ

「長年戦っているだけありますね」

妹紅

「千年以上戦ってればこんなの読める…」

そっつい、妹紅がバネに触れた瞬間！！

バチイイツ！！

妹紅

「痛ったあ！！あの野郎…バネに電流流してやがる！！」

タモリ

「…時とともに進歩してますねえ」

妹紅

「むきー！！今夜はただじゃおかない！！首を洗って待っている！！」

タモリ

「ははは…まあ落ち着いて。最近はどうです？」

妹紅

「そうねえ…まあ相変わらず輝夜と殺り合ってるわけんだけど」

タモリ

「怖いな…」

妹紅

「毎日の恒例行事ね」

タモリ

「そうですね…」

妹紅

「昔からやっつてることと言ったらそれくらいねえ…」

タモリ

「あ、そうなんですか？」

妹紅

「まず家が竹林だからねえ…人があんまり寄らないのよ。会う人が限定されるわけ」

タモリ

「あゝ、なるほど…」

妹紅

「だから一人でやることも多くなるのよねえ…。料理とか、陶芸とか…」

タモリ

「結構多趣味ですねえ」

妹紅

「時間は限りなくあるからねえ、いろいろやったわ…おかげで色々な事を自分一人でやれるけどね」

タモリ

「へえ」

妹紅

「竹林で暮らしているとそんなものよ？あるのはこの炎の力だけだし。竹林で暮らし始めた時は大変だったわ…」

タモリ

「そうなんですか？」

妹紅

「まあ元は貴族のはしくれでね、最初はろくにご飯も炊けずに苦勞したわ…水多すぎておかゆみたいになったり、途中でふた開けて硬くなったり」

タモリ

「あゝ、なるほど…」

妹紅

「それに、自然のままの竹林に住むわけだから竹との戦いがね」

タモリ

「竹との戦い？」

妹紅

「いやまあ、竹を切りはらって家を建てたんですけど…」

タモリ

「そんなことしたの!？」

妹紅

「炎使えば竹をはらうのは簡単だったし、身に付いた妖力で力仕事も何とかなったのよ。あの輝夜も金閣寺の一枚天井撃つてくるぐらいいだし」

タモリ

「そうなんですか…」

妹紅

「で、いざ住んでから数カ月後かなあ？夜、寝てたら小さく“ミシ

ツ、ミシツ”って聞けるのよ」

タモリ

「ほうほう」

妹紅

「最初は天井裏のネズミかなあと思ったんだけど、いくら探してもネズミはいなくて…数日してやっとわかったのよね」

タモリ

「なんだったんです？」

妹紅

「最初、竹を伐採して火をつけて地ならしたんだけど、その時まだ竹の子が残っていたらしくて…」

タモリ

「生えてきたんだ!？」

妹紅

「そうそう!いや私もびっくりしたわ…床をぶち抜いて生えてきたのよ!」

タモリ

「床を!？」

妹紅

「それに気付かず踏んづけてさあ…いやびっくりした!床に竹生えることあるとはね」

タモリ

「そりゃ驚きますね…」

妹紅

「でもまあ、家できたらあとはなんとかあったわね。燃料は竹炭でどうにかなったし、食糧はタケノコや山菜を中心に…」

タモリ

「すごいですねえ…」

妹紅

「そのうち囲炉裏やかまど作って、炎を使っているいろいろあったわね… 燻製作ったりとか、道具もいろいろ… 食器とか、ナベや鎌とかも作ったり」

タモリ

「器用ですねえ？」

妹紅

「そのうち慧音がやってきて、いろいろあったなあ…。寺子屋作ったり…」

タモリ

「作ったの!？」

妹紅

「なんせ資金不足でさあ…。出来る限り私と慧音で作ったわ。黒板とか窓ガラスとか」

タモリ

「すごい自給自足ですねえ…」

妹紅

「そのへんの知識と技術ならDASH村に負けないと思うよ？」

タモリ

「知ってるんだ!？」

妹紅

「見るたび昔を思い出してねえ…」

タモリ

「千年を超える思い出と経験ですからねえ…。本出したら売れるかも」

)

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

妹紅

「さて、どうしようっ?」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか?」

妹紅

「それでは…“ガス式の炊飯器が家にある人” お願いします」

タモリ

「えっ、ガス式？電気炊飯器ができる前の？」

妹紅

「そう、ガスの火で炊くやつ。まだいるかな」と思っ

タモリ

「そうきますか…では“ガス式の炊飯器が家にある人” スイッチオン！」

）

妹紅

「ああ、0人か…！」

タモリ

「さすがにいないか？」

妹紅

「最近じゃ煮炊きも電気に変わってきているからねえ…時代の流れかな」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

妹紅

「じゃあ…呼びたくはないけど蓬萊山輝夜を呼びます!〜!」

『おお〜!〜!』

タモリ

「月のお姫様ですか…でもなぜ?」

妹紅

「まあいろいろあってね」

ADさんがつながった電話を妹紅に渡す

妹紅

「もしもし?」

輝夜

「もしもし?」

妹紅

「今何してた?」

輝夜

「あんたがシビれてる間抜けな姿を見ていたわ」

妹紅

「そっかい…」

既にこめかみに血管が浮き出ている妹紅

妹紅

「…まあいいわ、それじゃタモリさんに代わるから
受話器がタモリさんに渡される」

タモリ

「もしもしタモリです」

輝夜

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

輝夜

「ええ、大丈夫よ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

輝夜

「いいとも〜!!」

タモリ

「はい、お待ちしております!」

）

第二十四回・藤原妹紅（後書き）

第二十四回目、藤原妹紅編いかがでしたか？

彼女は自給自足の知識が相当あるだろうとの考えでこうなりました。

それこそ本家DASH村に勝るとも劣らないほどと思います。

それこそ火の力で料理から鍛冶、陶芸まで何でもこなすのではないかなあ？

次回は蓬萊山輝夜です。明日も見えてくれるかな？

追伸

今夜7時、この作品で何かが起こる？

ネタばれ発言は止めてくださいね

番外編・上白沢慧音（獣人版）

）

タモリ

「はい、こんばんは〜」

『こんばんは〜!〜!』

タモリ

「今回はなんと夜の特別生放送です」

『そうですね!〜!』

タモリ

「この作品初の二回にわたる登場です」

『そうですね!〜!』

タモリ

「な〜んで二回になったんだか? はい、作者の責任ですね」

タモリ

「では登場していただきましょう、今宵の夜にふさわしいワーハクタク! 二回目の登場、上白沢慧音さんです!〜どろどろ〜」

）

拍手と共に慧音が登場!

慧音

「どつもこんばんは!」

『慧音先生!』

『角かわいい!』

慧音

「いいね!この感じ!」

若干ハイになつてる半獣姿の慧音先生登場!緑の髪に一本の角が月光を受けて輝く!」

タモリ

「この作品初の二回目の登場ですねえ!」

慧音

「まさか昨日出て、次の日の夜にまた出るとはね」

タモリ

「いやほんと驚いたよ!」

慧音

「実は、今晚の2011年9月12日は満月なんですよ」

タモリ

「それで番外編ということですか?」

慧音

「しかも、今日は旧暦の8月15日、秋の十五夜にあたるんですよ」

ね

タモリ

「そうなんですか!!」

慧音

「十五夜の晩に満月になるのは実に6年ぶりだそうです。それであ、私がこのような形で出演することに…」

タモリ

「それですか…まさに絶好の日ですね」

慧音

「“今宵の月は私の為にある!!”ってどこですかね」

タモリ

「なんか少しハイになってますね!??」

慧音

「今は獣人ですから」

タモリ

「お、それは?」

慧音

「中国の北京市豊台区盧溝橋で今晚行われている中秋廟会のポスタ―です!」

タモリ

「月のお祭りですか?」

慧音

「中国では中秋節は伝統的な祭りで、丸い月は中国で“團圓”つまり家族全員が漏れずに集まることを意味するからです」

タモリ

「そうなんですか！」

慧音

「盧溝橋では雑技観賞などの伝統的な民俗シヨウがあり、二万個を超える色とりどりの提灯で飾られます！」

タモリ

「そうですか…貼っついてちょうだい！」

タモリ

「今回は…お花はありませんね。番外編ですし」

慧音

「まあその方がいいですよ。私としても心苦しいですし」

タモリ

「それにしても…獣人姿を見るのは初めてですね」

慧音

「この時のみ歴史を創ることができるんですよね」

タモリ

「そうですね」

慧音

「この能力で東方テレフォンショッキング初の二回目登場という歴史を作ったんですがね」

タモリ

「そうなんですか!？」

慧音

「いやほんと、まさか実現するとは…」

タモリ

「良かったですね…。どんな気分なんです?満月のみ獣人というのは?」

慧音

「いやまあ、確かに少し不便かな。日常ではどうということはないが、異変の時に本来の力を発揮できないとは情けない…」

タモリ

「なるほど…」

慧音

「それに、紛らわしいんですね」

タモリ

「といたしますと?」

慧音

「獣人のイメージからか、“満月になると歴史を食う”と思っている人が多いんですね…作者も昔そうでしたが」

タモリ

「ああ、確かに」

慧音

「今夜を無かったことにしてやる！」は人間の時のセリフですか
らね！」

タモリ

「獣人のときに言っても違和感ありませんからねえ……」

慧音

「あとは……やはりなんといっても可愛さが減っている気がする」

タモリ

「あ、やはり気になるんですか？」

慧音

「そりゃまあ……女の尽きぬ悩みと言いますか」

タモリ

「一時期ひどかったですからねえ……」

慧音

「まったくですよ。せっかく可愛さアピールで角にリボン結んだの
に」

タモリ

「まあまあ、落ち着いて……」

慧音

「時代の流れからするに、リボンよりシュシュのほうがいいかなあ？」

タモリ

「さらっと入れてきますねえ!？」

慧音

「いいんじゃないですか? “ロングホーンとシュシュ”」

タモリ

「ストップ!—それ以上やるとこの小説が無かったことにされるから!—!」

慧音

「冗談ですって。角があつて人気のあるキャラいないかなあ?」

タモリ

「えーっと……バツファローマンとか?」

慧音

「可愛くないでしょう!?!私、ハリケーンミキサー出来ないし!」

タモリ

「まあ、まず角のある女性キャラ自体少ないかと……」

慧音

「じゃあ、この“満月のみ獣人になる”ことを生かして売り出そうかな?」

タモリ

「といたしますと?」

慧音

「夜の異変を私が解決する!」

タモリ

「え?でも満月でなければ…」

慧音

「ええ、獣人じゃない。だからペアを組むんです」

タモリ

「誰と?」

慧音

「鈴仙と!」

タモリ

「狂気の瞳で獣人に!?!」

慧音

「それなら私をいつでも獣人へ変身させられるんじゃないかなあ…」

タモリ

「密かに思う自機への夢ですか…」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていきますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

慧音

「さて、どうしようか？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

慧音

「それでは…“東方永夜抄で妹紅のラストワード、フェニックス再誕を打ち負かした人”をお願いします」

タモリ

「えっ、何故？」

慧音

「妹紅と戦ったのは肝試しの時。それこそ、その人は筋金入りの肝を持った人でしょう？」

タモリ

「そうきますか…では“東方永夜抄で妹紅のラストワード、フェニックス再誕を打ち負かした人”スイッチオン！」

）

慧音

「おお、一人…！」

タモリ

「すごいな！！おお、あの人だ！」
手を上げる一人の男性を指さす

慧音

「大した度胸だなあ…いや、恐れ入ったよ」
ADさんがストラップを渡す

タモリ

「いやあ…あつという間の番外編でしたね」

慧音

「そうですねえ…」

タモリ

「それでは、また明日の正午にお会いしましょう！明日も見てくれるかな？」

『いいとも〜！〜！』

番外編・上白沢慧音（獣人版）（後書き）

番外編・上白沢慧音獣人バージョン、いかがでしたか？

「慧音は満月にまた出したいな」と思っていたら、なんと中秋の名月、十五夜の日に満月！！

何の運命のいたずらか、これは出さないといけないな」と思い書きました。

本来ならこれは輝夜のポジションでしょうけどね。お許しください。

東方儚月抄では幽々子が“中秋の名月っていうけど10年に9年は雨が降って見られない”って言うてましたが…皆さんは見る事ができましたか？

それでは皆さん、明日も見てくれるかな？

第二十五回・蓬萊山輝夜

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「昨日は十五夜でしたね」

『そうですね!』

タモリ

「満月でしたね」

『そうですね!』

タモリ

「私は見れませんでした。雲に隠れていて…」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日の藤原妹紅さんの紹介で初登場、蓬萊山輝夜さんです!どうぞ」

）

拍手と共に輝夜が登場！

輝夜

「どうもこんにちは」

『輝夜〜！〜！』

『髪キレ〜イ〜！〜！』

輝夜

「ふふ、どうもありがとう」

タモリ

「お、それは？」

輝夜

「7月下旬に静岡県富士市中央公園で行われる富士かぐや姫祭りのポスターです！」

タモリ

「あるんですねえ！かぐや姫の祭り…！」

輝夜

「踊りにパレード、かぐや姫コンテストとかもあるんです」

タモリ

「すごいですねえ…貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻楽団、永遠亭、藤原妹紅さんからも！」

輝夜

「ありがたいわね…え、妹紅!？」

タモリ

「意外ですねえ…。これはまた…菊の花ですか」

輝夜

「何かあるんでしょうね」

つかつかと花に寄る輝夜

輝夜

「きつと…」

花に手をかけたその瞬間!!

ビヨン!!

仕込まれた人形がバネの力で飛び出してきた!!

だが輝夜、これは読んでいたのか即座に避けた!!

タモリ

「おおー!!」

輝夜

「昨日の復讐のつもりかしら?私と同じ手とは…甘いわね妹紅!」

出てきた人形を指さし笑う

輝夜

「そして私は人形には触れない…あなたの負けよ！妹紅！」

そう言った次の瞬間！！

バアン！！

輝夜

「きゃああ！！」

いきなり人形が破裂し、中に仕込まれていたロケット花火が輝夜に直撃！！

タモリ

「うわああ！？」

輝夜

「熱っ！！水！水を早く！！」

騒然となるスタジオ

タモリ

「だ、大丈夫ですか！？」

輝夜

「大丈夫、この程度の傷ならすぐ治るわ…。妹紅め…ちょっとやり過ぎてないかしら？」

歯ぎしりしてその怒りを内に秘めようとする輝夜

タモリ

「すごい戦いだなあ…」

輝夜

「千年も続いたからねえ」

タモリ

「最近はどうですか？」

輝夜

「よくぞそれを聞いてくれたわ！」

タモリ

「え？どうされたんです？」

輝夜

「実はねえ…昨日は妹紅から紹介されたじゃない？おかしいと思ったのよ…」

タモリ

「まあ確かに」

輝夜

「おかしいと思いつつ、まあいいかとないがしろにしていたら昨日の晩、あの慧音が夜に出てたのよ…！」

タモリ

「ああ、そうですね…！」

輝夜

「おかしいでしょ！？昨日は十五夜の満月、とすれば出演するのは

私でしょ！昨日の月は私の為にあつたはず！！」

タモリ

「かぐや姫ですからねえ」

輝夜

「そのかぐや姫差し置いて慧音って何よ！！飛び入り出演してやるうと思つて永遠亭を飛び出したら、案の定妹紅に見つかつて…」

タモリ

「待ち伏せされてたんだ？」

輝夜

「そつよ！いきなりフジヤマヴォルケイノ撃つてくるつて鬼でしょ！？それから弾幕で争つてたらいつの間にか慧音の収録終わつていたわけ」

タモリ

「妹紅さんの思惑通りに進んだわけですね」

輝夜

「全くよ！弾幕で服燃えたし！！今度会つたら五つの難題全て打ち込んでやる！！」

タモリ

「まあまあ…最近はどうですか？」

輝夜

「そつねえ…いたつて平穩なんだけれど」

タモリ

「それは良かった」

輝夜

「でもさあ…私の話が最近薄れてる気がするのよ」

タモリ

「とうとう?」

輝夜

「児童書のかぐや姫は知れ渡っているけど、原本のほうは知らない人が多いよね。児童書では五つの難題とかは省かれてるし」

タモリ

「確かに…」

輝夜

「作者なんて私のスペカから五つの難題の存在を知ったぐらいだからね」

タモリ

「作者はまず古文の興味がロクにないからねえ…」

輝夜

「もう少し古文の授業が面白くなったらなあって思うわ…。面白い話いっぱいあるのよ?」

タモリ

「難しい問題ですねえ…古文を面白くする方法ですか?」

輝夜

「現代の難題ね…私が古文の教師になるとか？」

タモリ

「使う教材は竹取物語でしょ!？」

輝夜

「あ、だめ？」

タモリ

「ただの自己アピールじゃないですか…」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

輝夜

「何いこうかしら？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

輝夜

「それでは…“私の五つの難題と、難題のHardとLunatic版のスペカ名をすべて暗記している人”でお願いします」

タモリ

「え、難題とHard版？つまり…」

輝夜

「たとえば龍の頸の玉と、ブリリアントドラゴンバレッタみたいなもんね」

タモリ

「そうきますか…では“私の五つの難題と、難題のHardとLunatic版のスペカ名をすべて暗記している人”スイッチオン！」

）

輝夜

「ああ、3人が…！」

タモリ

「多いねえ!？」

輝夜

「結構覚えてるわねえ?いや意外ね」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

輝夜

「じゃあ…八意永琳を呼びます!!」

『おお〜!!』

タモリ

「月の頭脳ですか…」

A Dさんがつながった電話を輝夜に渡す

輝夜

「もしもし?」

永琳

「もしもし姫様?」

輝夜

「今何してた?」

永琳

「茶の間で見てましたわ。顔大丈夫ですか?」

輝夜

「帰ったら薬ちょうだい、それじゃタモリさんに代わるから
受話器がタモリさんに渡される」

タモリ

「もしもしタモリです」

永琳

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

永琳

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

永琳

「いいとも〜!!」

タモリ

「はい、お待ちしております!」

）

第二十五回・蓬萊山輝夜（後書き）

第二十五回、蓬萊山輝夜いかがでしたか？

昨日の夜は熾烈な争いが繰り広げられたでしょうね。絶好の機会を妹紅にとられた輝夜でした。

原本の竹取物語を読まれた方とかいらつしやいますか？

私の高校時代の教師は源氏物語とか、恋の話を主に教材として使っていたので嫌だったんですね。

源氏物語って何かドロドロした話ですし…

次回は永琳です！明日も見てくれるかな？

第二十六回・八意永琳

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日はお医者さんだそうですね」

『そうですね!』

タモリ

「出来る限り病院は行きたくないですよ」

『そうですね!』

タモリ

「消毒液とか嫌ですよ」

『そうですね!』

タモリ

「注射とか怖いでもんね」

『そうですね!』

タモリ

「注射が気持ちいいとか言う人の気がしれない…いや本当に、妬ましい」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日の蓬莱山輝夜さんの紹介で初登場、八意永琳さんです！どうぞ」

）

拍手と共に輝夜が登場！

永琳

「どうも、初めまして」

おしとやかに永琳が歩いてくる！

『永琳〜！〜！』

『キレ〜イ〜！』

永琳

「あら、どうもありがとう」

優雅な笑みをこぼす。流石月の頭脳は伊達じゃない

タモリ

「お、それは？」

永琳

「9月中秋の夕月の前後に、奈良県広陵町の竹取公園芝生広場で行われるかぐや姫祭りのポスターです」

タモリ

「あれ、昨日の輝夜さんのとは違いますね？」

永琳

「これは竹取物語で竹取翁と姫が住んでいた所がこの広陵町とされているため、ここで祭りが行われています」

タモリ

「なるほどねえ…貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻楽団、永遠亭、人里、綿月豊姫さん、綿月依姫さんからも！」

永琳

「え、あの子たちから？ありがたいわね〜」

タモリ

「というかどうやって永琳さんが出演すること知ったんでしょうね！？」

永琳

「おそらく依姫が娘媽神（ハハノカミ）を身に下ろしたのでしょうね」

タモリ

「それは一体？」

永琳

「娘媽神は「千里眼と順風耳」を従えた航海の神のことよ。たぶん

それで…」

タモリ

「すごいですねえ…」

タモリ

「最近はどうですか？」

永琳

「そうねえ…医術と薬学で順風満帆に過しているけど…」

タモリ

「幻想郷唯一の診療所ですからねえ」

永琳

「ただねえ…それが元で少し問題がねえ」

タモリ

「といたしますと？」

永琳

「幻想郷の患者さんをほぼ全て私一人で診療しているでしょう？」

タモリ

「まあ確かに」

永琳

「だから鈴仙に指導や教育をする時間があまりなくてね…」

タモリ

「ああ、なるほど…」

永琳

「本格的に薬の調合法とかを教えて、将来的には鈴仙が診療と処置を一手に担い、私は研究を主にして重大な事態などに鈴仙の補佐に回るのが理想ね」

タモリ

「え？でも永琳さんは不老不死だから今まで通りでも問題ないのでは？」

永琳

「いえいえ、腕のある薬師はいくらいてもいいでしょう？私だっとなにかあるかわからないし、一人より二人いたほうが何かの時に安心なのよ」

タモリ

「なるほどねえ…」

永琳

「今はまだ助手、薬師と看護師の中間みたいなどこだからね」

タモリ

「そうですねえ」

永琳

「他に考えていることは…外の世界の医療技術を出来る限り導入しよつってどこかしら？」

タモリ

「どつゆつことですか？」

永琳

「私の場合、診断は主に問診と自身の感覚で行う訳でしょう？実際
に患部を見たり触れたりして…」

タモリ

「確かにそうですね」

永琳

「でもそれだとわかりづらい時もあるの」

タモリ

「それで、レントゲンなどを取り入れようか？」

永琳

「そう。他にもCTやMRI、緊急時の為に人工心肺など…」

タモリ

「なるほど…」

永琳

「今、それを河童に作らせてるんだけどね…まだ少しかかりそうなのよ」

タモリ

「幅広いな河城にとり！？」

永琳

「他にも動かない図書館とかに頼んではいるけどね」

タモリ

「あのひと出来るの!?!」

永琳

「魔法で代用品みたいなものできないかなあと思ってたね」

タモリ

「にとりとパチュリーと永琳さんが組んだら最高の技術開発チームでしょうね」

永琳

「あとは八雲紫かな…でもあの人はそういうのに首突っ込まないでしょうし」

タモリ

「え、なぜ紫さん？」

永琳

「彼女、空間にスキマを開くじゃない？あれの応用でスキマを開いて患部のみ治療できないかなあと思ってたね」

タモリ

「メスではなくスキマで!?!」

永琳

「彼女はスキマで空間を超えた異次元を通り遠くまであつという間に行ける。なら異次元への道を開けることで、皮膚を傷つけず直接患部を治療したら…」

タモリ

「なるほどねえ！？皮膚には傷跡が残らないわけですか」

永琳

「とくに女性は傷痕残したくないでしょう？」

タモリ

「すごい発想だなあ…」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

永琳

「何いこうかしら？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

永琳

「それでは…：“いままで一回も歯医者に行ったことがない人”でお願いします」

タモリ

「そうきますか…では“いままで一回も歯医者に行ったことがない人”スイッチオン！」

）

永琳

「うん、2人か…！」

タモリ

「多いねえ!？」

永琳

「いいいいことですね。作者なんて歯並び悪いから歯周病が怖いのよ」

タモリ

「歯並び悪いと歯石がたまりやすいですからねえ」

）

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

永琳

「じゃあ…鈴仙・優曇華院・イナバを呼びます!〜!」

『おお〜!〜!』

タモリ

「狂気の瞳の兎ですか…」

ADさんがつながった電話を永琳に渡す

永琳

「もしもし？」

鈴仙

「もしもし師匠？」

永琳

「今何してた？」

鈴仙

「茶の間にて皆で見えていました。師匠：いずれ第一線を退くおつもりだったんですね……」

永琳

「そうはいつてないわよ。あなたが診療、私は研究がメインになるだけ。緊急の場合に私とあなたで対処する、それだけよ」

鈴仙

「ああ〜」

永琳

「つまりあなたが第一線に来るってこと。それじゃタモリさんに代わるから」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

鈴仙

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

鈴仙

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

鈴仙

「いいとも〜!」

タモリ

「はい、お待ちしております!」

）

第二十六回・八意永琳（後書き）

第二十六回：八意永琳編いかがでしたか？

えーりんに限らず永夜抄メンバーは書きづらい…最近永夜抄買ったばかりでしてね。

しかし東方キャラ多いですねえ…神霊廟の新キャラも入れると軽く100人超えますからねえ。

いまはまだ大学始まっていないからいいのですが、始まったら毎日更新はたぶん無理だと思います。二日、三日に一回の更新となりそうです…

ですが、全キャラ書き上げたいと思います！応援よろしくお願いいたします。

明日は鈴仙・優曇華院・イナバです。長い名前！！明日も見てくれるかな？

第二十七回・鈴仙・優曇華院・イナバ

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日はウサギさんですね」

『そうですね!』

タモリ

「学校の飼育小屋とかにいましたね」

『そうですね!』

タモリ

「可愛いんですね、いやほんと」

『そうですね!』

タモリ

「でもほとんど穴の中に隠れてるんですね、ろくに姿を見た覚えがない…」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日の八意永琳さんの紹介で初登場、鈴仙・優曇華院・イナバさんです！どうぞ〜」

〜

拍手と共に鈴仙が登場！

鈴仙

「ごども初めまして」

鈴仙が登場…だが？

『鈴仙〜！え！？』

タモリ

「あれ？それは…」

鈴仙

「いやあ…これしとかないとマズイかなあ…と」

何と鈴仙、狂気の瞳防止のためサングラスをかけていた！！

タモリ

「どうだろう？狂うのかな？ちょっと外してもらえます？」

鈴仙

「ではほんの少しだけ」

そっつい、サングラスを外してタモリさんと眼が合った瞬間！

クラっ…

鈴仙

「ちよつと！？大丈夫ですか？」

いきなりタモリさんが倒れた！！

タモリ

「…う、ええ大丈夫です。少しめまいがしただけで」

鈴仙

「さすがに魔力や妖力のない人に狂気の瞳はきつかったか…」

てなわけで、サングラスをかけたまま収録開始！！

タモリ

「お、それは？」

鈴仙

「え、八月初旬に鳥取県鳥取市内で行われる鳥取しゃんしゃん祭りのポスターです！」

タモリ

「しゃんしゃん祭り？」

鈴仙

「はい、しゃんしゃんと鳴る鈴の音と共に大勢の市民が因幡の傘踊りを披露するのです！」

タモリ

「そうですか、貼っついてちようだい！」

タモリ

「お花も届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻樂團、永遠亭、人里…あ、因幡てゐさんからも！」

鈴仙

「え？てゐが？」

驚きつつ、飾られている花に近づくと

鈴仙

「わ〜、きれいな水仙…私の名に合わせたつもりかしら？」
そういい、水仙に手をかけた瞬間！

プチン！

何か糸が切れた感触が鈴仙の手に伝わる！！

鈴仙

「へ？」

異変を感じたその時！

ガアアン！！

落ちてきた金ダライが鈴仙の頭を直撃！！

『あはははは…！！』

鈴仙

「…………痛ったあ〜い！！！」

タモリ

「ははは…大丈夫ですか？」
誰しも一度は見たであろう、伝説のコント仕掛けの再現に思わず笑う一同

鈴仙

「あの子どもだけ手間のかかるいたずら仕込んでるのよ!！」

タモリ

「時代とともに巧妙になってきているのでしょっねえ」

鈴仙

「まさか2011年のテレビ番組で金ダライが落ちてくるとは思わなかったわ」

タモリ

「いや、懐かしい物みせてもらいました。最近はどうですか？」

鈴仙

「まあ問題はないわね。一部を除いてだけ」

タモリ

「それってやっぱり…」

鈴仙

「てゐよ!！」

語尾に力をこめて即答する鈴仙

タモリ

「いたずらの的にされているんだ？」

鈴仙

「最近それが妙に凝ってきてるのよねえ…」

タモリ

「たとえば？」

鈴仙

「どこをどうやったのか知らないけど…家の階段登っていたら、いきなりてゐがヒモを引いたのよ。そしたら…」

タモリ

「そしたら？」

鈴仙

「いきなり階段が坂になったのよ!！」

タモリ

「ええ!？」

鈴仙

「びっくりして顔から倒れて…おもいつきり顔を階段にこすりつけたわ」

タモリ

「うわあ…痛そう」

鈴仙

「おろされる大根の気分を味わったわよ!」

タモリ

「手が込んでるなあ…」

鈴仙

「他にも、私の椅子を座っただけですぐに壊れるよう細工したりとか、私が使っている墨汁をイカ墨にすり替えるとか」

タモリ

「何それ!？」

鈴仙

「竹林を歩いていたらいきなり竹が私めがけて倒れてくるとか」

タモリ

「どんどん過激になっていますねえ」

鈴仙

「中でも最大のやつがこの前あったわね」

タモリ

「どんないたずらですか？」

鈴仙

「連日連夜のいたずらに疲れ果てた私は、お風呂からあがった後すぐに布団に倒れ込んだのよ。そしたら…」

タモリ

「そしたら?」

鈴仙

「布団の下の床板外されていたのよ!あの子私の布団の真下に落と

し穴作っていたの!!」

『ええ〜!!!』

鈴仙

「知らずに布団に倒れ込んだと同時に布団ごと落っこちて、床下の木に顔面直撃したわよ!!」

タモリ

「うわあ…」

鈴仙

「完全に外の世界の影響ね。まったくもう…」

タモリ

「芸人でもやらないような規模の大きいいたずらですね」

鈴仙

「いやほんと止めてほしいですね。身が持たない…」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

鈴仙

「どつしよつかしら?」

タモリ

「頑張ってください。伺いますか？」

鈴仙

「それでは…“落とし穴を作ったことがある人”をお願いします」

タモリ

「てゐさんへのメッセージですか？」

鈴仙

「そうよ！落とし穴作るのはあの子くらいのものと教えてあげるわ」

タモリ

「そうきますか…では“落とし穴を作ったことがある人”スイッチオン！」

）

鈴仙

「え、1人…！！いるんだあの子以外にも！？」
ADさんがストラップを渡す

タモリ

「お、あの人だ！」

タモリさんが一人の男性を指さす

鈴仙

「うっん、複雑な気分だなあ」

一目CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

鈴仙

「じゃあ…因幡てゐを呼びます!〜!」

『おお〜!〜!』

タモリ

「やはり来ますか…」

ADさんがつながった電話を鈴仙に渡す

鈴仙

「もしもし?」

てゐ

「もしもし?」

鈴仙

「今何してた?」

てゐ

「茶の間で鈴仙の面白い姿見てた」

鈴仙

「…帰ったら覚えときなさい。それじゃタモリさんに代わるから受話器がタモリさんに渡される」

タモリ

「もしもしタモリです」

てゐ

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

てゐ

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

てゐ

「いいとも〜!〜!」

タモリ

「はい、お待ちしています!」

）

第二十七回・鈴仙・優曇華院・イナバ（後書き）

第二十七回 鈴仙・優曇華院・イナバ編いかがですか？

東方トップクラスのイジられキャラの鈴仙なんで、すごくイジった
らどうなるかと思いましたが。

てみなら外の世界のドッキリやコントのネタを急速に吸収していた
ずらに使いそうですね。

次回はその因幡てみです！明日も見えてくれるかな？

第二十八回・因幡てゐ

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは〜!』

タモリ

「今日は因幡の白兔ですねえ」

『そうですね!』

タモリ

「たしか昔話にもありましたね。因幡の白兔」

『そうですね!』

タモリ

「ラストは兔が焚き火に飛び込むでしたっけ？」

『そうですね!』

タモリ

「あのでゐがそんなことするとは思えないんだけどねえ……」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日の鈴仙・優曇華院・イナバさんの紹介で初登場、因幡てゐちゃんです!どござ〜」

拍手と共にてゐが登場!

てゐ

「どつとも初めまして〜」

『きゃ〜!〜!』

『てゐ〜!〜!』

てゐ

「いやあ…外の世界は派手だねえ」

タモリ

「お、それは?」

てゐ

「はい、五月下旬ごろに鳥取県鳥取市智頭街道商店街で行われる因幡の手作り祭りのポスターです」

タモリ

「手作り祭り?」

てゐ

「子供に手作りの良さを広める祭りだね。実際に手作りで色々なものを作る体験が出来るんです」

タモリ

「そうですか。貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻樂團、永遠亭から！」

てゐ

「少ないな、花あげた人には幸せくれてやろうと思ったのに」

『ええ〜！』

タモリ

「…え、それって？」

てゐ

「もちろん嘘さ。そうそう幸せは渡さんよ」

タモリ

「さらっと嘘つきましたね!？」

てゐ

「そりゃあこの道何百年の兔よ？年季が違つよ」

タモリ

「あんまり嘘ついていると閻魔様に舌抜かれますよ？」

てゐ

「それは魔理沙！私じゃない」

タモリ

「ああ確かに」

てゐ

「私の場合は」

タモリ

「何ですか？」

てゐ

「皮を引ん剥かれる」

タモリ

「覚悟してるんだ!？」

てゐ

「まあ嘘だけどね」

タモリ

「懲りない人だなあ…」

てゐ

「でもまあ流石に皮むかれるのは勘弁したいね」

タモリ

「そうですねえ…最近はどうですか？」

てゐ

「いやまあ相変わらず…いたずらに磨きをかけております」

タモリ

「それ頑張っちゃダメでしょ!？」

てゐ

「これが私の生きがいなんでね」

タモリ

「昨日も鈴仙さんがその被害を報告していましたが」

てゐ

「あゝ、言ってたねえ。他にもすごいのあるよ?」

タモリ

「へえ、どんな?」

てゐ

「オーソドックスなもので言えば…鈴仙が川で洗濯中に後ろから突き落とすとか」

タモリ

「何してんの!?! コメディアン?」

てゐ

「薬と下剤をすり替えるとか」

タモリ

「ええ〜!」

てゐ

「でも最近は出来る限り凝ったものにしてるね。趣向を変えて」

タモリ

「たとえば？」

てゐ

「引き戸をどんでん返しに変えて驚かすとか」

タモリ

「手間のかかることしますねえ……」

てゐ

「そついやこの夏も派手にやったねえ……」

タモリ

「ほう、どんな？」

てゐ

「いや、暑いからみんなで川に泳ぎに行くことになって、水着に着替えて川に行っただですよ」

タモリ

「いいですね。あ…もしかしててゐちゃん、鈴仙さんの水着をどさくさに紛れて脱がすとか？」

てゐ

「いやいや、鈴仙をなめちゃあいけないさ。それを警戒して紐じゃないビキニで脱げにくいように少し小さめのサイズの水着着てたのよ」

タモリ

「え？それじゃあ…」

てゐ

「力で脱がすのは無理ってことさ。川に入った時も、私が近づくと
びに警戒してたし」

タモリ

「それじゃあ水着を脱がすイタズラは無理ですね」

てゐ

「チツチツチツ…悪戯歴数百年の私をなめちゃあいけないさ」

タモリ

「どうしたんです？」

てゐ

「泳ぎに行く前日に、針で水着に小さい穴をいくつも開けといたの
さ！…」

タモリ

「え？それじゃあ…」

てゐ

「しかも開けといたのはブラの肩ひもやホック周辺、ショーツの腰
骨の辺り…そう、そこが前と後ろの布をつなぐ重要な架け橋！」

タモリ

「それを着た鈴仙さんは…」

てゐ

「川で開放的になり、小さい水着ではしゃいで水着が伸縮。ついに水着がちぎれたのさ!！」

タモリ

「ええ!？」

てゐ

「しかも川から出た瞬間にね。見事に上下ともちぎれて落ちた!」

タモリ

「うわあ…それじゃあ鈴仙さんは」

てゐ

「見事に全裸だね!」

タモリ

「そのとき他に人は?」

てゐ

「いたねえ…男も。上下がつつり見られたよ。それも大勢に」
思い出し笑いをしてにやけるてゐ

タモリ

「うわあ…」

てゐ

「いや、いいリアクションだったなあ…気付いてから2、3秒で一気に顔真っ赤になって“いやああ”なんて言いつつその場に座り込んだね」

タモリ

「そうなるでしょ普通!!」

てゐ

「それで師匠からバスタオル借りてものすごい速さで永遠亭へ逃げかえっていったねえ」

タモリ

「なんかすごく可哀そうになってきた…」

てゐ

「ちなみにあれから3日ほど高熱が出たっけな?相当ショックだったのかね?“もうお嫁にいけない!”とか言ってたし」

タモリ

「ほどほどにしときましようね…」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

てゐ

「どうしようか?」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか?」

てゐ
「それでは……“泳ぎに行つて水着が脱げたことがある人” お願いします」

タモリ

「そうきますか……では“泳ぎに行つて水着が脱げたことがある人” スイッチオン！」

）

てゐ

「お、1人……!! いるんだねえ！」
ADさんがストラップを渡す

タモリ

「お、あの人だ！」

タモリさんが一人の女性を指さす

てゐ

「お！ありがとうございます！いい経験してるねえ！」

タモリ

「いや悪夢でしょ……」

）

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

てゐ

「じゃあ…月の兎、レイセンを呼びます!〜!」

『おお〜!〜!』

タモリ

「あの、月に紫さんが攻め込んだ時の？」

てゐ

「そうそう。兎としてのよしみでねえ」

ADさんがつながった電話をてゐに渡す

てゐ

「もしもし?」

レイセン

「もしもし?」

てゐ

「おー、久しぶり。今何してた?」

レイセン

「あいかかわらず訓練よ」

てゐ

「そりゃ大変だねえ…。それじゃタモリさんに代わるから
受話器がタモリさんに渡される」

タモリ

「もしもしタモリです」

レイセン

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

レイセン

「はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

レイセン

「いいともー!-!」

タモリ

「はい、お待ちしております!」

）

第二十八回・因幡てる（後書き）

第二十八回、因幡てる編いかがでしたか？

昨日に引き続きいたずら話第二弾です。鈴仙はほんとイジられてるなあ…

まあこれがると鈴仙の関係かなあ？と思い書きました。

次回は月の兎のレイセンです。明日も見えてくれるかな？

第二十九回・レイセン

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日でウサギは最後ですねえ」

『そうですね！』

タモリ

「東方でウサギは鈴仙、てゐ、レイセンの三人ですよね？」

『そうですね！』

タモリ

「あれ？でも鈴仙の耳は付け耳じゃなかったっけ？じゃああの人は何者！？人なの？兎なの？」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日の因幡てゐちゃんの紹介で初登場、レイセンちゃんです！どうぞ」

）

拍手と共にレイセンが登場！

レイセン

「あの、どうも初めまして…」
緊張した面持ちでレイセン登場！

『可愛い〜!!』

『レイセン〜!!』

レイセン

「すごいなあ…これが地上の外の世界」

タモリ

「お、それは？」

レイセン

「はい、2011年6月5日に静岡県浜松市で行われた、日本うさぎ祭りのポスターです」

タモリ

「あるんだそんなの？」

レイセン

「うさぎ好きの人たちによる祭りです。毎年行っているわけではありませんが、うさぎのコンテストなどを主に行っています」

タモリ

「そうですか〜、貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻楽団、月の都警護部隊、依姫様に豊姫様からも！」

レイセン

「うわ、ありがとうございます！」

タモリ

「すごいですねえ…最近はどうですか？」

レイセン

「日々稽古に励み、月の都の守護に全身全霊を尽くせるよう鍛えております」

タモリ

「……本当に？」

レイセン

「…はい」

だが少しばかり視線が泳いでいる…怪しい

タモリ

「そうですか…それで毎日銃剣術を？」

レイセン

「ええ、そうですね」

タモリ

「でも見た感じ旧式の銃だよね？」

レイセン

「いや、あれ以上の物を渡してくれないんですよ。威力のある武器はもっと上の方でないと扱えないんです」

タモリ

「まあ確かに、素粒子レベルで浄化する扇子なんて誰しも持っていたら危ないですよね」

レイセン

「そりゃそうですね…それこそ私たちの場合弾丸を撃つたりもしませんし」

タモリ

「え、そうなんですか？」

レイセン

「そうですね。月面戦争の名残で銃剣術なんですけど…正直意味あるのかな…なんて」

タモリ

「確かに飛び道具が主流ですからねえ…銃剣術の師匠は依姫さんですか？」

レイセン

「ええまあ…ですが暇がなくあまり私達と会うことはありませんがね」

タモリ

「へえ…」

レイセン

「でも前に地上の妖怪たちが攻め込んできたときに私たちじゃ歯が立たなかったんで少し厳しくなつたみたいですね」

タモリ

「そうなんですか？」

レイセン

「前より依姫様が見に来る日が増えたそうですし」

タモリ

「そうですか…」

レイセン

「そうなると思いの何倍もきついですかね」

タモリ

「そうでしょうねえ、どれぐらい来るのですか？」

レイセン

「週一回が週二回に増えたんです」

タモリ

「じゃあいいでしょ！依姫様いないときはサボっているんだから！」

レイセン

「いえそんなことは…」

とかいいつつ、やっぱり目が泳いでいるレイセン

タモリ

「でも月は凄いですねえ。ウサギが月と地上を行き来出来るんだか

ら

レイセン

「そうですね…でもまさか妖力を使えない人が月に来るとはなあ」

タモリ

「なら訓練を頑張らないといけませんね」

レイセン

「まあ月の都には来れないからいいんですけどね」

タモリ

「守る気ゼロじゃん!？」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

レイセン

「どうしようか?」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか?」

レイセン

「それでは…“うさぎを実際に飼ったことある人”をお願いします」

タモリ

「そうきますか…では“うさぎを実際に飼ったことある人”スイツチオン！」

）

レイセン

「ああ3人…!!」

タモリ

「結構いるんですねえ！」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!!』

レイセン

「では私たちの主人、綿月姉妹の豊姫様をお呼びします!!」

『おお〜!!』

ADさんがつながった電話をレイセンに渡す

レイセン

「もしもし？」

豊姫

「もしもし?」

レイセン

「どうもこんにちは。今何していらっしやいました?」

豊姫

「桃を食べつつあなたを見てたつてとこね」

レイセン

「そうでしたか…。それじゃタモリさんに代わりますから
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

豊姫

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか?」

豊姫

「ええ、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

豊姫

「いいとも〜!〜!」

タモリ

「はい、お待ちしています！」

）

第二十九回・レイセン（後書き）

第二十九回、レイセン編いかがでしたか？

儂月抄は全巻持っているんですがね…いや苦労しました。

明日の豊姫、明後日の依姫も難産しそう…

明日も見えてくれるかな？

第三十回：綿月豊姫

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日は月の人ですねえ」

『そうですね!』

タモリ

「毎日桃食べてるのかなあ？」

『そうですね!』

タモリ

「桃って長寿にいいのかなあ？天子さんの帽子にもあるし」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日のレイセンちゃんの紹介で初登場、綿月豊姫様です!どうぞ」

）

拍手と共に豊姫が登場!

豊姫

「どうも初めまして」

『きれ〜!〜!』

『豊姫様〜!〜!』

豊姫

「地上とは賑やかなものねえ」

スタジオの雰囲気やスポットライトが気になって仕方ない様子の豊姫

タモリ

「お、それは？」

豊姫

「月の都で、そちらの旧暦元旦に行われる月の都太陽祭のポスターです!」

タモリ

「月で太陽祭？」

豊姫

「太陽が不可欠なのは月も同じ。ですから年の最初に太陽に感謝を捧げるのです」

タモリ

「成程ねえ…貼っついてちょうだい!」

タモリ

「お花も届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻楽団、月の都警護部隊、依姫様、八意永琳さんからも！」

豊姫

「ありがたいわね〜！！！」

タモリ

「最近はどうですか？」

豊姫

「私は月の都の監視と先導だからヒマなのよね〜」

タモリ

「そうなんですか〜」

豊姫

「それで書を読んだり桃食べたりしてるんだけど…どうも暇ですね」

タモリ

「でしょうねえ。月の都は平和なんですか？」

豊姫

「そうねえ…霊夢のおかげで全て丸く収まったみたいですし」

タモリ

「よかったですねえ！」

豊姫

「でもおどろいたわ…まさか妖怪が月に来るとはね」

タモリ

「あゝ、そうですね」

豊姫

「でも久しぶりに永琳様の手紙を読めて良かったです」

タモリ

「永林さんとは師弟関係でしたっけ？」

豊姫

「ええ、依姫と共に教えを受けました」

タモリ

「どんな師匠ですか？」

豊姫

「教え方すごく上手い人でしたねえ…でも」

タモリ

「でも？」

豊姫

「あの人打ち込むと周りが見えない人なんですよねえ」

タモリ

「そうなんですか？」

豊姫

「今はそうでもないですけど若い時はそうだったなあ…」

タモリ

「どんな感じですか？」

豊姫

「教えてもらっていて、自分が教えた話になるといつまでも喋るんですよね」

タモリ

「あゝ、なるほど…：大学教授みたいな感じですか？」

豊姫

「特に理数系の話になると盛り上がるんですよ」

タモリ

「自分の好きな話なんでしょうね」

豊姫

「気づいたらいつの間にか日が暮れていたなんて事ザラにありますからね」

タモリ

「うわ、それ凄いなあ」

豊姫

「あの時正直きつかったなあ…：笑顔で喋るから“この辺で止めときましょう”とか言いづらいなんですよねえ」

タモリ

「なんか想像できますねえ」

豊姫

「輝夜さんが止めたんですがねえ…あの人集中力が凄まじいんですよ。考え始めるとそれ以外のこと考えられなくなりますし」

タモリ

「へえ〜」

豊姫

「人から聞いたんですけど、部屋にこもって研究していた永琳様を最近見ないなあと騒ぎがおきまして」

タモリ

「ほうほう」

豊姫

「見に行ったら永琳様が机に突っ伏して寝てたんです」

タモリ

「すごいな！まさに研究者！」

豊姫

「そして起きて言った一言が…」

タモリ

「何だっ たんです？」

豊姫

「え？もう朝だったの！？」

タモリ

「時間の感覚わからなくなるんだ!？」

豊姫

「あれは真似できないなあ…」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

豊姫

「どっしょうかしらね？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

豊姫

「それでは…“桃を週一以上のペースで食べる人”をお願いします」

タモリ

「そうきますか…では“桃を週一以上のペースで食べる人”スイッチオン！」

）

豊姫

「ああ0人…!!」

タモリ

「なかなかいませんねえ……」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!!』

豊姫

「では私の妹、依姫を呼びます!!」

『おお〜!!』

ADさんがつながった電話を豊姫に渡す

豊姫

「もしもし？」

依姫

「もしもし？」

豊姫

「どうもこんにちは。今何してた？」

依姫

「姉さんを見てたよ」

豊姫

「そう…。それじゃタモリさんに代わりますから」
受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

依姫

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

依姫

「ええ、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

依姫

「いいとも〜!!」

タモリ

「はい、お待ちしております!」

）

第三十回：綿月豊姫（後書き）

第三十回 綿月豊姫編いかがでしたか？

いやあ：完全にスランプですね。なかなか筆が進まない…

綿月姉妹は名は知れてるけど謎が多いですからね。

大幅に時間遅れてすいません。次回は依姫です。明日も見てくださいかな？

第三十一回・綿月依姫

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日の方は神を味方にする人ですねえ」

『そうですね!!』

タモリ

「神様が味方…いいですねえ」

『そうですね!!』

タモリ

「作者なら稔子様味方につけたいんですよねえ…実家が農家なんです。どうでもいいか！」

タモリ

「では登場していただきましょう、昨日の綿月豊姫様の紹介で初登場、綿月依姫様です!どうぞ」

）

拍手と共に依姫が登場！

依姫

「どうも初めまして」

『依姫様〜!!』

『かわいい〜!!』

依姫

「どうもありがとうございます」
少し照れ気味に笑う依姫

タモリ

「お、それは？」

依姫

「月の都で、七月二十日に行われる月の都月面祭のポスターです！」

タモリ

「どんな祭りです？」

依姫

「アポロ11号が月面着陸した時、月の都ではパニックになったんですが、結局都には入れなかつたのでそれを祝う祭りです」

タモリ

「成程ねえ…貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻楽団、月の都警護部隊、豊姫様、八意永琳さんからも！」

依姫

「ありがたいわね〜!!」

タモリ

「最近はどうですか？」

依姫

「月に妖怪が入り込んだ時を機に平穩そのものなんですよね」

タモリ

「そうですねえ」

依姫

「その時は驚いたなあ…特にあの巫女はすごかった！」

タモリ

「あ〜、そうでしたねえ」

依姫

「撃ってくる弾幕全て斬ることになりましたしね」

タモリ

「すごい業物ですねえ、その刀…」

依姫

「誰が作ったかわからないんですけどねえ」

タモリ

「もしかして鉄も斬れたりして」

依姫

「それは無いでしょう!」

タモリ

「それにしても…神をその身に下ろすってどんな感じなんですか?」

依姫

「そうねえ…神が私に乗り移るって感じね」

タモリ

「なんかイタコみたいですねえ、恐山の」

依姫

「いや口寄せと違いますよ!」

タモリ

「じゃあ指を噛んで血を出し、煙と共に神様が現れ…」

依姫

「その口寄せも違います!私の身に神を下ろしますが、私の心や性格に影響しませんよ…」

タモリ

「そうなんですか?」

依姫

「まあ余りにも極端な性格だと多少影響しますけどね」

タモリ

「へえ…」

依姫

「あと複数の神を下ろすと心が少し不安定になるんですがね」

タモリ

「ああ、確かに多重人格者みたいになるんですね」

依姫

「霊夢がやったように住吉三神を下ろすのならまだしも、全く関わりのない神同士や仲の悪い神同士だとかかなり不安定に…」

タモリ

「どうなるんです?」

依姫

「性格がころころ変わったりとか、落ち着きがなくなったりとか」

タモリ

「いきなり同居すればいざこざが起きるでしょうね」

依姫

「若い時は大変でしたよ。神を下ろしたはいいけど力をロクに貸してくれないとか」

タモリ

「ああ」

依姫

「好き勝手に私の体操ろうとするとか。それで我を忘れた私を永琳様が戻してくれたのよ。下ろした神を払って」

タモリ

「神を払ったんだ!？」

依姫

「三日三晩の激闘でしたよ」

タモリ

「もはやエクソシストの世界ですねえ…」

）

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

依姫

「どうしようかしらね?」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか?」

依姫

「それでは…“イタコさんの口寄せを実際に見たことある人”でお願いします」

タモリ

「そうきますか…では“イタコさんの口寄せを実際に見たことある人” スイッチオン！」

）

依姫

「うーん、0人か…!!」

タモリ

「なかなかいませんねえ…有名ではありますが」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!!』

依姫

「そうねえ…では攻め込んできた地上の民で私が面白いと思った十六夜咲夜を呼びます!!」

『おお〜!!』

ADさんがつながった電話を依姫に渡す

依姫

「もしもし?」

咲夜

「もしもし？お久しぶりですね」

依姫

「どうもこんにちは。今何してました？」

咲夜

「館の掃除がほぼ終わったってところかしらね」

依姫

「そう…。それじゃタモリさんに代わりますから
受話器がタモリさんに渡される」

タモリ

「もしもしタモリです」

咲夜

「どうも初めまして」

タモリ

「どうもこんにちは。明日は大丈夫ですか？」

咲夜

「ええ、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

咲夜

「いいとも〜!」

タモリ

「はい、お待ちしています!」

）

第三十一回・綿月依姫（後書き）

第三十一回、綿月依姫編いかがでしたか？

儂月抄キヤラは上手く書けなかつたなあ…いや残念。

次から取り返したいと思います。次回は完全に瀟洒なメイド！

さてどういう風に書こうか？瀟洒に書くか？面白おかしく書くのか？
お楽しみに！明日も見えてくれるかな？

第三十二回・十六夜咲夜

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日はメイドさんですねえ」

『そうですね!』

タモリ

「なんか欲しくなりますねえ」

『そうですね!』

タモリ

「月を眺めつつ“咲夜、いる?”なんて言って紅茶のおかわりを…
ダメだ、作者にはとても似合わない…」

タモリ

「それでは登場していただきますしよう、昨日の綿月依姫様からの紹介で初登場、十六夜咲夜さんです!どうぞ」

）

拍手と共に咲夜が登場！

『可愛い〜!!』

『さくやさん!!』

咲夜

「ありがとうございます。どうも初めまして、紅魔館のメイド長をさせていただいております。十六夜咲夜と申します」
スカートを手で少し広げつつ礼をする咲夜。

タモリ

「おお…またずいぶん瀟洒に來ましたねえ」

咲夜

「ふふ、どうも」

タモリ

「お、それは？」

咲夜

「はい、10月31日に紅魔館で行われるハロウィンパーティのポスターです」

タモリ

「吸血鬼の館でハロウィンを!？」

咲夜

「まあお菓子と仮装がメインなんですけどね。いつもと違う服装を楽しもうというお嬢様の企画なんです」

タモリ

「本物の妖怪ですから、さぞ盛り上がるでしょうねえ…」

咲夜

「ちなみにお嬢様は趣向を変えて漆黒のドレスをお召しになりますわ」

タモリ

「おお、正統派吸血鬼らしく？」

咲夜

「そうですね。黒の布地に紅のリボンをあしらったものです。妹様はデザインを一新した長袖の紅のドレスに、黒のボタンで対照的な雰囲気を表しました」

タモリ

「凄そうですねえ…貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻樂團、紅魔館、妖精メイド一同からも…」

咲夜

「ありがたいですわ」

タモリ

「すごいですねえ…最近はどうですか？」

咲夜

「私は相変わらずメイドの仕事をこなす毎日ですね」

タモリ

「家事に掃除、あとは紅茶を淹れたり…。変わった紅茶を淹れているそうですね？青い紅茶とか」

咲夜

「お嬢様を楽しませるのもメイドの仕事ですわ」

タモリ

「へえ…」

咲夜

「他にも色が変わる紅茶とか作りましたね」

タモリ

「そりゃまた凄そうな。どうやって作るのですか？」

咲夜

「赤と黄色の紅茶の比重を変えて出すのです。赤の紅茶の比重を軽くしておけば最初は赤色ですが、スプーンで混ぜることで橙色に変わるのです」

タモリ

「なるほどねえ…」

咲夜

「仕事でしたら、他にも侵入者の排除もありますわね」

タモリ

「魔理沙ですか？」

咲夜

「もはやあの盗み癖は治らないでしょうねえ…毎回時を止めてナイフ投げる身になって欲しいわ」

タモリ

「ナイフ投げての時間停止ですか…初めて見た人は相当驚くでしょうね」

咲夜

「そうですね？」

タモリ

「作者なんて初プレイで見た時驚きのあまり絶叫しましたからね。リアルに二十歳過ぎた男が“うっわぁ”なんて言って」

咲夜

「あら、それはどうも」

タモリ

「あの普通に飛んできたナイフが、時間停止して一気に広がっていくのは怖いですよ」

咲夜

「でもネタばれしてからは皆驚かなくなっただわねえ…」

タモリ

「まあいいじゃないですか、時止められるのはあなた一人ですし。それでヴェンテージワインも作れるじゃないですか」

咲夜

「ええまあ、この能力でメイド長を務めているのですが…そろそろ優秀な妖精メイドが欲しいわね」

タモリ

「え？妖精メイドならいくらでも…」

咲夜

「いや妖精だと仕事の能力にも限界あるのよ。一通りの仕事は出来ても一級品というわけじゃないの。仕方ないけどね」

タモリ

「あゝ、なるほど。仕事覚えるにも限度があると」

咲夜

「三月精やチルノがいい例でしょう？」

タモリ

「わかりやすい解説ですねえ」

咲夜

「それでどうしたものかと…将来的には私に変わる妖精メイドが居たらなあと思ひまして」

タモリ

「難しい話ですねえ！？あなたに代わるメイドか…」

咲夜

「ですから、霧の湖にいる大妖精を部下にしたいなあ…と」

タモリ

「ええ!?!」

咲夜

「彼女ならあるいは…と思ひましてね。指導の仕方によればなんとか…」

タモリ

「いやいや、ならいつそ美鈴さんをメイド長に…」

咲夜

「それは無理」

タモリ

「きっぱり断言しましたねえ!」

咲夜

「難しいものねえ…いつそ紫に式神の作り方でも習おうかしら?」

タモリ

「あなたならリアルにやってのけそうで怖いですねえ…」

咲夜

「他に最近の話題と言えば…霊夢たちが神霊が出たのを鎮めたそうですね?」

タモリ

「ええそうですね」

咲夜

「私もそれ出たかったわ」

タモリ

「ああなるほど…」

咲夜

「とはいえ、私も少し改良が必要かと最近思っていますけどね」

タモリ

「改良？スペカのですか？」

咲夜

「スペカというよりショットね。ほら、霊夢は札とホーミング弾。魔理沙はレーザー、早苗は広範囲のショットで妖夢は斬撃でしょう？」

タモリ

「あなたにはナイフがあるでしょう！？十六夜咲夜の代名詞といえるほどのナイフが！」

咲夜

「いやそれだけだと押しが弱いかなあと思いました」

タモリ

「ここにきてのタイプ転向ですか！？」

咲夜

「いいと思いません？」

タモリ

「それで一体どんな？」

咲夜

「そうねえ……。紅魔異変での私のスペカらしく一定距離までは直線状に、そこから広がるように飛んでいくナイフとか」

タモリ

「何か使いづらそうですねえ」

咲夜

「でしたら、ナイフと共に私特製のストップウォッチを投げて、ストップウォッチに当たった弾や敵は動けなくするとか」

タモリ

「おお、咲夜さんらしい。でもそれだとチートじゃないですか？」

咲夜

「難しいものねえ、ならスペカをアレンジしようかしら」

タモリ

「ほう、例えば？」

咲夜

「スペカ発動と同時に時が止まり、敵周辺をナイフが囲むとか」

タモリ

「何かカッコいいですねえ!!」

咲夜

「そして時は動き出す…と同時に敵はPと点に変わる」

タモリ

「うわあ…でも弾が残るのは嫌ですねえ」

咲夜

「なら時を消し飛ばしましょう。スペカ発動と共に弾は当らず私の背後に飛んでいき、スペカが消えたと同時に私の投げたナイフが敵を貫く！」

タモリ

「……あなたなら本気でやりそうで怖いなあ。もはや最強の部類じゃないですか」

咲夜

「いえ、お嬢様ほどではないです…」
といいつつも、少し嬉しそうな咲夜さんでした

）

一旦CM

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

咲夜

「さて…何にしようかしら？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

咲夜

「それでは……“6月10日、時の記念日が誕生日の人”にします」

タモリ

「では“6月10日、時の記念日が誕生日の人”スイッチオン！」

）

咲夜

「あ…1人！」

驚きつつADさんからストラップを受け取る

タモリ

「あ、あの人だ！」

満面の笑みで手を上げる一人の女性を指さす。

咲夜

「偶然あるものですねえ。ありがとうございます」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！！』

咲夜

「では、お嬢様の妹君であるフレンドール・スカーレット様をお呼

びいたします」

タモリ

「え！？大丈夫ですか？」

咲夜

「ええ、きちんと一般常識はありますし。今日私が出演すると聞いて、次は私に指名する様頼まれました…」

タモリ

「なるほど…お姉さんや美鈴さんが出たから早く登場したかったんでしょうな」

ADさんがつながった電話を咲夜に渡す

咲夜

「もしもし、咲夜です」

フラン

「もしもし？私よ」

咲夜

「どうもこんにちは。何されていました？」

フラン

「咲夜を紅魔館のテレビで見てたわ。今から昼に起きることに慣らしとかなないと明日がきついからね」

咲夜

「そうですね。ではタモリさんに代わりますね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

フラン

「もしもし、フランドールです。初めまして！」

タモリ

「どうも初めまして～。明日は大丈夫ですか？」

フラン

「大丈夫よ！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

フラン

「いいとも～！」

タモリ

「はい、お待ちしてま～す」

）

第三十二回・十六夜咲夜（後書き）

第三十二回、十六夜咲夜編いかがでしたか？

大体は瀟洒っぽく、ところどころボケを入れて咲夜さんの雰囲気を出そうとしてみました。

瀟洒な従者って難しいですね…小説だと特に雰囲気はどう出しているのか全く。

登場シーンでスカート広げつつ会釈なんて、原作ではやってなかったでしょうが…まあ咲夜さんならいいのかな？

それから色が変わる紅茶の話ですが、そんなものがあるのか私は全く知りません。全て想像なので悪しからず。

今回はフランドールです。明日も見えてくれるかな？

第三十三回・フランドール・スカーレット

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはは〜!〜!』

タモリ

「今回は吸血鬼ですねえ」

『そうですね!〜!』

タモリ

「なんでも壊せる吸血鬼ですねえ」

『そうですね!〜!』

タモリ

「破壊の目をつかんで、きゅっとしてどかーん」

『そうですね!〜!』

タモリ

「これで台風壊してくれないかなあ?でも台風はもともと目があるし…どっつなるんだろっ?」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日の十六夜咲夜さんからの紹介で初登場、フランドール・スカーレットちゃんです！どうぞ

」

拍手と共にフランが登場！

『可愛い〜!!』

『フラン!!』

フラン

「ふふ、どうもありがとう」

七色の翼を輝かせつつフランが登場!!

フラン

「外の世界ってすごいね！にぎやかで、人間がこんなにもいっぱい
…」

タモリ

「まあ貴方は咲夜さん、霊夢さん、魔理沙さんの三人ほどしか見て
ませんからねえ」

フラン

「じゃあ一つ派手にやりましょうか！“禁弾”スターボウ…」
瞬間、手のひらのスペカが輝き出す!!

『きゃあああ!!』

タモリ

「ストップ！！ここでスペカ使っちゃダメ！！」
即座に制止するタモリさん！

フラン

「え？ダメ？盛り上がるかな〜と思って」

タモリ

「絶対ダメ！！スターボウブレイクなんて危なすぎるでしょ！」

フラン

「ちゃんと手加減して安全地帯のあるスペカ選んだんだけど」

タモリ

「安全地帯どうこうの前に、普通の人間に撃たんで下さい！！」

フラン

「でも魔理沙は……」

タモリ

「あれ普通の魔法使いね！！幻想郷の人間⇨普通の人間と解釈しないでください！！人間は弾幕張れないし空飛べませんから！！」

フラン

「わかったわ……」

少し残念そうにスペカを解除しフラン着席

タモリ

「あ〜びっくりした……。お、それは？」

フラン

「ああこれ？昨日咲夜が言ってた紅魔館ハロウィンパーティーの、紅魔館メンバーの写真入りポスターが出来たんで持って来たわ」

タモリ

「おお〜！！…なんか黒い服が多いですねえ？」

フラン

「パチュリーは黒の魔女服、美鈴はキョんシーのコスプレだからね」

タモリ

「なんか見覚えのあるような格好ですねえ！？咲夜さんは…これは何です？黒のマントに顔の傷？」

フラン

「ああそれ？フランケンシュタインよ。お姉さまのリクエストでそうなったの」

タモリ

「バラエティ豊かですねえ…貼つといてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻楽団、紅魔館、妖精メイド一同からも…」

フラン

「なんで霊夢と魔理沙はないのかしら？」
すこし拗ねた感じのフラン

タモリ

「おそらくお金がなかったんでしょうな」

フラン

「……まあいいか」

タモリ

(よかつた、機嫌損ねてはいないようだ)
先ほどの未遂事件で少しフランを警戒しているタモリさん。無理もない……

タモリ

「最近はどうですか？」

フラン

「そうねえ……あの紅魔異変で霊夢や魔理沙と会ってから、少しずつ外に出るようにはしているけどね」

タモリ

「へえ」

フラン

「でもなかなか出してくれないのよねえ、少し渋っている感じ」

タモリ

「徐々に範囲を広げるつもりなんでしょうな」

フラン

「私としては行きたい場所があるんだけどね」

タモリ

「ほづ、どこですか？」

フラン

「人から聞いたんだけど、迷いの竹林と永遠亭という場所には死なない人達がいるそうね？」

タモリ

「ええまあ…。ってまさか、あの人達と遊ぶ気で!？」

フラン

「無論、弾幕ごっこでね」

タモリ

「凄まじい戦いになるでしょうな」

フラン

「いいじゃない。お姉さまから手加減が出来ないと言われる私でも、相手が死なないのなら…」

タモリ

「いやいや、あなたの場合周りに与える損害も凄まじいですからね!？」

フラン

「じゃあレーヴァティン無しで」

タモリ

「ハンデ付けてもダメだつて!」

フラン

「難しい話ねえ」

タモリ

「でもまあ、外に出たがってるんですね」

フラン

「いやまあ、前までは地下にずっといても文句は無かったんだけど、異変以来外にも興味を持ってね。別に自機とかになりたいわけじゃあないけど」

タモリ

「なるほど…」

フラン

「でもたまにはお姉様みたく出演してみたいかなってね。いいじゃない、実力はあるよ？」

タモリ

「それはもう折り紙付きの実力者でしょうね」

フラン

「知的なセリフ言えるよ？」

タモリ

「確かにフランぐらいでしょうね。英語のセリフを言ったのは」

フラン

「でしょっ？っ？どう考えてもチルノやお姉様よりはマシよ」

タモリ

「はははは…」

フラン

「だってお姉様、能ある鷹は尻隠さずなんて言ったのよ？あれに比べれば雲泥の差よ」

タモリ

「まあまあ、落ち着いて…。でもまあ確かに原作ではあまりいい待遇ではないかもしれませんがね」

フラン

「言ってるわねえ…。この待遇改善をしたいのよ。吸血鬼なのにシンデレラみたいね」

タモリ

「まあいいじゃないですか。あなた自身にもテーマ曲にも人気ありますし、二次創作も多いし」

フラン

「そこにも不満あるのよね。二次創作だとなぜか私エロネタ多いのが腑に落ちない」

タモリ

「ありますねえ、腐るほど」

フラン

「私が襲われてエロシーン突入ってありえます！？全てを破壊するこの私が!？」

タモリ

「あはは…」

フラン

「いっそ全ての同人誌を“きゅっとしてどかーん”しちゃおうかしら？」

タモリ

「それは勘弁してやってください！！色々とまずいから！！」

フラン

「最後に不満あるとしたら…：外の世界の野球かなあ？」

タモリ

「野球！？それはまたどうして？」

フラン

「前に文々。新聞で読んだけど、千葉ロッテの神戸って選手の応援歌が私のU・Nオーエン使っているそうね」

タモリ

「あ、そうでしたねえ」

フラン

「ただ打てないのよねえ…」

タモリ

「あゝ、成程…。打率が約二割でしたっけ？」

フラン

「だからたまに代打で出るくらいなのよ。神戸がスタメンになって

毎回応援歌を聞きたいものね…」

タモリ

「そうになると東方ファンも嬉しいんですけどねえ」

フラン

「いつそ私が試合に出ようかしら？代打なら何とかかなると思つよ？」

タモリ

「……あなたが打つたら場外まで飛んでいくでしょうけど、それは流石にまずいつて！！」

）

一日CM

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

フラン

「さて…何にしようかしら？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

フラン

「それでは…“実際に神戸選手の応援を見たことある人”にします」

タモリ

「では“実際に神戸選手の応援を見たことある人”スイッチオン！」

）

フラン

「あ…2人！」

タモリ

「うーん、惜しいですねえ」

フラン

「まあ本来はこのネタを100分の1アンケートにしたくはないけどね」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!!』

フラン

「では、動かない大図書館、パチュリー・ノーレッジを呼びます」

タモリ

「お、やはりそうきますか」

ADさんがつながった電話をフランに渡す

フラン

「もしもし、私です」

パチュリー

「もしもし？妹様？」

フラン

「どうもこんにちは。何してた？」

パチュリー

「魔法でああなたの様子を見ていたわ。まったくもう、ヒヤヒヤさせるんだから」

フラン

「まあまあ、未遂だしいいじゃない。じゃあタモリさんに代わるから」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

パチュリー

「もしもし、パチュリーです」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

パチュリー

「ええ大丈夫よ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

パチユリー

「いいともっ！」

タモリ

「はい、お待ちしております」

）

第三十三回・フランドール・スカーレット（後書き）

第三十三回、フランドール・スカーレット編いかがでしたか？

子供っぽい性格と知的なセリフから11〜13歳くらいをイメージして書いてみました。なんか私のフランへの思いを書いた感じですね…

ちなみに私は九州の佐賀生まれ、応援するのはもちろんホークスなんです。

でも東方ファンとして神戸選手には活躍してほしいですね。あんないい応援なんだから毎試合聞きたいものです。

さて…ここで一つ申し訳ない事が。実は明日から後期の授業が開始となり毎日更新はまず無理になりました。

ですが毎回正午更新になりますので、よければ正午に確認してみてください。

次はパチュリーです。次回も見てくださいかな？

第三十四回・パチュリー・ノーレッジ

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは〜』

タモリ

「今日は魔女ですねえ」

『そうですね!〜!』

タモリ

「図書館で研究してる魔女ですね」

『そうですね!〜!』

タモリ

「よく眼鏡かけずに過ごせるもんですねえ、作者なんて東方を1時間程度やっただけで目がおかしくなるのに」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、昨日のフランドール・スカレットちゃんからの紹介で初登場、パチュリー・ノーレッジさんです!〜どござ〜」

拍手と共にパチュリーが登場！

『可愛い〜!!』

『パチュリー!!』

パチュリー

「どうも。すごく明るい所ねえ…」
外の世界の照明がすこしまぶしい模様。ロウソクの火で本読んでるんだから仕方ないか？

タモリ

「お、それは？」

パチュリー

「毎年4月30日にドイツのハルツ地方の町々で行われる魔女祭り？ヴァルプルギスの夜？のポスターよ」

タモリ

「魔女祭り!？」

パチュリー

「キリスト教の弾圧を受けたゲルマン信仰が、この地方に伝わる魔女伝説と結びついて祭りとしたのよ」

タモリ

「伝説？」

パチュリー

「4月30日の夜にドイツ中の魔女や悪魔がハルツ山地の最高峰ブロッケン山に集まってどんちゃん騒ぎをするというものよ」

タモリ

「行かれたんですか？」

パチュリ

「いえ、流石にそれはないわよ。私が行ったらほんとに弾圧されかねない」

タモリ

「そうですか…貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻楽団、紅魔館、妖精メイド一同、霧雨魔法店からも…」

パチュリ

「珍しいわね！？魔理沙から？」

タモリ

「来ましたねえ…」

パチュリ

「異変かしら？」

タモリ

「ひどい言われ様ですねえ!？」

パチュリ

「普段の行動からして当然よ」

タモリ

「そうですか…。最近はどうですか？」

パチユリ

「あいかわらず図書館で研究して弾幕ね」

タモリ

「仕事に弾幕あるんですか？」

パチユリ

「毎回本を盗む盗賊がいるんでね。全く、何冊もっていったか…」

タモリ

「さっくり貰っていかれたんですね」

パチユリ

「それ以外にも、奴はとんでもない物を盗んでいきました」

タモリ

「何ですか？」

パチユリ

「私のスペカです!!」

タモリ

「いやそうですけど！もう水に流しましょうよ！ノンディレクシヨナルレーザー盗作の話なんてもういいじゃないですか！」

パチュリィ

「言っとくけど私は百合には走らないわよ？心は盗まれていないからね」

タモリ

「誰に向かって言ってるんです？」

パチュリィ

「そりゃもちろん読者よ。名ゼリフ通りにはいかないわ」

タモリ

「なんでカリオスト口知ってるんですか！？そして何故改造した！？」

パチュリィ

「オリジナルを尊重し、そこにオリジナルを付加するのが魔女よ」

タモリ

「すごいですねえ、いきなりのネタですか…。なんかかなり健康体ですねえ」

パチュリィ

「まあ喘息は大体治ったけどね」

タモリ

「そうなんですか？」

パチュリィ

「毎回弾幕勝負で呪文唱えていたら徐々に回復してきたわ。紅魔異変に比べればだいぶ健康になったわね」

タモリ

「確かに、緋想天では積極的に自分で調査に行っていましたからねえ」

パチュリー

「あの紅魔異変から色々と弾幕勝負あったからね。健康に気を付けてビタミンAも摂るようにしたし」

タモリ

「良かったじゃないですか、健康体になって」

パチュリー

「だけど外の世界では苦勞したわ…」

タモリ

「外の世界？ここで？」

パチュリー

「ここに来るまでが大変だったわ…。ほら私、幻想郷では移動するとき飛んでいるでしょ？」

タモリ

「ああ、確かに」

パチュリー

「だから歩かないのよ…」

タモリ

「でしようね」

パチュリー

「でも外の世界は飛んで移動するとマズイでしょ？だから久しぶりに歩いて移動したんだけど、体力不足を感じたわ」

タモリ

「それこそパチュリーさんの場合一日のほとんどを座って過ごしますからね」

パチュリー

「ここに来るまで大変だったわ……。渋谷のスクランブル交差点がすごく遠く感じたわよ」

タモリ

「あの距離でバテないで下さい！」

パチュリー

「だから時々人にばれないよう足を数センチ程度浮かせてたのよね」

タモリ

「よかったですねえ、人にばれなくて」

パチュリー

「でも流石に限界近くて、ふらふらしながら歩いてたら警官に声かけられたわ」

タモリ

「ごんだけ心配されてるんですか！！」

パチュリー

「それで肩貸してもらいながら交差点を歩ききったのよね」

タモリ

「もつすこし頑張りましょうよ……」

パチュリー

「紫モヤシの名はまだ払拭できそうにないわね……」

タモリ

「美鈴さんに拳法を習ったらどうですか？」

パチュリー

「……まずはジョギングから始めさせて」

）

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

パチュリー

「さて…何にしようかしら？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

パチュリー

「それでは…“昔、喘息を患っていた人”にします」

タモリ

「では“昔、喘息を患っていた人”スイッチオン！」

）

パチュリー

「あ…3人！」

タモリ

「うん、惜しいですねえ」

パチュリー

「やはりいるんですね…」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!!』

パチュリー

「では、霧雨魔理沙を呼びます」

タモリ

「お、やはりそうきますか」

ADさんがつながった電話をパチュリーに渡す

パチュリー

「もしもし、私よ」

魔理沙

「もしも…し？パチュ、リー？ザザー」

パチュリー

「電波が悪いわねえ…どこにいるの？」

魔理沙

「ああ、今紅魔館の図書館」

パチュリー

「主が居ないのに何してんの！？だいたいあなたいつ家の電話を携帯にしたの！？」

魔理沙

「KDDIに頼んだ」

パチュリー

「KDDI？」

魔理沙

「“キユウリ大好きどこでもいける”の略な」

パチュリー

「それ河城にとりでしょ…！」

魔理沙

「お、御名答。それでお前のいないこの絶好の機会は見逃せないと思っただねえ。さっくり頂いたぜ！」

パチユリー

「あとで覚えときなさい…じゃあタモリさんに代わるから
受話器がタモリさんに渡される」

タモリ

「もしもしタモリです」

魔理沙

「もしもし、魔理沙です」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

魔理沙

「ああ、大丈夫だぜ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

魔理沙

「いいとも！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

）

第三十四回・パチュリー・ノーレッジ（後書き）

第三十四回、パチュリー・ノーレッジ編いかがでしたか？

パチエは、喘息は治ってそうだけど体力は無いだろうという想像からこうなりました。

緋想天でもたしか浮いてたし…実際全然歩いていないんじゃないか？という推理です。

次回は魔理沙です。明日も見てくれるかな？

第三十五回・霧雨魔理沙

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは〜』

タモリ

「久しぶりですねえ」

『そうですね!~!』

タモリ

「なんか書き方忘れかけましたよ」

『そうですね!~!』

タモリ

「間違いあつたらすいません。私が“だぜ口調”になつてるかも?」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回のパチュリー・ノーレツジさんからの紹介で初登場、霧雨魔理沙さんです!~どうぞ〜」

）

拍手と共に霧雨魔理沙が登場!

『かわいい〜!!』

『魔理沙〜!!』

魔理沙

「おお〜!すごいねえ」

魔女帽をかぶった魔理沙が登場!!

タモリ

「どうも〜。お、それは？」

魔理沙

「毎年1月16日前後にスイスのヴァレー地方で行われるベラルプ・ヘクセのポスターだぜ！」

タモリ

「何です?そのお祭り」

魔理沙

「幽霊や精霊の逸話が多く語られてきたこの地方で、それにならない魔女の格好をした約千人ものスキーマーが一斉に山を下るといってもさ」

タモリ

「そりゃまたユニークな…」

魔理沙

「でもやるのはきついと思っぜ。魔女の格好で12キロもスキーだからな」

タモリ

「うわあ…。魔理沙さんはスキーやるの？」

魔理沙

「それが、やれないんだよなあ…。板は作れると思うが場所がない。妖怪の山も迷いの森も木々が生い茂っていて滑る所が全くない」

タモリ

「そうですか…貼つといてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻樂團、博麗神社、アリス・マーガトロイドさん、河城にとりさん、守矢神社、白玉楼からも…」

魔理沙

「おお、凄いねえ…。まあお返しは出来んがな」

タモリ

「ちよっとちよっと…」

魔理沙

「まあ、何かしら考えとくぜ」

タモリ

「何かしらときましよう…。それに、パチュリーさんからはありませんね？」

魔理沙

「たぶん前回のこと根に持っているんだろうな」

タモリ

「何かやっときましよう…。最近はどうですか？」

魔理沙

「そつだなあ…。まあ相変わらず異変解決してる訳なんだが」

タモリ

「そうですねえ。妖精大戦争ではEXボスも務めましたし」

魔理沙

「まあ、あんなの小手調べだな。チルノ相手に本気は出さんよ」

タモリ

「でしようねえ」

魔理沙

「だから最近はまだ本業の魔術研究に時間を割いている訳なんだが」

タモリ

「ほうほう」

魔理沙

「聞いた話じゃあ光速を超える物がこの世で発見されたらしいな？」

タモリ

「ああ、ニユートリノですよね？」

魔理沙

「そうそう、そんなやつ!!」

タモリ

「同時に飛ばして光より1億分の6秒速かったらいいですねえ」

魔理沙

「まさか光速を超えるとはなあ…！速度の限界は光速と信じて疑わず、レーザー系を習得してきたのだが」

タモリ

「まあ、まだ仮説の段階ですがね」

魔理沙

「私もそれに倣ってスペカ作ろうと考えてるんだ」

タモリ

「ニュートリノのスペカですか!？」

魔理沙

「いいと思わないか？」

タモリ

「ニュートリノってかなり微量で扱えないと思いますよ？たしかニュートリノって原子が壊変することで起こる質量ゼロに近い素粒子ですよね」

魔理沙

「そこに目を付けたスペカなんてどうだろう？」

タモリ

「といたしますと?」

魔理沙

「極小の粒が超高速で全体に散るスペカとかいいんじゃないか?」

タモリ

「うわ、見ただけで目が痛くなりそう…」

魔理沙

「名づけるなら“星符” ニュートリティックスターダストってとこか? ニュートリノって星が爆発する時にも観測されるんだろ?」

タモリ

「いろいろ考えるんですね…」

魔理沙

「レーザーといえば私、その光速を超えたんだからな。気になるぜ。だからお空のいる地下の温泉ボイラーに行ったりしてるんだ」

タモリ

「あの人の周辺なら観測できるでしょうねえ」

魔理沙

「だがどうやって観測、採集するのか全く分からん…」

タモリ

「あゝ、観測するのも大変ですからねえ」

魔理沙

「質量ほぼゼロだからな。同じ質量ほぼゼロであろう幽々子に比べ

ると存在感が無さすぎるぜ」

タモリ

「観測つて山に大穴を空け、その地下で観測するんですよね？」

魔理沙

「あのスーパーカミオカンデって奴な。だが流石に温泉ボーラー付近や妖怪の山に大穴空けたらマズイしなあ……」

タモリ

「間違いなく大勢の人を敵に回すでしょうね」

魔理沙

「外の文明は進んでいるからなあ……今日もびっくりしたぜ」

タモリ

「今日ですか？」

魔理沙

「いや、今日ここに来るときに鉄でできた飛行機を見つけたんだが」

タモリ

「戦闘機をですか！？大体あなた、飛んできたらマズイでしょう！」

！

魔理沙

「大丈夫さ。にとりの光学迷彩借りて来たから」

タモリ

「“盗んだ”の間違いでしょう!？」

魔理沙

「失敬な。私は一度も嘘をついたことはない！」

タモリ

「それ自体が嘘でしょう！」

魔理沙

「まあそれで戦闘機って奴を見て、速さ比べをした訳なんだが」

タモリ

「ほつき対戦闘機ですか？」

魔理沙

「いや惨敗だった、すごいスピードでさあ……。あの宝船とは訳が違った」

タモリ

「そうでしょうねえ」

魔理沙

「大体ありゃどうなってんだ？あの中には八卦炉でもあるのか？」

タモリ

「あなたからしてみればジェットエンジンは八卦炉みたいなものでしょうねえ」

魔理沙

「うーむ、私もほつきにミニ八卦炉を内蔵してみるかな」

タモリ

「ジェットエンジンみたいに？」

魔理沙

「それなら戦闘機に勝てるんじゃないか？マスタースパークで一気に急発進して差を付けてやるぜ！」

タモリ

「……あの、魔理沙さん？」

魔理沙

「ん？何だ？」

タモリ

「飛行機でよく聞く“G”って知ってます？」

魔理沙

「何だそりゃ？」

タモリ

「…あの、さっきのアイデアは止めといた方がいいです。いやほんとに」

魔理沙

「あん？」

タモリ

「絶対に止めときましようね！飛んでる最中に失神しても知りませんからね」

魔理沙

「…まあ、よくわからんが。やる前にパチュリーやにとりに相談してみるぜ」

理解はしていないが、とにかくヤバそうと感じた様子。

タモリ

「良かったですねえ、やる前にアイデアを公表して」

）

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

魔理沙

「さて…何にしようか？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

魔理沙

「それじゃあ…“魔女のコスプレをしたことある人”にするかな」

タモリ

「ハロウィンでやったことあるかもしれませぬ。では“魔女のコスプレをしたことある人”スイッチオン！」

）

魔理沙

「うーん、0人か！」

タモリ

「惜しいですねえ」

魔理沙

「さすがに日本でそこまで本格的にはやらんかな」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

魔理沙

「そんじゃあ、アリスを呼ぼうかな」

タモリ

「お、やはりそうきますか」

ADさんがつながった電話を魔理沙に渡す

魔理沙

「もしもし、私だ」

アリス

「ああ、魔理沙」

魔理沙

「今なにしてた？」

アリス

「上海の整備中よ」

魔理沙

「おお、そうかい…。じゃあタモリさんに代わるから
受話器がタモリさんに渡される」

タモリ

「もしもしタモリです」

アリス

「もしもし、アリスです」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

アリス

「ええ、大丈夫よ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

アリス

「いいとも〜！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

）

第三十五回・霧雨魔理沙（後書き）

第三十五回、霧雨魔理沙編いかがでしたか？

光を超えたかもしれないニュートリノは、おそらく魔理沙は注目するだろうと思つて書いたら：なんか理系的な話になりましたね。

ニュートリノの説明は本文の通りです。ニュートリノが、“質量を持つ物質は質量ゼロの光の速さ、光速を越えられない”という定理を覆すかもしれません。

「ニュートリノにもごく微量の質量、つまり重さがあるのです」

ついでに補足：Gについて 間違いあつたらすいません

Gとは重力加速度のこと。重力によって地球上の物は下に落ちます。この落ちる物体が、一秒間に落ちる速さの事。

1 Gが普通、私達の日常での重力加速度です。1 G \parallel 約9.8 m/s²です。

そして進んだ距離 \parallel 初速度 \times 時間 + (加速度 \times 時間の2乗) / 2 となります。

例えばうつかり落としてしまった皿とかは、初めの速度がゼロの場合1秒につき約4.9メートル下に落ちるということです。

では戦闘機とかはどうなるか？

フリーフォールとかで急上昇すると下向きの力を体感しますよね？エレベーターでも目的の階について停止するとき浮かぶような感覚があります。

加速した物に乗っているので普段より大きい加速となります。

戦闘機はそれこそ猛烈なスピード、では戦闘機が急上昇するとどうなるか？

普段より数倍の重力加速度「8〜9 G程度？」が体にかかります。

すると全身の血液も下に落ちていきます。普段の8倍近い重力ですからね。

これによりどうなるか？心臓より上、脳に向かう血液の量が少なくなり、結果的に脳が酸素不足となり機能が低下します。

それにより視野が狭くなる、ひどい場合は失神します。前者をグレイアウト、後者をブラックアウトといいます。

魔理沙の場合、最初の加速でほうきから吹き飛ばされるでしょう。

（そもそもほうきが耐えられないと思う）

酸素マスクもせずマツハの世界には行けないだろうという私なりの仮説です。

（もしかすると長年の弾幕戦で高速の世界に強く耐性があるかもしれないが）

ふう、なんか久々に理系っぽい事書いた気がする　現役大学生なのに
今回はアリスです！次回も見えてくれるかな？

第三十六回・アリス・マーガトロイド

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日は人形使いですねえ」

『そうですね!』

タモリ

「あれって糸で操るんですよね?」

『そうですね!』

タモリ

「どうして絡みつかないんだろう?...そしてどうやって作った?」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回の霧雨魔理沙さんからの紹介で初登場、アリス・マーガトロイドさんです!どうぞ」

）

拍手と共にアリスが登場!

『かわいい〜!!』

『アリス〜!!』

アリス

「どうも。聞いた通りの騒がしさね」

ちよつといぶかしげにアリス登場。この空気と自分がメインとなつた雰囲気は異様に感じるらしい。上海を連れての登場!!

タモリ

「どうも〜。あ、それは？」

アリス

「群馬県高崎市で行われたチェコフェアのポスターよ」

タモリ

「群馬でチェコ？」

アリス

「チェコのプルゼニ市のピルスナー・ウルケル・ビール社と、高崎市の麒麟ビールが技術相互協力協定を結んだことをきっかけに始まったの」

タモリ

「ほう」

アリス

「これにより姉妹都市提携が調印された。2010年のチェコフェアは、高崎市の市制施行110周年も重なつたために大規模な記

念イベントとなったのよ」

タモリ

「へえ……」

アリス

「中でも目玉は人形劇よ。チェコは人形劇が盛んでね。伝統もあり、質も高いのよ。ぜひ見たいものね」

タモリ

「すごいですねえ…貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻楽団、博麗神社、霧雨魔法店、神綺様からも……」

アリス

「え？お母さんが！？全くもう…何してんだか」

タモリ

「まあまあ、いいじゃないですか。母親から貰っても」

アリス

「うう……」

少し恥ずかしげなアリス

タモリ

「最近はどうですか？」

アリス

「そうねえ…研究していたゴリアテ人形が完成した訳なんだけど」

タモリ

「おお、ついに…」

アリス

「まあ、これは通過点なんだけどね」

タモリ

「通過点？さらに力強い人形を作るつもりで？」

アリス

「私はブレイン。どこの魔法使いみたくパワーがメインじゃないわよ」

タモリ

「それじゃあ一体？」

アリス

「あれはあくまでパワー重視の大型人形を作ることでの一つの参考にしたまでのこと。本来の目的は人間よ」

タモリ

「人間？」

アリス

「私が持つ人形の多くは小型軽量の人形。魔法により器用なことや細かい事には向くけど、日常や弾幕戦で力仕事には向かない」

タモリ

「あゝ、確かに」

アリス

「だから器用で細かい事も出来つつ、破壊力を持つ人形が理想ね。人間で霊力や魔力を持った者のような人形を作ると弾幕でも魔法でも幅が広がるわ」

タモリ

「成程ねえ……。人形が霊夢さんや魔理沙さんのような精密さと力強さを持ったら凄いでしょね」

アリス

「いい研究テーマでしょう？」

タモリ

「確かに……。でも複数の人形操っていて、よく混乱しませんね？どの糸がどの人形とつながっているか迷いませんか？」

アリス

「そこはもう慣れよ。どの指がどの人形か決めてしまえば問題ないわ」

タモリ

「なんか指とピアノの鍵盤の関係みたいですねえ」

アリス

「そんなとこねえ。弾いたことないけど」

タモリ

「ないんですか？ありそうなのに」

アリス

「聞かせる相手いないでしょう?」

タモリ

「……さらつと悲しい事言いましたね」

アリス

「私にはそれがちょうどいいの」

平然と言つてのけたアリス。一人きりでも気にしていないようだ。

タモリ

「それで、人形は全部自作なんですよね?」

アリス

「そうね。全部私のお手製よ。一から全部作ったわ」

そつといい寄り添う上海人形を見せる。

タモリ

「へえ……。それで、もしかして口から毒が塗られたナイフが飛び出

すとか?」

アリス

「からくり人形じゃないわよ!!それ外の世界の忍者マンガね!？」

タモリ

「よくカン　ロウをご存じで」

アリス

「以前新聞で見たわ。私のは操り人形。からくりなんか仕込んだら

可愛くないでしょう?」

タモリ

「まあ確かに。でも、例えばアリスさんそっくりの人形とか作ったら便利と思いませんか?」

アリス

「そうねえ…。でも音声はどうすればいいか?」

タモリ

「そこはやっぱり腹話術で」

アリス

「いつ く堂!？」

タモリ

「あれ?声が…」

アリス

「やらないわよ!」

タモリ

「ははは…。他に気になるとすれば…。人形がメインなのに本持ち歩いているんですね?」

アリス

「魔法に欠かせないアイテムの一つよ。魔理沙の八卦炉みたいなものね」

タモリ

「成程ねえ…。確か小さい時から使っているんですね?」

アリス

「ええそうよ。初めて霊夢や魔理沙に会った時からかしら?」

タモリ

「へえ…。拝見しても?」

アリス

「構わないわ。どうぞ。でも読めないと思うわよ?」

アリス愛用の本がタモリさんに渡される。

タモリ

「うわあ…。至る所に見たことない文字と図が。これ魔方陣ですかね?」

アリス

「ええそうよ。魔術の基本ね」

タモリ

「うわあ…。こりゃ読むのすら大変だあ」

そういつつペラペラと本をめくっていく。

タモリ

「……あ」

本の裏表紙付近で突然、固まるタモリさん。

アリス

「どうしたの?急に…」

タモリさんが見ているページを見た瞬間、急激に顔が真っ赤になる

アリス。

アリス

「ちょ、返してストップ!!」

タモリ

「『……打倒、霊夢。打倒魔理沙。お母さんに負けない魔法使いになる!』ですか」

アリス

「音読するの止めなさい!!」

タモリ

「いいじゃないですか。夢や目標に少しずつ近づいているんですから」

本の裏表紙。そこにはかすれた拙い文字で、幼いころに描いた夢が書かれていた……

く

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

アリス

「さて…何にしようかな?」

まだ少し赤い顔のままアンケートに参加するアリス。

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

アリス

「それじゃあ… “人形劇をやったことある人” にするかね」

タモリ

「では “人形劇をやったことある人” スイッチオン！」

）

アリス

「0人かあ…」

タモリ

「惜しいですねえ」

アリス

「人形劇は外の世界で消えつつあるのかなあ」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！！』

アリス

「じゃあ、旧作で戦った風見幽香を呼びます」

タモリ

「お、やはりそうきますか」

ADさんがつながった電話をアリスに渡す

アリス

「もしもし、私よ」

幽香

「ああ、アリス」

アリス

「今なにしてみました？」

幽香

「太陽の畑を散歩中よ」

アリス

「そう……。ではタモリさんに代わるから
受話器がタモリさんに渡される」

タモリ

「もしもしタモリです」

幽香

「もしもし、幽香よ」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

幽香

「ええ、大丈夫よ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

幽香

「え…と、いいとも」

少し小声で合わせた幽香。

タモリ

「はい、お待ちしてます」

）

第三十六回・アリス・マーガトロイド（後書き）

第三十六回、アリス・マーガトロイド編いかがでしたか？

小さい頃の思い出ネタというものを初めてやってみました。いやなんか自分のことのようにこそばゆい感じでした。

こういったネタは魔理沙で書きたかったんですが、魔理沙編では書けなかったのでアリスで出しました。

予想ですけど、小さい時にアリスが霊夢や魔理沙に倒されて、そこから精進して二人と違う人形使いとなった考察があるんです。

それから、一つ断っておきますが旧作のみのキャラは出しません。

流石に何話せばいいのか全然わかりませんからね。

次回は幽香です。幽香 メデイスン 小町 映姫と花映塚キャラに移ります。

次回をお楽しみに！次回も見えてくれるかな？

第三十七回・風見幽香

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはは〜!』

タモリ

「今日はフラワーマスターですねえ」

『そうですね!~!』

タモリ

「男はあまり花に縁がないんですがね」

『そうですね!~!』

タモリ

「水やり忘れてたりするんですよ〜」

『そうですね!~!』

タモリ

「子供のころアサガオ枯らしたのはいい思い出です」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回のアリス・マーガトロイドさんからの紹介で初登場、風見幽香さんです!どござ〜」

拍手と共に幽香が登場!

『綺麗〜!〜!』

『幽香〜!〜!』

歩きつつ幽香が傘を広げたその時!!

パ〜ン!!パパ〜ン!!

破裂音と共に色とりどりの花吹雪が舞い散る!

『おお〜!〜!』

タモリ

「すごいですねえ!」

幽香

「何、私らしく派手に行こうと思ってね
傘を閉じて席に着く。」

タモリ

「お、それは?」

幽香

「長崎県は佐世保市のハウステンボスで4/19〜6/12の期間
に行われているバラ祭りのポスターよ」

タモリ

「やはり花の祭りですか。どんな祭りですか？」

幽香

「見どころはバラが咲き乱れる庭や運河、宮殿が素晴らしいのよ。それにガーデンングのコンクール、バラのコンクールが行われるの」

タモリ

「へえ…。そりゃすごそうな」

幽香

「中でも気になるのはローズヌーヴォーの解禁ね」

タモリ

「ローズヌーヴォー？」

幽香

「日本で未発表の新種のバラをお披露目するのよ。毎年楽しみだわ」

タモリ

「そうですか。貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻樂團、博麗神社、霧雨魔法店、夢幻館の方々からも！」

幽香

「あら、夢幻館ねえ…。懐かしい響きだわ」

タモリ

「確か紅魔異変の前の、旧作の東方幻想郷の方々ですね」

幽香

「そうね。思ったけどパジャマ姿を見せたのは私一人じゃないかしら？」

タモリ

「あ、旧作で確かにお披露目しましたね。ピンクのパジャマ」

幽香

「寝てる時にいきなり霊夢と魔理沙が攻め込んで来たんだからしょうがないじゃない……」

タモリ

「でも、レミリアの服もパジャマ風じゃないですか？よく似ていますし」

幽香

「あ……。また盗まれたか」

タモリ

「いや、レミリアの服は違つてしょー！考えすぎですよー！」

幽香

「…そうね。魔理沙じゃあるまいし」

タモリ

「苦い思い出なんですわえ」

幽香

「元祖マスタースパーク使いは私なのにねえ…」

タモリ

「まあまあ…」

幽香

「なら私もファイナルマスタースパーク真似ようかしら？あの子の倍以上のパワー見せつけてやるわよ？」

タモリ

「止めときなさいって！！パワーは魔理沙の代名詞！！」

幽香

「冗談よ。そしたらフラワーマスターの名が泣くわ」

タモリ

「ああ良かった…。最近は何を？」

幽香

「最近？そうねえ…。そろそろ秋の花の最盛期だから、秋の花の観察と栽培をやっているとね」

タモリ

「花を育てるプロですからねえ」

幽香

「そろそろコスモスが咲き乱れるでしょうね」

タモリ

「あとは…彼岸花ですかね？」

幽香

「あれは管轄が違う…！」

タモリ

「ああ確かに。あと幽香さんの特徴といえば、チエック柄の服ですかね？」

幽香

「そうねえ、私ぐらいのものかしら？」

タモリ

「あとは…はたてさんですかね」

幽香

「……明日あたり天狗の羽を空に咲かせてみせようかしら？」

タモリ

「嫌ですよそんな黒い空…！」

幽香

「でもまあ、外の世界ではチエック柄多いわよね？」

タモリ

「そうですねえ」

幽香

「私と同じ格好した人が、町を探せばいるかも」

タモリ

「あゝ、もしかしたら…」

幽香

「見た時は知らせて頂戴。是が非でも会いに行くわ」

タモリ

「…何する気ですか？」

幽香

「そりゃまあ…ネットに投稿して幽香ファッションを広めて」

タモリ

「止めてください!!」

幽香

「なんか服屋のしまむらで妖夢の服に似た服が発売されたらいいから、ブーム出来たら私もいけるかな」と

タモリ

「そのうち東方の服が一つの文化になったりして」

幽香

「上手くいったら私の服がどこかの学校の制服になったりして!!」

タモリ

「影響受けすぎでしょ!!」

）

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

幽香

「さて…何にしようかな？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

幽香

「それじゃあ…“ゲーディングをしている人”にするわね」

タモリ

「では“ゲーディングをしている人”スイッチオン！」

）

幽香

「あ、1人…」

ADが幽香にストラップを渡す。

タモリ

「あ、あの人！」

手を上げる一人の女性を指さす

幽香

「まだ花や土を愛でる習慣はあるみたいねえ」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

幽香

「じゃあ、鈴蘭畑で会ったメディソンを呼ぶわ」

タモリ

「お、あの方ですか」

ADさんがつながった電話を幽香に渡す

幽香

「もしもし、私よ」

メディ

「ああ、幽香。どうしたの？」

幽香

「収録中。今なにしてた？」

メディ

「鈴蘭の花摘みよ」

幽香

「そう…。ではタモリさんに代わるから
受話器がタモリさんに渡される」

タモリ

「もしもしタモリです」

メデイ

「もしもし、メディスンよ」

タモリ

「どうも初めまして～。明日は大丈夫ですか？」

メデイ

「はい、大丈夫よ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

メデイ

「いいとも～！」

タモリ

「はい、お待ちしてま～す」

）

第三十七回・風見幽香（後書き）

第三十七回、風見幽香編いかがでしたか？

幽香はネタ多いのに書きづらかったなあ…。サドっぷりがあまり表現出来なかったかも。

それにしても幽香がファイナルマスパをアレンジしたらどうなるんだろ？考えたくないなあ…。何もかも跡形も残らない気がする。

次回はメディスン・メランコリーです。次回も見てくださいかな？

第三十八回・メディスン・メランコリー

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはは〜！』

タモリ

「今日は人形さんですねえ」

『そうですね〜！』

タモリ

「毒を操る人形ですねえ」

『そーですね〜！』

タモリ

「……彼女、地味に毒殺可能でしょうねえ。幽々子より怖いかも」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回の風見幽香さんからの紹介で初登場、メディスン・メランコリーさんです！どつぞ〜」

）

拍手と共にメディスンが登場！

『かわいい〜!!』

『メデイ〜!!』

メデイ

「どうも〜、初めまして!!」

スーさんと共にメデイスンが席に近づく。

タモリ

「お、それは？」

メデイ

「はい、フランスで5月1日に行われるFete des Mug
et 「フェート・デ・ミュゲ」のポスターよ」

タモリ

「それ何です？」

メデイ

「幸せのシンボルとされるスズランのブーケを親しい人に贈りあう習慣よ。この日にスズランの花を贈るとその人に幸福が訪れると言われているの」

タモリ

「へえ…」

メデイ

「特に1本の茎に13輪の花がついたものは、最高の幸福を与えてくれると言われているわ」

タモリ

「あるんですかねえ？そんなスズラン」

メディ

「さー？でもそれだけ良く捉えられてるってことよ。フランスでは
「聖母の涙」(ミユゲ)って呼ばれてるくらいだし」

タモリ

「そうですか…。貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ZUNさんに上海アリス幻楽団、風
見幽香さん、アリス・マーガトロイドさん、永遠亭からも！」

メディ

「結構スズランを出荷してるからねえ」

タモリ

「出荷してんだ!?!」

メディ

「あのスズラン畑周辺は毒が舞い散ってるからねえ」

タモリ

「ああ、確かに」

メディ

「鈴仙やてみじゃあ流石にまずいからねえ」

タモリ

「いつそ輝夜さんに頼んだら…」

メデイ

「まず無いでしょ！」

タモリ

「そりゃそうか」

メデイ

「それで私がスズランを収穫して永遠亭に出荷してるんだけどね。他にも毒草や薬草とか」

タモリ

「永琳さん、スズランでなにやってるんですか？」

メデイ

「確か新しい強心剤の開発とか言っていたわね」

タモリ

「強心剤を!？」

メデイ

「スズランに含まれるコンバラストキシンは強心作用があり、昔は強心利尿薬として使われていたの。でも副作用も大きくて使いづらいから今は使わないわ」

タモリ

「あ、そういやスズランを入れた花瓶の水は飲んだらいけないんですかね」

メディ

「コンバラトキシシンなどは水に溶けるからよ。というわけでコンバラトキシシンを化学変化させて安全かつ即効性のある薬を作ろうってわけ」

タモリ

「成程ねえ」

メディ

「あとは…部下の鈴仙がスズランを使った新しい香水を作成しているそうよ」

タモリ

「鈴仙さんが？」

メディ

「薬を合成する前に修行の一環としてやらせてるそうね。スズランのエキスを加工したり他の花の香りと配合しているそうよ」

タモリ

「スズランって香水になるんですねえ」

メディ

「フローラル系の香水として使われるそうよ。まあ私はそのへん全く分からないんだけどね」

タモリ

「でも幻想郷で香水付けてる人ってあまりいないんじゃないんですか？」

メイド

「どーだろ？最近、あのメイドがスズランを採っていったからもしかすると…」

タモリ

「毒の紅茶を作るためじゃなくて？」

メイド

「わかんないけど、あいつなら作れるんじゃない？それに紅魔館にはパチユリーって魔女もいるし」

タモリ

「あ、確かに。それで紅魔館の人たちで使うかもしれないねえ」

メイド

「ふふっ、でもあの吸血鬼に香水が似合うかしらね？」

タモリ

「レミリアさん、意外とやっってるかもしれないよ？鏡台の前でシヤネルの5番をふりかけてるかもしれないし」

メイド

「あのレミリアがマリン・モローの香水！？ないない！絶対ない！千年早い！」

タモリ

「あっさり断言しましたねえ！」

メイド

「香水なら幽香とか紫とかでしょう!」

タモリ

「大人の女性ってやつですか」

メディ

「まあ、いい香水が出来たらいいと思うわ。そしたらスズラン畑も注目されるしね」

タモリ

「それいいですねえ!」

メディ

「そしたら私が主に収穫するわけでしょう?人形に毒は効かないんだから。そうして毒に関わる仕事をすれば、少しは人形ってやつを見直すかと思つてね」

タモリ

「そういつ考えですか!いいですねえ。人形でないと危険ですからね」

メディ

「他にも永琳が薬を開発してくれば最高なんだけど…それはもう少しかかりそうなのよね」

タモリ

「成程…。じゃあ主力は香水ですか」

メディ

「そうなのよね。もっと香水を使うやつが増えればいいんだけど。」

近い奴から順に香水の宣伝を試してみようかしら？」

タモリ

「近い奴って？」

メディ

「小町と映姫」

タモリ

「絶対無理でしょ！！閻魔様が香水！？」

メディ

「仕方ない、そのときは文々。新聞に頼むか…」

タモリ

「買い手が増えるといいですねえ」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

メディ

「さて…何にしようかな？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

メデイ

「それじゃあ…“ブーケトスを受け取ったことある人”にするわね」

タモリ

「え、何故？」

メデイ

「スズランはブーケによく使われますから。まあ幻想郷は大半が神前結婚ですけどね」

タモリ

「では“ブーケトスを受け取ったことある人”スイッチオン！」

）

メデイ

「あ、2人…」

タモリ

「惜しいなあ〜」

メデイ

「なかなか取れないものだからねえ」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!』

メディ

「じゃあ、彼岸で会った小野塚小町さんと呼ぶわ」

タモリ

「お、あの方ですか」

A Dさんがつながった電話をメディに渡す

メディ

「もしもし、メディです」

小町

「……………」

メディ

「…全くもう。しょうがないなあ。電話とってすぐ二度寝したわね
そうつぶやくと、咳払いを一つして受話器を握る。」

メディ

「小町!あなたは少し自分に甘すぎる!」

小町

「きゃん!!す、すいません四季様!」

慌てて飛び起きた小町。もはや条件反射並みの速度なのだろう。

メディ

「私だよ」

小町

「……あ、いつぞやの毒人形か。驚かせるなよ」

メデイ

「なんか嫌な響きね。まあいいわ。タモリさんに代わるから
受話器がタモリさんに渡される」

タモリ

「もしもしタモリです」

小町

「もしもし、小町って奴です」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

小町

「大丈夫です！行きます！」

メデイ

「…仕事サボれると思って飛びついたわね」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

小町

「いいとも〜！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

}

第三十八回：メディスン・メランコリー（後書き）

第三十八回：メデイ編いかがでしたか？

スズランから香水ネタになりましたねえ…。実際のところ幻想郷で香水つけてる人は少ないだろうなあ。

レミリアは香水つけるんだろうか？お嬢様のたしなみをそろそろ覚え始めるのかもしれないね。

次回は小町です。次回も見えてくれるかな？

第三十九回・小野塚小町

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは〜!!』

タモリ

「今日は死神さんですねえ」

『そうですね!!』

タモリ

「人を見て死後が分かるそうですねえ」

『そうですね!!』

タモリ

「……なんか見られるのが怖いなあ。いや確かにまともな人生送ってる自信はあるんだけど」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回のメディスン・メランコリーさんからの紹介で初登場、小野塚小町さんです!どうぞ」

）

拍手と共に小町が登場!

『小町〜!〜!』

『可愛い〜!〜!』

小町

「おお、いいねえこの人たちは!鬱うつが無さそうだ。いい霊になるよ」

タモリ

「なんか褒められてるのか馬鹿にされてるのかわかりませんねえ…」

小町

「褒めてるさあ、死神流の褒め言葉。死後が明るいと思ってしまえば生きる気力も増すだろう?」

タモリ

「なるほど、逆転の発想ですか!」

小町

「物事は考えようによっては不吉にもなるし幸せにもなる」

タモリ

「確かに…」

小町

「あたいの舟だってそうさ。出港するまで時間がかかるから、その分川を渡るとき幸せを感じる…」

タモリ

「それはサボるための口実でしょ!!」

小町

「あれ、この理屈は理にかなわないか」

タモリ

「まったくもう…。あ、それは？」

小町

「いや、祭りの知らせじゃないんだけど、群馬県は甘楽町にある三途川のほとりにある姥子堂うばこどうのポスターさ」

タモリ

「あるんですねえ！三途の川なんて名前？」

小町

「群馬以外にも千葉・宮城・青森にあるよ。昔の人はあの世を強く信じていたんだねえ」

「俗称かもしれません。ウィキペディアにはあったけどグーグルで検索しても出てきませんでした」

タモリ

「それで、姥子堂とは？」

小町

「奪衣婆だつえぼを祀ったお堂さ。奪衣婆ってのは六文銭を持たずにやってきた死者の服をはぎ取り、その重さで生前の業を量るんだよ」

タモリ

「珍しいですねえ、地獄の方を祀るなんて」

小町

「民間信仰を受けてねえ…。それに、東京にもあるよ？世田谷区の宗円寺、新宿区の正受院なんかがそうさ」

タモリ

「あゝ、プラタモリで見たら調べてみます。貼っついてちょうだい！！」

タモリ

「お花も結構届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻楽団、四季映姫様、白玉楼からも！」

小町

「白玉楼？冥界つながりってやつかい？」

タモリ

「おそらくそうでしょうね」

小町

「あの庭師は四季様に似て生真面目だからねえ…。あれでもう少し人としての深みが増せば大したもんなんだが」

タモリ

「あなた人のこと言えないでしょう！？」

小町

「おおっと、それもそうか」

タモリ

「最近は…聞くまでもないか」

小町

「え、聞いてくださいよ」

タモリ

「ま、た仕事サボって寝てるんでしょう!？」

小町

「いやいや、最近は監視の目が厳しくてねえ…。四季様の見回りの回数が増えた気がする」

タモリ

「その考えが間違ってるでしょう!監視がなくても仕事しましょうよ!！」

小町

「あ、あなた四季様みたいなこと言うんだねえ…。いや確かに厳しくなった!四季様の巡回パターンも日々変化しているし」

タモリ

「ついに四季様も嚴重注意をするようになったんですねえ」

小町

「いやそれが、この前の神霊騒ぎでね。無関係のあたいがまた仕事サボったと一部の妖怪に間違われてねえ」

タモリ

「無理もないだろうなあ」

小町

「それで無縁塚にチルノとプリズムリバー三姉妹とミスティアが攻め込んできてさあ」

タモリ

「日頃の行いが悪いからでしょう…」

小町

「距離操って遠くから銭投げまくってなんとか倒したけどねえ。いきなり寝起きで5対1だよ？ひどいと思わないかい？」

タモリ

「まあ前科みたいなものがありますからねえ」

小町

「それでやっとこさ倒したと思ったら、なんか背後に冷たい視線感じるな」と思ってた振り返ると…」

タモリ

「四季様が立っていた、と」

小町

「まあそれで、弁明空しくお説教だよ。いつも通り正座して」

タモリ

「なんか想像に容易いなあ」

小町

「あたいが正座しないと四季様はあたいの頭叩けませんからねえ」

タモリ

「……なんか少し可愛いかも」

小町

「それ本人の前で言っちゃダメだよ？あの方は閻魔の威厳が無くなつていくのを人一倍気にしてんだから」

タモリ

「あゝ、そうだろうなあ」

小町

「それに幽霊の数増えたからねえ」

タモリ

「そうでしょうねえ」

小町

「だからこそあたいはペースを遅くしてんだけどねえ」

タモリ

「え？何故？」

小町

「だってそうだろ？いきなり死んで流れ作業のようになつたという間にあの世に行ったんじゃない？あ、この世の暮らしの意義は何だったのかわからないだろう？」

タモリ

「……」

小町

「だからあえて無縁塚の岸に少し留めるのさ。あの世に行く前にこの世を見つめ直してもいいんじゃないのかい？不慮の事故ならなおさらさ」

タモリ

「小町さん…あなた結構真面目な一面あるんですね」

小町

「この仕事やってると自然にそんなこと考えるのさ。それに上司の性格が少し移っちまったのかもしれないねえ」

）

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

小町

「さて…どうしようかねえ？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

小町

「それじゃあ…。昔の古銭、“寛永通宝”を持っている人”にするかね」

タモリ

「寛永通宝を？江戸時代の小銭ですか」

小町

「あたいの投げ銭の大半はあれだからねえ」

タモリ

「では“寛永通宝を持っている人”スイッチオン！」

）

小町

「あ、1人…！」

ADが小町にストラップを渡す。

小町

「あたい愛用の舟に付けるかな？三途の川のタイタニックの船首が
いいだろう！」

タモリ

「止めときなさいって！あ、あの人だ！」
手を上げる一人の男性を指さす

小町

「へえ…。死後の六文銭にとっておきなよ？」
笑いつつ冗談をかます小町。

タモリ

「これがあるなら三途の川をすいすい渡れるってことですか？」

小町

「ただし天寿は全うしなよ？でないとな途の川の中央で突き落とすからね？」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!!』

小町

「じゃあ、あたいの上司、四季映姫様を呼びます」

タモリ

「お、あの方ですか」

ADさんがつながった電話を小町に渡す

小町

「もしもし、小町です。何していました？」

四季

「昼休みに休憩室であなたの出演見ていましたよ。小町、ずいぶんと色々なことペラペラ喋ってくれたわね？私のことも結構に……」

小町

「いや〜、だってこれ喋る企画ですし……」

四季

「あなたはいつもお喋りです！だから仕事も遅い！そう、あなたは自分に甘すぎる！閻魔の存在をないがしろにする気ですか？」

小町

「きゃん！し、四季様！今はお説教は止めときましよう！番組の尺もありますし！生放送ですよ？」

四季

「……仕方ありませんねえ」

小町

「ではタモリさんに代わりますから
受話器がタモリさんに渡される」

タモリ

「もしもしタモリです」

四季

「もしもし、四季映姫・ヤマザナドゥと申します」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

四季

「はい、空いています」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

四季

「では…」ほん。いいとも〜!」

小町

「四季様も合わせてくれるんだ!？」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

）

第三十九回・小野塚小町（後書き）

第三十九回、小野塚小町編いかがでしたか？

小町はかなり書きやすかった！魔理沙とか小町とか、こういう一見すると曲がっているけど根は真っ直ぐなキャラ好きなんですよね。

小町はサボってはいるけどしっかり死神としての意義を考えている、という想像のもとこんな話になりました。

でもまあ、まだまだ四季映姫と対等に話せるには早いでしょうねえ。小町は今頃、悔悟の棒でぺしぺしと頭叩かれつつ説教されているんでしょう。

さて、次回はなんと閻魔様！私に書けるかなあ…。次回も見てくれるかな？

第四十回・四季映姫・ヤマザナドウ

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはー！！』

タモリ

「今日は何と閻魔様ですねえ！！」

『そうですねー！！』

タモリ

「死んだら裁判されますねえ」

『そうですねー！！』

タモリ

「今のうちお布施でも渡しておこつかな？いやあの人受け取らないか！」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回の小野塚小町さんからの紹介で初登場、四季映姫・ヤマザナドウ様です！どうぞ」

）

拍手と共に四季映姫が登場！

『四季様〜!!』

『可愛い〜!!』

映姫

「どうも。もう一度外の世界の地を踏むとは思いませんでした。四季映姫と申します」

いつも通り悔悟の棒を構えた四季映姫が丁寧に礼をする。

タモリ

「ああ、これはどうも。どうぞお掛け下さい閻魔様」

映姫

「ありがとうございます」

タモリ

「お、それは？」

映姫

「愛媛県宇和島市の西江寺せいかいじで毎年旧暦1月16日のやぶ入りの日に行われている“えんま祭り”のポスターです」

タモリ

「やはりあるんですね…。閻魔祭り!？」

映姫

「はい、宇和島市出身の村上天心さんが描かれた閻魔大王図が公開され、多くの露店が立ち並びます。ちなみに今年は2月18日に行

われる予定です」

タモリ

「閻魔大王の絵ですか…。なんか想像していた人と明らかに違いますねえ」

映姫

「ああ、あれは同じ部署の方なのです。閻魔の中で一番の古株で、同じ閻魔の中でも中心的な方なのです」

タモリ

「そうなんですか!?!」

映姫

「昔は今よりも凶悪な事件が多発していましたからね。それである方が閻魔に推薦されたのです。それで人間の閻魔のイメージがあの人になりました…」

タモリ

「そうですか…貼っついてちょうだい!」

タモリ

「お花も結構届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻楽団、小野塚小町さん、八雲家一同、白玉楼からも!」

映姫

「ありがたいです。でも紫から?少し臭うわね…」

タモリ

「そうですか?」

映姫

「白黒はつきりつけましょう」

タモリ

「ここです!？」

映姫

「大丈夫です。お時間はとらせません。この浄瑠璃の鏡で彼女の行いを暴いて見せましょう!」

そっいい、懐から手鏡程の大きさの鏡を取り出すと、なにやら力を込める。すると…

タモリ

「あ、なにか映り始めた!これは…?」

映姫

「昨日のお昼ごろの八雲亭の様子です」

く昨日午後3時16分、八雲亭にてく

紫

「藍。邪魔するわよ」

藍

「あ、どうしたのですか紫様?」

紫

「ちょっと面倒な頼みごとあるんだけど…」

藍

「どんな話です？」

紫

「明日あの閻魔がいいともに出るらしいのよ！」

藍

「それがどうしたのですか？」

紫

「わかってないわね…。出演者は親しい人から花を送られるのよ？だから送るのよ」

藍

「だから謎なんですよ。大したつながり無いじゃないですか。幽々子様は幽霊扱うからつながりありますけど、家は何も…」

紫

「いや、彼女も相当長いよ？私が幻想郷を創設した初期から何回か親交あるのよ。結界のことで何回かもめたこともあったし」

藍

「そんなことが？」

紫

「たまに博麗大結界を越えてくる人いるでしょ？そんな奴がなんかしでかすと私にとばかり来るのよ…。『結界甘いのではないか？』って」

藍

「そうなんですか？」

紫

「まあ立場的にはほ拮抗しているから口頭で注意してくるだけなんだけど、これが長いのよねえ…。まったく、ああいった性格は私と合わないわ」

藍

「それで、一応花を贈ろうと？」

紫

「そうよ。それで花を適当に見繕って頂戴。あとは私が送るから」

藍

「承知しました」

紫

「まったく、面倒な話ね…」

く再生終了く

映姫

「……なるほど、そういう魂胆でしたか」

夕モリ

「きつちり全部まるわかりなんですねえ…」

映姫

「ふう。まあいいでしょう。誰しも仕事上の付き合いはあるもので

す。それを重視しているのは一つの善行といえるでしょう」といいつつ、少し苦い顔をする映姫。

タモリ

「それにしても、紫さんとはあまりウマが合わないんですね？」

映姫

「彼女は混沌としたものを好みますからね。よく話を煙に巻くでしょう？」

タモリ

「ああ、確かに……」

映姫

「だから白黒はつきりつける私と真逆なのですよ」

タモリ

「幻想郷でも特筆の賢者と閻魔様の会合ですか……。なんかとても辛辣しんな話し合いになりそうですね？」

映姫

「いえいえ、彼女も私も幻想郷の平穏を願う者同士。考えは違えど基本的な想いはほぼ同じですから、けっこう普通に話し合いますよ」

タモリ

「しかし……人間の前で浄瑠璃の鏡なんて披露して良かったのですか？」

映姫

「構いません。私はあえて見せたのですから」

タモリ

「どういうことですか？」

映姫

「あの世の世界観は年月と共に薄れていき、閻魔の存在すら危うくなり始めた。だからこそ見せようと思ったのです。罪は必ず暴かれることを」

タモリ

「おお……」

映姫

「閻魔の役目は死者の裁きと、裁きの恐れから生者の行いを正すこと。それが薄れてしまつては閻魔として成り立たない」

タモリ

「確かに……」

映姫

「そうでなければ生者の多くは地獄に行くことになる。その前に行いを正した方がよっぽどこの世は良くなるのです」

タモリ

「法で縛るにも限界がありますからねえ」

映姫

「本来は法ではなく倫理で人を縛るべきなのです。倫理を破つたとしても罰は無い。だが倫理は柔軟に、どんな過ちでも罪の意識を持たせられる」

タモリ

「そうですねえ…。倫理やモラルが無くなれば、法で裁けない罪を悔いたりしませんからねえ」

映姫

「倫理が無くなっていくのは非常に嘆かわしいです…。特に中国で急速に起こっているそうですね」

タモリ

「そつみたいですねえ。官僚と政治の腐敗が激しいようですね」

映姫

「日本はそうならないよう、私も時と場合によっては、人が想像する閻魔の姿をとる必要がありますね」

タモリ

「うわあ…。裁きの際はお手柔らかにお願いします」

映姫

「いいえ。公明正大に裁かせてもらいますよ？地獄の沙汰は金じゃ逃れられません！」

タモリ

「うひゃあ…。最初の台詞覚えていたんですねえ」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

映姫

「さて…どうしましょうか？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

映姫

「それじゃあ…。絵画の、“地獄絵図を見たことがある人”にします」

タモリ

「そうきますか…。では“地獄絵図を見たことがある人”スイッチオン！」

）

映姫

「ふむ、3人ですか」

タモリ

「残念でしたねえ」

映姫

「いえ、多ければいいのです。それが倫理の形成に繋がるのですから」

タモリ

「映姫様…？このコーナーわかっています？」

映姫

「あ…。失礼、ついいつもの調子で」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！！』

映姫

「では、同じく霊を管理する西行寺幽々子を呼びます」

タモリ

「お、あの方ですか」

ADさんがつながった電話を映姫に渡す

映姫

「どうもこんにちは。四季映姫・ヤマザナドゥです」

幽々子

「あら意外ね。次は私？」

映姫

「ええ。それで、今何をされていましたか？」

幽々子

「ちよつど昼ご飯を食べるところよ。すぐに代わって頂けるかしら？」

映姫

「わかりました。ではタモリさんに代わりますね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

幽々子

「もしもし、西行寺幽々子です」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

幽々子

「ええ、空いてるわ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

幽々子

「いいともー！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

}

第四十回：四季映姫・ヤマザナドゥ（後書き）

第四十回、四季映姫・ヤマザナドゥ編いかがでしたか？

映姫様はどこまでも真っ直ぐ、直角な方なんだろうな〜と思って書いてたらこんな風になりました。

今日のニュースで、中国でひき逃げされた女の子を、通行人が誰も助けなかったというのを見ました。

通行人は「通報人が加害者と間違えられる場合が多いから知らせなかった」ということです。

四季映姫様はそんな倫理やモラルの欠如というのを誰よりも嘆いているのだらうと思いい、こんな話となったのです。

私としては似合わない話でしたけどね。四季映姫の感じが出せたらいいと思います。

でも映姫様は知り合い少ないだらうなあ…。まともに話せる人いるのかなあ？

白蓮なら話せるかなあ？一般人ではついていけないレベルの深い話を繰り広げるのかも？

次回は亡霊姫です。次回も見えてくれるかな？

第四十一回・西行寺幽々子

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはー！！』

タモリ

「今日は幽霊のお姫様ですねえ」

『そうですねー！！』

タモリ

「幽霊なのに大食いなんですよねえ」

『そうですねー！！』

タモリ

「あれ？じゃあ食べた物はどこでどうやって消えて行ったんだ！？
どこで消化すればいいんだ！？」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回の四季映姫さんからの
紹介で初登場、西行寺幽々子さんです！どうぞ」

）

拍手と共に幽々子が登場！

『ゆゆ様〜!!』

『綺麗〜!!』

幽々子

「あら、ありがとう。では皆さんの目を少し和ませましょうかしらね」

タモリ

「??？」

幽々子

「“桜符”西行桜吹雪!!」

薄桃色の桜がスタジオに舞い散る!!

『おお〜!!』

タモリ

「桜吹雪で登場ですか!？」

幽々子

「寒さ近づく今の世に花咲かせようと思いましたがね」

タモリ

「まさか十月に花見するとは、どうもありがとうございます。どうぞお掛けください」

幽々子

「では失礼いたしますね」

幽々子が席に着席する。

タモリ

「あ、それは？」

幽々子

「神奈川県は大磯町のしぎたつあん嶋立庵で3月25日に行われる西行祭のポスターよ」

タモリ

「西行祭？どんな祭りですか？」

幽々子

「3月末に最期を迎えた西行の遺徳を偲び、また俳諧道の振興を目的として事前に献詠された俳句・短歌の表彰と当日投句された俳句・短歌の表彰を行うの」

タモリ

「俳句や短歌を詠むコンテストみたいなものですか…。西行法師の前で詠むのは相当緊張しそうですね」

幽々子

「あら、そんな事はなくてよ？自然に読めば自ずと浮かんでくるものよ」

タモリ

「でも作者が詠むと川柳になるんですよねえ。まず季語が何だか浮かばない…」

幽々子

「まあ、それは慣れですかね」

タモリ

「季語に穰子と静葉の二人は入るんですかね？」

幽々子

「いや、流石に無理あるでしょ……。まず知名度が」

タモリ

「ザツクリ言いましたね！？貼っついてちょうだい！！」

タモリ

「お花も結構届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻楽団、八雲家一同、四季映姫様、魂魄妖夢さんからも！」

幽々子

「あら、閻魔様から？」

タモリ

「そのようですね。前回のお礼でしょうか？」

幽々子

「そのようね。顔合わせたのはいつぶりだったかしら……？」

タモリ

「そんな頭悩ませるほどなんですか？」

幽々子

「確か妖忌が子供だったところかしらね？」

タモリ

「だいぶ昔なんですなあ!?」

幽々子

「そんなもんよ。説法を聞く者は数あれど、説教を聞きに行くほど殊勝な人はいないでしょうし」

タモリ

「いや、中にはあえて閻魔に寄ってくる人が…」

幽々子

「いないいない。いたしたら人ではないわ。悟りを開いた聖人よ」

タモリ

「なるほど、確かにそんな“人”はいないでしょうねえ」

幽々子

「常人にそんな心持ちのある人がいたら見てみたいわ」

タモリ

「それにしても…妖夢さんの登場からずいぶん間が空きましたねえ」

幽々子

「そうね〜。まったく妖夢ったら。後でどうしてあげようかしら?」

タモリ

「うわあ…。なんかまずい一言言ったのかも」

幽々子

「まあ一番の原因は作者だけだね。大して考えもせずノリで藍を選

んだんだから」

タモリ

「思えばそうでしたねえ…」

幽々子

「全く…ギヤストリドリームで今晚にでも摘んでこようかしら？
夜限りの月見草の花、散らせてみるのも悪くないわね」

タモリ

「やめてください！…この小説も散らせてどうするんですか？」

幽々子

「だれか代筆してくれるんじゃない？」

タモリ

「まずいないでしょ！…」

幽々子

「相当間が空いてきてるからねえ…この番組」

タモリ

「そうですねえ…最近はどうですか？」

幽々子

「そうですねえ…久しぶりに弾幕ごっこやったわねえ」

タモリ

「あゝ、神霊廟の時ですね」

幽々子

「久しぶりに霊夢たちと戦ったと思ったら、妖夢とも戦ったからねえ」

タモリ

「主人と従者が戦うってアリなんですかね!？」

幽々子

「いやいや、あれはただのちょっとした手合わせ。本気でやったりはしないわよ」

タモリ

「はたから見るとそうでもないんですがねえ…。妖夢さん斬撃飛ばしてきますし」

幽々子

「うーん、前よりは良くなったけどまだまだね。妖忌の域には達していないわ」

タモリ

「そうなんですか!？」

幽々子

「そりやまだまだ…。あの子真っ直ぐな性格だから攻撃が少し単調なのよね。料理とか、庭師の腕とかは一級品なんだけど」

タモリ

「いやまあ、幽々子様が言っならそうでしょうが…」

幽々子

「もう少しこう…思慮深くなったら面白くなるんでしょうけど、あの子に“策略”とか“裏から手を回す”という言葉は向きそつにないのよねえ」

タモリ

「うーん、無理がありそうだなあ。あと十年はかかるかも？」

幽々子

「その頃には立派な従者になってくれると嬉しいんだけどねえ。まあ、気長に待つわよ」

タモリ

「なんか母と娘の関係みたいですわねえ」

幽々子

「年の差からすると自然にそつなるものよ」

タモリ

「幾千年も過ごしてきた方の従者は大変そつだなあ…。剣術を妖夢さんから教わったりしないんですか？」

幽々子

「今その必要はないでしょう？運動しなくても太らないし、敵はいないし。刀って重いのよねえ…」

タモリ

「うわ…まあ確かに幽々子様と一戦交える人はまずいないでしょうが」

幽々子

「そうねえ…妖夢が、ルナティックの私にラストスペルカードを使わせるほど強くなったら少し考えてみましょうかね？」

タモリ

「妖夢さんが実質的な右腕となるのは長そつだなあ…」

）

一日CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

幽々子

「さて…どうしましょうか？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

幽々子

「それじゃあ…“家に桜の木がある人”にします」

タモリ

「そうきますか…。では“家に桜の木がある人”スイッチオン！」

）

幽々子

「うん、2人ですか」

タモリ

「残念でしたねえ」

幽々子

「でもいいわねえ、家でお花見できるんですから」

）

一日CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

幽々子

「では、私の親友、紫の式の式、橙を呼びます」

タモリ

「お、あの方ですか！交流あるんですねえ」

幽々子

「宴会でちよくちよく顔合わせるほどだけだね」

ADさんがつながった電話を幽々子に渡す

幽々子

「こんにちは。幽々子よ」

橙

「どうもこんにちは！意外ですねえ…?」

幽々子

「ふふっ。確かにそうかもね。今何してた？」

橙

「マヨヒガでちょうど昼ご飯を食べているところでした」

幽々子

「そう。ではタモリさんに代わるわね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

橙

「もしもし、橙です！」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

橙

「はい、空いています！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

橙

「いいともっー！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

）

第四十一回・西行寺幽々子（後書き）

第四十一回、西行寺幽々子編いかがでしたか？

いや、あのふわふわしたかんじとか、それでいて優雅な感じとか書くのは難しい！紫や幽々子は難しいですよ！

優雅さを学ぶために大学で茶道をもう少し頑張ればよかったかなあ…。面倒な作業が多くて単位とつたらOKみたいな感じでやっただけですよね。

昔の人の“わびさび”とか“雅”^{みやび}といった考え方の域に達するのは難しいですよ。妖夢は当分幽々子に振り回されるだろうなあ…。

それに幽々子は剣を振ったりしないだろうなあ。庭で妖夢と一緒に素振りする幽々子はどうやっても想像できない…。

また、夜光沙羽さんの文々。ニュースに一昨日番組予告を受けたんですがね…。奇跡のアポなし番組繋ぎは無理でしたねえ。

夜光さんは毎日更新しているのですごいと思います。私も見習わないとなあ…。

さて、次回の橙ですが、橙の次は誰に回そうか？妖々夢繋がりでプリズムリバーが第一候補なんだけど、三人をうまく書き分けられるかなあ？

問題がここにきて多く挙がってきました…。計画としては神霊廟キヤラを最後に持っていきたいな～と思っていますが、どう回すかが難しいです。

今更ながら思ったけど小悪魔と親交がある人って紅魔メンバー以外にいるのかなあ？ヤマメとキスメにはどう繋げようか？

だんだんお友達紹介が無理やりになるかもしれません。

次回は橙です！明日も見てくれるかな？

第四十二回・橙

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日は猫ちゃんですねえ」

『そうですね!』

タモリ

「もうすぐ猫はこたつで丸くなる季節ですねえ」

『そうですね!』

タモリ

「あ、迷信だったか。忘れてた…」

タモリ

「それでは登場していただきましょう、前回の西行寺幽々子さんの紹介で初登場、橙ちゃんです!どうぞ」

）

拍手と共に橙が登場!

『ちえええええん〜!!』

『可愛い〜!!』

橙

「どうもありがと〜!!」

元気いっぱいに橙が登場!!

タモリ

「元気ですねえ〜。あ、それは？」

橙

「東京は武蔵野市吉祥寺で、10月1日〜30日に行われる吉祥寺ねこ祭りのポスターです!!」

タモリ

「あるんだそんな祭り!？」

橙

「はい。猫をモチーフにしたグッズや作品、イラストを販売する「ねこだらけ展」、三つ編みのかつらをした猫の写真展“3つ編みプロジェクト”を開催します」

タモリ

「へえ…」

橙

「他にも“吉祥寺ねこ祭り ねこだらけフェア”を行います。16日には、“飼い主のいない猫の譲渡会”が井の頭公園野外ステージ

で開かれます」

タモリ

「そうなんですか…貼っついてちょうだい!!」

タモリ

「お花も結構届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻楽団、八雲家一同、白玉楼、マヨヒガの猫一同からも！」

橙

「わあ〜。ありがとうございます!!」

タモリ

「良かったですねえ〜！マヨヒガの猫ちゃん達からも…」

橙

「……」

タモリ

「慕ってくれているんですねえ」

橙

「……」

タモリ

「あの、橙ちゃん？」

橙

「は、はい…？」

タモリ

「花束にあるマタタビに夢中になってたの？」

橙

「あはは…すいません」

タモリ

「本能ってやつですか…最近はどうですか？」

橙

「そうですねえ…。相変わらずマヨヒガで猫たちと楽しく過ごしているんですけど」

タモリ

「そうですねえ」

橙

「なかなか言うこと聞いてくれないんですね…」

タモリ

「ははは…」

橙

「とはいえ私も元は猫。流石に猫に向けてスペカ撃つのは気が引けるんですよえ」

タモリ

「同族に向けて攻撃するのは何か後ろめたいですからねえ」

橙

「だけどここのままにするわけにもいかないから…私も心を鬼にしましたよ」

タモリ

「お！何したんですか!？」

橙

「両手を広げつつ、こんな風に“フシャー!!”ってやってみました」

『可愛い〜!!』

タモリ

「……っははは、ダメだ、全然怖くない」

橙

「そんなあ……」

タモリ

「まあまあ、気長にいきましょう」

橙

「うん。藍様みたいに早く大きくなりたいです」

タモリ

「そう焦らないでいいですよ。将来は藍様みたいになりたいんですか？」

橙

「そうですね！私も強くなりたいです」

タモリ

「ああ、やはりそうきますか」

橙

「そして紫様のサポート要員になりたいですね」

タモリ

「橙ちゃんが!？」

橙

「藍様と共に異変解決したいですね!！」

タモリ

「藍様は納得しないんじゃないですか？」

橙

「え?いいアイデアと思いませんか?藍様と私でくるんくるん回りつつショットを決めていつたらかつこいいと思いますよ?。」

タモリ

「橙ちゃんにショット当たったら藍様相当怒るんだろうなあ…」

橙

「あはは…」

タモリ

「四面楚歌チャージミング全力でやりそうな気がする」

橙

「いえいえ、藍様もスペカで私を使いましたよ？」

タモリ

「へ？あ、そうでしたね！妖々夢で…」

橙

「それで、私と藍様と紫様で合体スペカ作ったらカッコいいでしょ！？」

タモリ

「三人合体スペカ！？」

橙

「名前は何にしようかな？」

タモリ

「なんか避けれそつもないなあ…紫様一人でも相当つらいのに。あれ？ってことは…」

橙

「？」

タモリ

「紫様も回るんですか？」

橙

「いやそれは無いですよ！？」

）

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

橙

「さて…どうしようかなあ？」

タモリ

「頑張ってください。伺いますか？」

橙

「じゃあ…“芸ができる猫を飼っている人”にします」

タモリ

「では“芸ができる猫を飼っている人”スイッチオン！」

）

橙

「うん、0人ですか」

タモリ

「残念でしたねえ」

橙

「流石に難しいのかなあ…」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

橙

「では、東方妖々夢で共演したルナサ・プリズムリバーさんをお願いします」

タモリ

「お、あの方ですか!というか、まとめて呼んだりしないんですね」

橙

「昨日三人に聞いたら『絶対に一緒にしないで!〜!』と念押しされましたね」

ADさんがつながった電話を橙に渡す

橙

「こんにちは!〜!」

ルナサ

「どうもこんにちは!〜!」

橙

「こつやって話すのも久しぶりですねえ…今何してました?」

ルナサ

「いつも通り三人で音合わせ中」

橙

「そうですね。ではタモリさんに代わります!」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

ルナサ

「もしもし、ルナサです!」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

ルナサ

「はい、空いています」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

ルナサ

「いいとも!」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

）

第四十二回・橙（後書き）

第四十二回、橙編いかがでしたか？

橙は結構書きやすかったかな？でも本来のイメージから少し変化させたような、意外なことが書けなかったのが残念…。少しキレがなくなってきたね。

次回からはルナサ メルラン リリカの順でいきます。次回も見てくれるかな？

第四十三回・ルナサ・プリズムリバー

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「もう10月も終わりですねえ」

『そうですね!』

タモリ

「もう11月ですねえ。文化祭はもう終わったかな？」

『そうですね!』

タモリ

「今更ながら思ったけど、穰子さん早く出さないとネガティブになっちゃいますねえ」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回の橙ちゃんを紹介で初登場、ルナサ・プリズムリバーさんです!どうぞ」

）

拍手と共にルナサが登場！

『ルナサ〜!!』

『可愛い〜!!』

ルナサ

「どうも。初めましてルナサです」

タモリ

「初めまして〜。あ、それは？」

ルナサ

「兵庫県淡路島の南あわじ市、古民家char*by cheep
- cheepで11月29日に行われるヴァイオリン・チェロのデ
ュオコンサートのポスターです」

タモリ

「淡路島!?あそこ兵庫になるんですね!？」

ルナサ

「そこに食いつくんですか!？」

タモリ

「ははは…。バイオリンのコンサートですか〜。貼っついてちょう
だい!!」

タモリ

「お花も結構届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻楽団、白
玉楼、メルランさん、リリカさんからも!」

ルナサ

「身内だけだ…。白玉楼ってお得意様一つだけだ…」

タモリ

「そんな露骨にへこまないでください!！」

ルナサ

「私のせいかなあ…。鬱うつにさせる音が駄目だったのかなあ。テンションが…下がる」

タモリ

「いやいや!そんなへこまないで!！」

ルナサ

「だからねえ…最近いろいろ変えていこうかと」

タモリ

「お、何ですか?」

ルナサ

「いつそギターに変えようかと」

タモリ

「絶対だめでしょ!!存在意義は!?!」

ルナサ

「時代に合ってるしいいかなあと思って…。人気あるんでしょ?」

タモリ

「確かにありますけど!」

ルナサ

「影響力大きいですからね」

タモリ

「幻想郷にまで広まってきたんだ」

ルナサ

「だからいいかな」と思って…。それにミステリアならたぶんボーカールいけますよ。これで人気は上がるはず!」

タモリ

「どれだけ変える気ですか!? バンド結成?」

ルナサ

「何せけいおんの東方パロディに、音楽と関わる私たちが使われなかつたんですから…。じゃあ私達自ら作ってやるうかと」

タモリ

「でもキーボード以外に軽音楽と関わる人いないでしょう? ギターがルナサさんでもドラムとベースはどうするんですか?」

ルナサ

「ドラムは四季様に頼んで…」

タモリ

「悔悟の棒でドラム!?!」

ルナサ

「叩き慣れているでしょう?」

タモリ

「小町さんの頭だけです! 最もバンドに合いそうにない人でしょ!」

ルナサ

「ベースはキャラ的にアリスさんかなあ?」

タモリ

「サポート役ってこと!?! なにサラツと毒吐いているんですか!」

ルナサ

「流石に無理あるか…。早苗さんは? 女子高生ですよ! 女子高生! 軽音楽いけるんじゃないですか?」

タモリ

「…奇跡起こして無理やりやってのけそうだなあ」

ルナサ

「それが無理なら…せめてバイオリンを皆に使ってほしいですね」

タモリ

「あゝ、でもどう考えても難しそうですしねえ…」

ルナサ

「だからバイオリンを使った歌でヒット曲出ないかな? と思っているんですよ。そしたら興味を持つかも…」

タモリ

「バイオリンで?」

ルナサ

「バイオリンでJ・POPで」

タモリ

「ハードル高いなあ…。バイオリンのどこにもポップな感じしませんよ？」

ルナサ

「秋元さんでも無理かなあ？」

タモリ

「流石にきついでしょう…」

ルナサ

「やっぱりなあ…。こうなったら自分で作詞作曲するしかないかなあ？」

タモリ

「プリズムリバー三姉妹で曲作りですか？」

ルナサ

「それで、ボーカルはミステリア…。いや、あのヤマビコもいいかも」

タモリ

「響子ちゃんを!？」

ルナサ

「肺活量ありそうでしょう?」

タモリ

「確かに大声のプロといえばプロですけど…」

ルナサ

「彼女ならマイクいらなと思う」

タモリ

「マイクなくても幻想郷のどこまでも響きそうですね…」

ルナサ

「ビブラート相当出せると思いますよ？」

タモリ

「名前からして演歌向きと思うんですがねえ」

ルナサ

「Kyokokasodaniって変換したらアーティストみたいになるかな？」

タモリ

「エグザイルみたいですねえ…」

ルナサ

「なら私もLunasaprismriverと名乗るっかなあ？」

タモリ

「止めてください。読みづらいでしょう？」

ルナサ

「あとは曲のジャンルだな。バイオリンなら感動するような歌がい

いかな？」

タモリ

「いろいろ考えるんですね」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

ルナサ

「さて…どうしようかな？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

ルナサ

「じゃあ…“バイオリンが家にある人”にします」

タモリ

「では“バイオリンが家にある人”スイッチオン！」

）

ルナサ

「……0人か」

タモリ

「残念でしたねえ」

ルナサ

「うう…。日本でバイオリンは合わないのかなあ…」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!〜!』

ルナサ

「では、妹のメルラン・プリズムリバーを呼びます」

タモリ

「お、やはりそうきますか！」

ADさんがつながった電話をルナサに渡す

ルナサ

「もしもし、やあメルラン」

メルラン

「ああ、姉さん」

ルナサ

「別々に行動するのは久しぶりだな…今何してた？」

メルラン

「ん〜。合奏練習できないから軽いソロライブしてた」

ルナサ

「え！？ソロライブ？何それ！私も行く！タモリさんに代わるから
！！」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

メルラン

「もしもし、メルランです！」

タモリ

「どうも初めまして〜。明日は大丈夫ですか？」

メルラン

「はい、空いています」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

メルラン

「いいとも〜！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

}

第四十三回・ルナサ・プリズムリバー（後書き）

第四十三回：ルナサ・プリズムリバー編いかがでしたか？

会話が少ないから口調とかいまいち分かりづらいわ、何回もムラサと打ちそうになるわで大変でした。

なんか思いつきり二次！って感じにいじりましたね。もはやルナサの話から外れていないか？と思いましたが書きちゃいました。

バイオリンを使う歌謡曲：はあるのでしょうか？何かパツと思いつきませんね。もしかしたらギターに変える日が：来たらマズイなあ。Youtubeで「けいおん 東方」って検索したらプリズムリバーは全く出演してなかったなので軽音楽の話書きちゃいました。

今回はメルランです。次回も見てくれるかな？

第四十四回・メルラン・プリズムリバー

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはは〜！〜！』

タモリ

「今日はトランペッターですねえ」

『そうですね〜！〜！』

タモリ

「気分は少しハイな方ですねえ」

『そうですね〜！〜！』

タモリ

「最高に“ハイ！”ってやつ…いえ、止めときましょう」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回のルナサ・プリズムリバーさんの紹介で初登場、メルラン・プリズムリバーさんです！どうぞ〜」

）

拍手と共にルナサが登場！

『メルラン〜！〜！』

『可愛い〜！〜！』

メルラン

「ありがとう〜！〜！ではお礼に…」

そっつい、愛用のトランペットを吹いた！

〜！

『あ〜〜！〜！よっしゃいくぞ〜！〜！』

『俺らの姫様メルランちゃん！ハイハイハイハイ！〜！』

タモリ

「おお、みんなハイになってきてる〜！〜！」

メルラン

「いいじゃないですか！みんな盛り上がってる〜！〜！」

『イエ〜！〜！』

タモリ

「スゴい…一瞬でお客様の声援が激しくなった！〜！合の手す〜い
な…」

メルラン

「少しハイにしすぎたかな？」

タモリ

「こんな盛り上がった声援は初めてかも…。あ、それは？」

メルラン

「11月17日に大阪府大阪市のザ・シンフォニーホールで行われるトランペット協奏曲の演奏会、オーレ・エドワルド・アントンセンのポスターです！」

タモリ

「おお…。こりやまたずいぶん凄そうな」

メルラン

「すごいと思いますよ？日本トランペット協会（JTA）のサイトにありましたから」

タモリ

「そんな協会あるんだ…。貼つといてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね～。ZUNさんに上海アリス幻楽団、白玉楼、ルナサさん、リリカさんから！」

メルラン

「あちゃ～。ま、こんなもんかな？」

タモリ

「ははは…。最近はどうですか？」

メルラン

「最近は…トランペットが使われる機会が増えて嬉しいです！」

タモリ

「といますと？」

メルラン

「始まったじゃないですか！クライマックスシリーズが！」

タモリ

「あゝ、野球は今からが盛り上がりますからねえ！」

メルラン

「試合あるたびにトランペット大活躍よ！嬉しいわね」

タモリ

「応援には欠かせないですからねえ」

メルラン

「いつそ阪神のトランペッターになろうかしら？」

タモリ

「ダメでしょ！トランペッターいるし！」

メルラン

「私ならより一層盛り上がるわよ？」

タモリ

「ハイになりすぎてデッドボール一回で乱闘が起ったらどうするんですか…」

メルラン

「いいじゃない。それも一つの醍醐味よ?」

タモリ

「野球じゃなくなっちゃうでしょ…。昔は多かつたみたいだけど」

メルラン

「私もあんな風にトランプペットで応援してみたいわ」

タモリ

「応援ですか?」

メルラン

「幻想郷じゃアスポーツはないからねえ…」

タモリ

「とはいえ、妖怪と人間が一緒になってできるスポーツは弾幕以外無いんじゃない?」

メルラン

「卓球は?あれは力入れすぎたらアウトになるでしょ?」

タモリ

「ピンポン球が耐えられないと思いますよ…」

メルラン

「うん…。面と向かい合うスポーツで道具使わないとなると難しいわね」

タモリ

「力の差が激しいですからねえ」

メルラン

「運動会は？」

タモリ

「運動会！？」

メルラン

「“幻想郷一帯借り物レース”とか“弾幕障害除け競争”、玉入れならぬ“弾当て”ならいけるんじゃないかしら？」

タモリ

「あゝ、確かにそれなら……」

メルラン

「妖怪チームと妖怪以外のチームで紅白に分けてやったらいいと思うわ。その時はぜひとも盛り上げて見せるわよ！」

タモリ

「それいいかもしれませんがねえ」

メルラン

「ただ誰も乗らないんだよね……」

タモリ

「道は遠いようですねえ」

メルラン

「あとは…マーケティングなんてどうかしら？」

タモリ

「あ、それいいですねえ！」

メルラン

「ただメンバーがねえ…。私たちプリズムリバー三姉妹に、ミステイアに響子。これだと音色のバリエーションが少なく感じてねえ。少人数だし」

タモリ

「難しいものですねえ」

メルラン

「他にもメンバーになりそうな人探してみようかしら？地底のアイドルヤマメさん、ダンサーの衣玖さん…」

タモリ

「くくりが少しおかしい気がするけど…」

メルラン

「トライアングル担当の一輪さん」

タモリ

「あれ腕輪でしょ！…いい音鳴りそうだけど！」

メルラン

「人集め担当の小町さん」

タモリ

「銭投げて集める訳!？」

メルラン

「騒ぐのが好きそうな鬼二人も呼んでみようかしら？」

タモリ

「もはや百鬼夜行でしょ!!」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

メルラン

「うーん…どうしようかな？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

メルラン

「じゃあ…“トランペットで一曲吹ける人”にします」

タモリ

「では“トランペットで一曲吹ける人”スイッチオン！」

）

メルラン

「2人か〜」

タモリ

「残念でしたねえ〜」

メルラン

「でも嬉しいわねえ！来てよかった〜」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！！』

メルラン

「では、妹のリリカ・プリズムリバーを呼びます」

タモリ

「お、やはりそうきますか！」

ADさんがつながった電話をメルランに渡す

メルラン

「もしもしリリカ？」

リリカ

「ああ、姉さん」

メルラン

「今終わったわ。何してた？」

リリカ

「白玉楼でのミニライブが今終わったとこ」

メルラン

「そう。じゃあタモリさんに代わるから」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

リリカ

「もしもし、リリカです！」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

リリカ

「はい、空いてるわ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

リリカ

「いいとも〜！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

）

第四十四回・メルラン・プリズムリバー（後書き）

東方いいとも第四十四回、メルラン・プリズムリバー編いかがでしたか？

初っ端からハイにさせちゃいましたね。その空気が伝わればいいのですが…。

トランペット 応援 運動会といった話となりましたが、これは前に書こうと思いつ途中で断念したもののアレンジです。

妖怪と神とか、妖怪と幽霊ならまだしも人間は太刀打ちできるのか？そもそも短編ほどの長さに繋げられそうになくて止めたんですがね。

書きたいと思われる方がいたらどうぞ持って行って頂いて構いません。

次回はリリカです。次回も見てくださいかな？

第四十五回・リリカ・プリズムリバー

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはー！』

タモリ

「今日はキーボード奏者ですねえ」

『そうですねー！』

タモリ

「作者ももってるんですよ。キーボード」

『そうですねー！』

タモリ

「何が弾けるかって？今はホコリ被ってます」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回のメルラン・プリズムリバーさんの紹介で初登場、リリカ・プリズムリバーさんです！どうぞ」

）

拍手と共にリリカが登場！

『リリカ〜!!』

『可愛い〜!!』

リリカ

「ど〜も〜!!」

愛用のキーボードと共にリリカ登場!!

タモリ

「ど〜も〜。あ、それは？」

リリカ

「北海道札幌市の札幌スクールオブミュージック専門学校（SSM）と札幌放送芸術専門学校（SBA）で12/18に行われるパフェクト・アニソン教室 vol.1のポスターです！」

タモリ

「へえ…そんなイベントが？」

リリカ

「札幌の同人音楽サークルIOSYSが贈る、アニソン・メインのライブ・イベントです！」

タモリ

「そうですか〜。貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻楽団、白

玉楼、ルナサさん、メルランさんからも！」

リリカ

「え〜。花塚塚で共演した人達からなの？」

タモリ

「あのときはいっぱい出演しましたからねえ」

リリカ

「ん〜。ま、そんなものかな」

タモリ

「ははは…。最近はどうですか？」

リリカ

「そうねえ…。あいかわらずライブやったりしてるんだけど…」

タモリ

「あ、そうなんですか〜」

リリカ

「でも知名度がね〜。テーマ曲も人気少ないし」

タモリ

「成程ねえ」

リリカ

「だからCDデビューしたいな〜と思っまってね」

タモリ

「アーティストの仲間入りですか!？」

リリカ

「音楽ランキング100位以内に入りたいなあ…」

タモリ

「大きく出たねえ!」

リリカ

「でも今のままじゃねえ…」

タモリ

「あゝ」

リリカ

「だからCDと一緒にPVを作ってはどうかと思ってね」

タモリ

「プロモーションビデオを!?!じゃあ文さんが撮影?」

リリカ

「いや、あのブンヤは…。無駄にセクシーショット要求しそうですね」

タモリ

「信用ないなあ…」

リリカ

「だから現代文明をよく知る早苗さんにプロデュースを任せました」

タモリ

「そのほうがダメでしょ!？」

リリカ

「カメラマンがはたてさんです」

タモリ

「携帯で撮る気ですか!？動画撮影機能あつたっけ？」

リリカ

「シンセサイザーは鈴仙です」

タモリ

「出来るの!？」

リリカ

「でもライブスタジオがね〜。防音材になる建物が無いんですよ。音漏れするし騒音で周りが嫌がるし」

タモリ

「それは確かに……」

リリカ

「あのスキマ空間で収録させてくれないかなあ」

タモリ

「紫さんに頼むの!？」

リリカ

「もうアイデアは出来てるそうなんですよ〜」

タモリ

「PVの？」

リリカ

「なんでも早苗が幻想入りする少し前に流行っていた曲を元にする
そうで」

タモリ

「そうなんですか」

リリカ

「早苗いわく、ホントは永琳に登場して欲しかったそうなんです
がダメでした」

タモリ

「永琳さんを？」

リリカ

「宇宙にかかわる人だからそうです。あと霖之助にも出演依頼をし
たそうで」

タモリ

「へえ…」

リリカ

「男性キャラが欲しかったそうです。まあ断られたんですがね。仕
方ないから3人でダンスして収録することになりそうです。5人の
予定だったそうですが」

タモリ

「へえ…」

リリカ

「衣装も少し変えるそうですね。ルナサ姉さんが黄色のリボンつけたり私がメガネかけたり」

タモリ

「いろいろ変えるんですね」

リリカ

「でも一番驚いたのがルナサ姉さんにつけられた腕章だったなあ」

タモリ

「腕章？」

リリカ

「なぜか知らないけど“団長”って書かれていたわ」

タモリ

「何させる気ですかあの女子高生！！ハルヒは無理が有り過ぎる！」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

リリカ

「うくん…どうしようかな？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

リリカ

「じゃあ…“キーボードで一曲、東方の曲が弾ける人”にします。
ピアノ弾ける人は多いですからね」

タモリ

「では“キーボードで一曲、東方の曲が弾ける人”スイッチオン！」

）

リリカ

「あ、1人!!」

ADさんからストラップが渡される

タモリ

「あ、あの人だ!!」
手を挙げる女性を指さす。

リリカ

「ありがとうございます！来てよかった」

タモリ

「ちなみに何が弾けますか？」

『シンデレラゲージです』

リリカ

「やっぱり私のじゃ無かったか」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!!』

リリカ

「では、音楽つながりでミステリア・ローレライを呼びます」

タモリ

「お、夜雀さんですか！」

ADさんがつなげた電話をリリカに渡す

リリカ

「もしもし？」

ミステリア

「はい、もしもし」

ジュ〜！ジュ〜！

リリカ

「相変わらず繁盛してるよね」

ミスティア

「ちょうどピークだからね。うなぎ焼きながら見てたわ」

???

「ちょっと！次あなたなの!？」

リリカ

「え!?!誰?」

穰子

「穰子よ!!--秋が終わると鬱になるから早く出たいのよ!!--」

ミスティア

「お、落ち着いてください!いやごめん。いつまでたっても作者が穰子さん出さないからウチでやけ酒飲んでるのよ」

穰子

「余計な事を言うな!!--」

リリカ

「そ、そう。じゃあタモリさんに代わるから」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

ミスティア

「もしもし、ミスティアです!!--」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

ミスティア

「はい。明日は夕方から開店致します」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

ミスティア

「いいとも〜！」

タモリ

「はい、お待ちしてま〜す」

）

第四十五回・リリカ・プリズムリバー（後書き）

お久しぶりです。第四十五回・リリカ・プリズムリバー編いかがでしたか？

またリリカと関係が少ない話になったなあ…。幻想郷初のPVは上手くいくのでしょうか？乞うご期待（誰に？）

早苗をネタに出そうとして風神録を調べたら、風神録発売が2007年。ハルヒ一期放送が2006年だから早苗は知ってるかも？と思いましたが…。帽子外すとプリズムリバーと気づかれなくなるかも？

穰子は11月中には書きたいなあ。でも鬱の穰子ネタもいいのかも？

今回はミステリアです。次回も見てくれるかな？

第四十六回・ミステリア・ローレライ

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「お久しぶりですねえ」

『そうですね!』

タモリ

「今日は夜雀さんですねえ」

『そうですね!』

タモリ

「ウナギ屋やってるそうですねえ」

『そうですね!』

タモリ

「ウナギ…作者も少年時代に釣りに行きましたよ」

『そうですね!』

タモリ

「投げ釣りなんですよ。サオをこつ…ヒュッと投げて」

『そうですね!!』

タモリ

「力強すぎてサオが真っ二つに折れました。何やってんだか…」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回のリリカ・プリズムリバーさんの紹介で初登場、ミステリア・ローレイさんです!どうぞ」

）

拍手と共にミステリアが登場!

『みすちゅ!!』

『可愛い〜!!』

ミステリア

「ど〜も〜!はじめまして」

陽気に歌いつつミステリア登場!!

ミステリア

「テレフォンテレフォンショッキング」 今日のゲストは誰でしょう〜?」

タモリ

「ちょっと！ミステリアさんストップ！！みんな鳥目になっちゃうから！」

ミステリア

「その黒いメガネのせいじゃなくて？」

タモリ

「これは強い光を遮るだけです！！あ、それは？」

ミステリア

「毎年7月頃に宮城県仙台駅東口宮城野通りで行われる、夏祭り仙台すずめ踊りのポスターです！」

タモリ

「仙台ですずめ踊りですか？」

ミステリア

「踊りがえさを食べるすずめに似ていて、藩主の伊達政宗さんの家紋も“竹に雀”なのですずめ踊りだそうです」

タモリ

「そうなんですか。貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻楽団、文々。新聞、伊吹萃香さん、博霊神社、霧雨魔法店からも！」

ミステリア

「よく店にきますからね。ありがたいです。でも霊夢と魔理沙はツケが溜まってるのですけどね」

タモリ

「あの二人ですからね。しかし…ずいぶん繁盛しているようですね」

ミステイア

「ありがたいですねえ」

タモリ

「でもヤツメウナギって結構見た目グロテスクですよ…」

ミステイア

「そうですね。あの口がね。丸い口に歯がびっしり生えているんですよ」

タモリ

「調べてみてびっくりしましたよ…。噛まれたら痛そうですね」

ミステイア

「でもホントにビタミンAが豊富で、夜盲症やまうしやうにいいんですよ？」

タモリ

「夜盲症？」

ミステイア

「ビタミンA不足で起こる病気で、明るい所から暗い所に移動すると目が慣れるのに長く時間がかかる病気です」

タモリ

「へえ」

ミステイア

「だから疲れ目の人にはいいんですよ？弾幕ゲームのかた、ヤツメウナギの干物なんていかがですか？おやつ感覚で食べられますよ？」

タモリ

「ヤツメウナギ食べながら東方ですか！？風流というか凝ってるとうか…。永夜抄なら雰囲気出るかな？」

ミステイア

「あの図書館の魔女も食べたらどうかしら？」

タモリ

「パチュリーさんが？無理あるだろうなあ…」

ミステイア

「いやいや、西洋でも食べられていますよ？ヤツメウナギ」

タモリ

「え！？そうなんですか？」

ミステイア

「フランスでは“ヤツメウナギのポルドー風”なんてあるみたいですし。赤ワインで煮込んだ名物料理らしいです。紅魔館のメイドに聞いたんですがね」

タモリ

「意外だったなあ…。全く想像できない」

ミステイア

「でも幻想郷じゃ和風の料理がメインなんですけどね」

タモリ

「そうですねえ」

ミステイア

「それで、新しくお客を増やすために新メニューを考案中なんですけど」

タモリ

「新メニューを？」

ミステイア

「幻想郷にも人が増えたじゃないですか。女子高生に神、寺の尼さんに神霊…。その人たちにも受け入れられるヤツメウナギの料理を考案中なんです」

タモリ

「難しい話だなあ…」

ミステイア

「やはり食べづらい面があるみたいですよ。それさえ克服すれば、さらにお客さん増えると思うんですが…」

タモリ

「うーん。藍さんや咲夜さんに相談するとか？」

ミステイア

「どっちもなかなか会えないからなあ…。あ、タモリさん。この世

界で料理に詳しい人に聞いといてくださいよ!」

タモリ

「え?でも誰がいいかなあ?」

ミステイア

「あの番組なんてどうですか?」

タモリ

「何です?」

ミステイア

「キューピー3分クッキング」

タモリ

「ヤツメウナギのいい調理法なんて知らないでしょ!」

ミステイア

「取り上げてくれないかなあ?」

タモリ

「誰が参考にするんですか!見てもヤツメウナギ調理しようと思わないでしょ!」

ミステイア

「あとは歌を披露したいわね。のど自慢に出てみたいわ」

タモリ

「のど自慢ですか」

ミステイア

「幻想郷でやってくれないかしら?」

タモリ

「そこまでロケに行けませんよ…。大体、幻想郷の方々って何歌うんですか?」

ミステイア

「うーん、妖精なら童謡。古参妖怪は昔から伝わる歌や演歌みたいなものが多いかな?」

タモリ

「なるほどなあ…」

ミステイア

「あ、でも早苗はなんか違う感じの歌を口ずさんでいたわ」

タモリ

「お、どんな歌です?」

ミステイア

「カン リーロード」

タモリ

「似合いすぎでしょ…」

）

一目CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

ミステイア

「うん…どうしようかな？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

ミステイア

「じゃあ…。歌が好きなんで“カラオケで95点以上出したことがある人”にします」

タモリ

「では“カラオケで95点以上出したことがある人”スイッチオン！」

）

ミステイア

「あ、1人!!」

ADさんからストラップが渡される

タモリ

「あ、あの人だ!!」

手を挙げる女性を指さす。

ミステイア

「ありがとうございます!!」

タモリ

「95点!?!?すごいねえ」

ミステイア

「うちの屋台で共演しませんか?」

タモリ

「いやいや、それはダメでしょ……」

」

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい!」

『え〜!!!』

ミステイア

「では、前回約束した秋穰子さん呼びます」

タモリ

「お、なんとか11月に登場しますか!」

ADさんがつながった電話をミステイアに渡す

ミステイア

「もしもし?」

穰子

「はい、もしもし」

ミスティア

「お久しぶりです。何してました？」

穰子

「秋の収穫も終わった、田園風景を眺めていたわ」

ミスティア

「少しブルーになっていきますね…。じゃあタモリさんに代わるから」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

穰子

「もしもし、穰子です!」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

穰子

「はい!絶対行きます!何が何でも!」

タモリ

「ははは…。じゃあ、明日来てくれるかな？」

穰子

「いいとも〜！」

タモリ

「はい、お待ちしてま〜す」

）

第四十六回・ミステリア・ローレライ（後書き）

第四十六回、ミステリア・ローレライ編いかがでしたか？

ヤツメウナギをウィキペディアで見てもびっくりしました…。あれも
うエイリアンに近いんじゃないか？と驚きまくりです。

でも眼にはいいそうですよ？もしかすると鈴仙も目を良くするため
食べていたりして…

しかし、幻想郷ではどんな歌が歌われているんだろう？全く想像つ
きませんねえ。

次回はこの時を待ちに待ってた（と思う）穰子です！次回も見てく
れるかな？

第四十七回・秋穰子

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちはー！』

タモリ

「今日は秋の神様ですねえ」

『そうですねー！』

タモリ

「もう秋も終わりにかけてるんですがね」

『そうですねー！』

タモリ

「鬱になっていなければいいんだけど…」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回のミスティア・ローレライさんの紹介で初登場、秋穰子さんです！どうぞー」

）

拍手と共に穰子が登場！

『秋神様〜!!』

『可愛い〜!!』

穰子

「どうも〜!初めまして〜」

甘い香りとともに穰子登場!!

タモリ

「どうも初めまして〜。あ、それは?」

穰子

「はい、兵庫県高砂市の高砂神社で毎年10月10日と11日に行われている例大祭のポスターです!」

タモリ

「へえ…。高砂神社?」

穰子

「はい。そこで天禄の頃、疫病がはやったためスサノオノミコトとクシナダヒメを祀ったのが始まりです。年ごとの報恩感謝のお祭りです」

タモリ

「クシナダヒメ?」

穰子

「稲田姫様のことですね」

タモリ

「そうなんですか。貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻楽団、守谷神社、秋静葉さん、鍵山雛さん、人里の方々からも！」

穰子

「おお！ありがとうございます…って！花と一緒に農作物やお神酒が！？」

タモリ

「秋の神様だからお供え物が必要と考えたんでしょうな」

穰子

「何か祭壇みたいね…。でも本当にありがとうございます」

タモリ

「最近はどうですか？」

穰子

「いや。最近冷えてきて…。少しブルーになりつつありました」

タモリ

「冬になると鬱になりますからねえ」

穰子

「稲刈りの終わった田んぼ見てると物哀しくなるのよねえ」

タモリ

「まあ確かにそうですね」

穰子

「あと一週間出演が遅かったら大変だったわよ。トークショーなんてとてもとても…」

タモリ

「危なかったですねえ」

穰子

「それで、最近なんですけど…」

タモリ

「はい」

穰子

「静葉が秋の紅葉キャンペーン始めたんですよ」

タモリ

「ええー!?!」

穰子

「もうすぐ終わりだけどね。最適な紅葉スポットに静葉自身が連れて行ってくれるツアーなんですよ。人里のカップルに人気なんです」

タモリ

「へえ」

穰子

「それで、私も負けてられないな」と思いまして。もっと農業が広

まるようにお店を始めたんですよ」

タモリ

「何のお店ですか？」

穰子

「秋の物産展です。秋限定で経営している、秋の味覚をまとめた店ですよ」

タモリ

「かなり身近な神様だなあ。神様自らお店開くんですか…。一押しの商品はなんですか？」

穰子

「おススメは“穰子手作りスイートポテト”ですね」

タモリ

「作れるんだ!？」

穰子

「早苗さんに習って作ってみました。豊穰を司る能力で一番旬なさつまいもを贅沢に使い、一つ一つ丁寧に作り上げた一品です。お一つどうですか？」

そっつい、ハンドバックからスイートポテトを取り出す。

タモリ

「あ、どうもありがとうございます。いい香りですねえ。うん、ほんのり甘くて食べたくなります」

穰子

「ありがとうございます。これが人気なんですよ。お土産に人気でして」

タモリ

「いいですねえ。子供からお年寄りまで好かれる味でしょう」

穰子

「他には…“収穫したてのぶどうパン”、“妖怪の山のしいたけの甘露煮”、“河童が釣ったアユの塩漬け”などなど…」

タモリ

「にとりが釣ったの!？」

穰子

「穴場を知っているそうです。数量限定なのでお早めに!」

タモリ

「いろいろ考えるねえ…」

穰子

「ゆくゆくは飲食コーナーをしたいな」と思っています」

タモリ

「そうなんですか？」

穰子

「旬のものをその場で調理してお出しするんです」

タモリ

「いいですねえ。ぜひ行ってみたいです」

穰子

「ただ、海がないからメニューが少し偏りがちなですよ。魚が無いのがつらい…」

タモリ

「あゝなるほど」

穰子

「ご飯ものや野菜なら結構いけるんですけどね。栗ご飯にキノコご飯、炒り银杏に里芋の煮っ転がし、松茸の土瓶蒸し…」

タモリ

「松茸あるんだ!？」

穰子

「妖怪の山秘伝のスポットがあるんですよ。神や一部の妖怪しか知らない場所にあるんです」

タモリ

「すごいな。でも一人で出来ないでしょう?」

穰子

「妖怪や人里のいろんなお店に協力してもらって、みんなで秋を盛り上げようというわけです。農産物の直売所コーナーもありますよ?」

タモリ

「直売所あるんだ!？」

穰子

「ありがたいことに寅丸星さんがその御ひいきになって頂いて。話題が広まってくれたんですよ」

タモリ

「招き猫ならぬ招き虎ですか…。縁起いいですねえ。より多くお金が入ってきそう」

穰子

「そう思ってアリスさんに“開運！招き虎ぬいぐるみ”を発注しました。近日私の店で販売します！」

タモリ

「商魂たくましいな！」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

穰子

「うーん…どうしようかしら？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

穰子

「じゃあ… “干し柿を家で作っている人” にします」

タモリ

「では“干し柿を家で作っている人” スイッチオン！」

）

穰子

「あ、1人!!」

ADさんからストラップが渡される

タモリ

「あ、あの人だ!!」

手を挙げる女性を指さす。

穰子

「ありがとうございます！やった！お姉ちゃん取れなかったから良かった」

タモリ

「良かったですねえ」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!!』

穰子

「では、同じく神様の洩矢諏訪子さん呼びます」

『おお〜！』

タモリ

「お、神様つながりですか！」

ADさんがつながった電話を穰子に渡す

穰子

「もしもし？」

諏訪子

「はい、もしもし〜」

穰子

「ご無沙汰しています。今、何されていました？」

諏訪子

「祈祷が終わって、いま丁度お昼ご飯。いや美味しいわ〜このしいたけの甘露煮。この前もらったスイートポテトも美味しかったよ」

穰子

「どうもありがとうございます！ではタモリさんに代わります」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

諏訪子

「もしもし、諏訪子です！」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

諏訪子

「はい。大丈夫だよ」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

諏訪子

「いいとも〜！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

）

第四十七回・秋穰子（後書き）

第四十七回、秋穰子編いかがでしたか？

PPPの話は書いててボロが出そうなんで、穰子様が店を開くという話にしました。なんか無性にスイートポテト食べたくなってきた…でも店がない。

妖怪の山は自然の宝庫だろうから、秋の味覚が満載なんだろうな。文とかにとりはこっそり良いものいっぱい食べてたりして。

いつそ文はグルメ雑誌書いたほうがいいんじゃないかなあ？“特集！藍さん直伝、旬の山菜稲荷寿司”とかのほうが興味がわくと思うのは私だけ？

招き猫ならぬ招き虎とかあったら即買いしますね。ご利益ありそうで衝動買いしそう…。橙やお燐の招き猫もいいけどね。

実際に星が出入りする店があったら、買う気なくても店に入るでしょうね。「何買っているんだろ〜」ってこっそり後からつけると思っています。

次回は洩矢諏訪子です。祟り神様は何を語るのか？次回をお楽しみに！

第四十八回・洩矢諏訪子

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日も神様ですねえ」

『そうですね!!』

タモリ

「しかも祟り神ですねえ」

『そうですね!!』

タモリ

「コメント気をつけないとな。鉄の輪飛んできたりして」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回の秋穰子さんの紹介で初登場、洩矢諏訪子さんです!どうぞ」

）

拍手と共に諏訪子が登場!

『ケロちゃ〜ん〜!!』

『可愛い〜!!』

諏訪子

「どうも初めまして!…って、神がこんな登場でいいの!?!?」
慣れない事態に困惑しながら諏訪子が席に着く。

タモリ

「どうも初めまして。あ、それは?」

諏訪子

「ふっふっふ。よくぞ聞いてくれました。神奈子登場の時からずっと
と言いたかったお祭り、長野県は諏訪郡、諏訪大社の御柱祭のポス
ターです!?!」

タモリ

「やはりそうきますか〜。たしか神社に立てている柱を新しい木に
変えるんですよね?」

諏訪子

「そうそう。信州・諏訪大社では七年に一度、寅年と申年に一度宝
殿を新築し、社殿の四隅にあるモミの大木を建て替える祭りのこと
よ」

タモリ

「え?じゃあ次の御柱祭はいつ?」

諏訪子

「去年やったから…次は平成29年ね」

タモリ

「へえ〜。その頃には早苗さん成人していますね」

諏訪子

「それは言っちゃダメだよ。晴れ着姿の早苗見たいけどさあ」

タモリ

「おっと。そうでしたねえ」

諏訪子

「祭りでは、重さ10トンを超える巨木を山から切り出し、人力のみで各神社までの道中を曳いて、最後に社殿を囲むように四隅に建てます」

タモリ

「すごいな〜」

諏訪子

「柱を山から里へ引く「山出し」が4月に、神社まで運び御柱を各社殿四隅に建てる「里曳き」が5月に、上社・下社それぞれで行われます」

タモリ

「ちょっと待った、そんな柱運べるの!?道の曲がり角とかでつかえるんじゃない?」

諏訪子

「運ぶの!それが祭り。御柱祭のある年の秋には、諏訪地方の各地

区にある神社（小宮）でも御柱祭が行われるから一年中盛り上がるよ！」

タモリ

「すごいですね〜。東方いいともで一番長いイベント解説だったと思います。貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね〜。ZUNさんに上海アリス幻樂團、守矢神社、秋姉妹、妖怪の山一同、鍵山雛さんからも！」

諏訪子

「へえ〜。結構来たもんだねえ〜。いやいや、結構信仰出来てきたね」

タモリ

「信仰でできましたねえ」

諏訪子

「ただねえ、神奈子の信仰の方が多いんだよなあ。全く」

タモリ

「まあまあ…。根に持つのはわかりますが」

諏訪子

「いやねえ、見た目からして私を神様と違っていない人が多くてさあ」

タモリ

「ははは…。知らない人からすればそうでしょうねえ」

諏訪子

「どうしたもののか。村人の目の前で大ガマでも口寄せしてみようかなあ？」

タモリ

「神様というより忍者みたいですねえ!？」

諏訪子

「でも悲想天則のおかげで私も神と認識されたようね。少しずつ献上品やお賽銭も増えてきたみたいだし」

タモリ

「よかったですねえ」

諏訪子

「だんだん昔の力を取り戻してきてるね。いやほんと移り住んで良かった」

タモリ

「え？昔の力？」

諏訪子

「だって神様は人々の信仰心が力の源なんだよ？信仰心が高まれば出せる神徳も上がるでしょ？」

タモリ

「となると昔は相当すごかったんでしょうねえ」

諏訪子

「そりゃあもつ…。東日本のほとんどが私のものと言っても過言じゃないんだから！」

タモリ

「そうなんですか!？」

諏訪子

「そりゃあそうさ。ミシャグジ様率いているんだから」

タモリ

「なら太古の昔にあった諏訪大戦は壮絶だったでしょうなあ」

諏訪子

「すごかったなあ…。あの時は神奈子も全盛期の力を持っていたからねえ」

タモリ

「神同士の戦い…。もはや悟空対ベジータのレベルですかね？」

諏訪子

「どんな例え!?!でもだいたい合ってるかも」

タモリ

「ええ!？」

諏訪子

「神奈子が歩けば嵐が巻き起こり、海に行けば水面に道ができ…」

タモリ

「すごいな神奈子様!？」

諏訪子

「私がうなれば大地が割れ、周りの木々は枯れ果て…」

タモリ

「おお〜！」

諏訪子

「三日三晩にも及ぶ歴史的な戦いだっただわね。流れ弾が日本中に飛んで被害が出たわ」

タモリ

「うわあ…。大きな被害だったでしょうねえ」

諏訪子

「神奈子の御柱で大地がえぐれ、私の鉄の輪で山一つが斬られて平地になり…。いや大きな被害だったわ。地形が相当変わったし」

タモリ

「考えただけでも恐ろしいな！」

諏訪子

「それで静岡と愛知の海岸線がぐにゃぐにゃに曲がっちゃったし」

タモリ

「いや嘘でしょ！…それは無い！…！」

諏訪子

「岩手と宮城の海岸線もギザギザにしちゃったし」

タモリ

「あれはリアス式海岸！谷が沈んで出来たんでしょ！」

諏訪子

「滋賀県にも流れ弾が飛んで大穴があいたのよねえ。今は湖になつてゐるんですけど」

タモリ

「なんで琵琶湖自分が作ったみたいなの！脚色しすぎでしょ！」

諏訪子

「新潟の佐渡島も“S”みたいな形に変えちゃったし」

タモリ

「マミゾウさんに謝ってきなさい！！」

諏訪子

「四国と北海道も本州から離れちゃったし」

タモリ

「嘘にも程があるでしょ！」

諏訪子

「あら？ばれた？神話だし多少の脚色は有りかなあと思って」

タモリ

「めちやくちやな神様だなあ……」

）

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

諏訪子

「あーうー。どうしようかな？」

タモリ

「頑張ってください。伺いますか？」

諏訪子

「じゃあ…“長野の御柱祭を実際に見たことがある人”にします」

タモリ

「え？」

諏訪子

「？」

タモリ

「それ…神奈子様がもう言っちゃいましたよ？」

諏訪子

「何っ！ーくうう。ならば“御柱祭で御柱を曳ひいたことある人”でお願い！」

タモリ

「あの柱を引っ張ったことある人ってことですね？では“御柱祭で

御柱を曳ひいたことある人”スイッチオン!”

）

諏訪子

「あ、1人!!」

ADさんからストラップが渡される

タモリ

「あ、あの人だ!!」

手を挙げる男性を指さす。

諏訪子

「やった!神奈子が取れなかったストラップ取った!ありがとう!」
「ございます!」

タモリ

「良かったですね!」

諏訪子

「よしよし!お前さんにゃあ極上の神徳を与えよう!」

タモリ

「ずいぶんな大盤振る舞いですねえ」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい!」

『え〜!!』

諏訪子

「それじゃあ、うちの東風谷早苗を呼びます」

タモリ

「お、人間最後のキャラが登場しますか！」

ADさんがつながった電話を諏訪子に渡す

諏訪子

「もしもし？」

早苗

「はい、もしもし」

諏訪子

「おお早苗。見てた？」

早苗

「見てましたよ…。はあ、全く何を言っているんですか！テレビの前で大嘘つかないでください！」

諏訪子

「まあまあ、神話にはインパクトも必要だよ？じゃあタモリさんに代わるから」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

早苗

「もしもし、早苗です！」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

早苗

「はい。大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

早苗

「いいとも〜！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

）

第四十八回・洩矢諏訪子（後書き）

第四十八回、洩矢諏訪子編いかがでしたか？

神話をオーバーに話すというネタでした。実際そうなら神様は永遠に廃れなかっただろうなあ…。

神様キャラには毎回苦戦しております。信心がないとネタに困りますね。初詣以外に神社行かないからなあ。

ちなみに私は佐賀の祐徳稲荷神社に毎年行っております。

さて、次回は早苗さんです。次回も見えてくれるかな？

告知！！

いいとも第50回の次の回に「50回記念いいとも増刊号」と称した話を書きます。

内容はその時のお楽しみということで。気長にお待ちください。年内には投稿したいと思います。

第四十九回・東風谷早苗

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日は現人神さんですねえ」

『そうですね!!』

タモリ

「人間なのに神様なんですよね」

『そうですね!!』

タモリ

「お供え物とかいるかなあ?でも生きてる人にお供え物っていいのかなあ?悩むな」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回の洩矢諏訪子さんの紹介で初登場、東風谷早苗さんです!どうぞ」

）

拍手と共に早苗が登場！

『早苗ちゃん〜！〜！』

『可愛い〜！〜！』

早苗

「どうもありがとうございます〜！〜！わ〜！〜！す〜！〜！いい〜！いいともだ〜！〜！」

テレビ出演にテンションが最高潮になっている早苗。

タモリ

「相当盛り上がってますねえ！」

早苗

「いやだっていいともですよ！〜？いいともに出演ですよ？〜？すごいな〜。高校のみんな見てるかな〜」

タモリ

「見てるといいですねえ。あ、それは？」

早苗

「はい。長野県は諏訪郡、諏訪大社の上社で4月15日に行われる御頭祭のポスターです〜！」

タモリ

「前回と同じく諏訪大社のお祭りですか〜。御頭祭とは？」

早苗

「豊穰祈願として前宮へ神輿行列が練り歩くお祭りです。鹿肉や鳥

獣魚が奉納されます」

タモリ

「へえ」

早苗

「今ははく製ですが、古くは鹿の頭も奉納していたそうですよ？」

タモリ

「ワイルドなもの好むんだなあ」

早苗

「その鹿の頭の中には必ず耳の裂けた鹿がいて、諏訪大社七不思議のひとつに数えられています」

タモリ

「諏訪大社七不思議！？なんか神々しいような話だなあ！」

早苗

「いやいや。科学的に実証された話もありますよ？御神渡りとか」

タモリ

「それ言っちゃっていいんですか？現代的な巫女さんだなあ。貼つといてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻楽団、守矢神社、秋姉妹、妖怪の山一同、鍵山雛さん、博霊神社、霧雨魔法店、白玉楼からも！」

早苗

「うわ〜！ありがとうございます！こんなにたくさん…」

タモリ

「すごいですねえ」

早苗

「持って帰って神社に飾りましょう。私たちの威光を示すのにちょうどいいし」

タモリ

「そういう考えですか！？いやすごいな〜。最近はどうですか？」

早苗

「いや私もだいぶ妖怪退治に慣れましたね。マミゾウさんも倒したし」

タモリ

「だいぶ板に付きましたねえ。風神録、地霊殿、星輦船、非想天則、神霊廟に出演しましたし」

早苗

「でも幻想教に来た時は色々困惑しましたね〜」

タモリ

「そうですねえ。女子高生が江戸時代にタイムスリップしたよ
うなものですし」

早苗

「だから料理にも苦勞しましたよ。かまどなんて初めて見ましたし」

タモリ

「社会科学見学とかで見る以外に、かまどと関わることはないからなあ」

早苗

「神奈子様や諏訪子様に習ったんですが、二人とも料理するの久しぶりだったからつる覚えで…」

タモリ

「成程なあ」

早苗

「現代文明っていいな」とつくづく思いましたよ。まあ慣れてしまえばそんなに苦に思わないのですが」

タモリ

「じゃあ今はかまどや七輪とかを使いこなせているんだ？」

早苗

「まあ人並みですけどね。さすがに幻想郷の人にはかないませんよ。でもご飯ってかまどで炊くと美味しいんですね！驚きました」

タモリ

「そのとき初めて釜で炊いたご飯食べたんだ？そうだろうな。今はどこも電気ジャーだしなあ」

早苗

「お焦げも幻想郷で初めて食べましたし。あれ食べたらコンビニのおにぎりには戻れないなあ」

タモリ

「その点では良かったですねえ。妖怪退治も順調だし、波に乗ってますねえ」

早苗

「ええ！そのうち鬼でも倒してやりますよ！」

タモリ

「ちよつと！エライこと言っちゃったよ！止めときなさいって！萃香さんや勇儀さんが守矢神社に攻め込んできたらどうすんの！？」

早苗

「勇儀さん？」

タモリ

「地獄の旧都に住んでる鬼ですよ。通称“力の勇儀” 好戦的だからあおるのは止めときましよう」

早苗

「大丈夫！勝てぬものなどあんまりない！」

タモリ

「ストップ！それ妖夢さんの名セリフ！“斬れぬものなどあんまりない”でしょ！」

早苗

「え、そうなんですか？」

タモリ

「知らなかったの！？奇跡の妖夢アレンジ出来ちゃったんだ？」

早苗

「現人神ですからねえ」

タモリ

「いや絶対偶然でしょ！ドヤ顔しないで下さい」

早苗

「まあ悪さしないなら戦う名目がないんですけどね」

タモリ

「あなたの場合大した名目もなく戦ってませんか！？尼さんとか毘沙門天の代理とか、拳句の果てに伝説の僧侶まで倒しちゃったし」

早苗

「いやだって霊夢さんや魔理沙さんも倒しているでしょう？私も妖怪退治してもいいでしょうにー！」

タモリ

「いやまあそうですね…」

早苗

「それに…楽しいし」

タモリ

「ちょっと早苗さん！？幻想入りしてから常識失いすぎでしょー！」

早苗

「向こうは常識にとられない世界ですよ？常識失っているのは霊夢さんや魔理沙さんの方が上ですって」

タモリ

「……確かにそうだなあ。妖怪がたむろする神社の巫女と、泥棒の魔法使いだからなあ。こんないいかげんな主人公まずいないでしょうね」

早苗

「でも少しやりすぎたようで、白蓮さんと戦った後に色々と言法受けましたね」

タモリ

「白蓮さんから？それはすごいなあ……」

早苗

「流石に僧侶なだけありますからねえ。話しがうまいんですよ。それになんというか…オーラといいますか、そんなのがあるんですよねえ」

タモリ

「そうでしょうねえ」

早苗

「あのオーラ出すのはまだまだまだ時間かかりそうですねえ」

タモリ

「そりゃあそうですねえ。芸能人でもなかなか出せませんよ？」

早苗

「今度登場するときは、バックに何か背負おうかしら？白蓮さんの背中であつた、黄金のアレつけたらオーラ出るかな？」

タモリ

「いや痛すぎるでしょ！それこそみんなから“南無三”とか言われますよ！」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

早苗

「うーん。どうしようかな？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

早苗

「じゃあ…“巫女服を着たことがある人”にします」

タモリ

「コスプレは有りですか？」

早苗

「それ入るとまずいかなあ？コスプレは無しでお願いします」

タモリ

「では“巫女服を着たことがある人”スイッチオン！」

）

早苗

「あゝ、0人か…」

タモリ

「あゝ、残念でしたねえ！」

早苗

「コスプレ有りだったら？」

タモリ

「やってみます？ではコスプレ有りですスイッチオン！」

早苗

「あ！一人！アリにしとけば良かったゝ」

タモリ

「残念でしたねえ…」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『えゝ！！』

早苗

「それじゃあ、命蓮寺の聖白蓮さん呼びます」

タモリ

「おお！命蓮寺メンバーいきますか！」

ADさんがつながった電話を早苗に渡す

早苗

「もしもし？」

白蓮

「はい、もしもし」

早苗

「どうも。今何されてました？」

白蓮

「ちょうど説法が終わったところです。あなたもまたいかがかしら
？」

早苗

「そうですね、近いうちにまた聞きたいです。ではタモリさんに代
わりますね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

白蓮

「もしもし、聖白蓮と申します」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

白蓮

「明日のお昼ですか？はい、大丈夫です」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

白蓮

「いいともー！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

）

第四十九回・東風谷早苗（後書き）

第四十九回、東風谷早苗編いかがでしたか？

イベント紹介に苦戦しましたが、書き始めるとけっこうすんなり書けましたね。

早苗はぶつとんだ発言しているけど、よくよく考えるとみんな常識にとらわれていないんじゃないかなあ？常識の外に幻想郷はあるんだし。

元から早苗はおかしいのか？幻想郷で毒されてしまったのか？

私が初めてプレイした東方シリーズが星輦船なので、白蓮さんには強い思い入れがあります。あときは何もわからないままプレイしてたな。

星輦船の時に、白蓮さんがスペカ2枚目か3枚目の後に背中に、黄金のアレを背負いますよね？あれ嫌だったなあ…

後ろから飛んでくる弾を上手く避けられないんです。いつもマスパで押し切っていました。

今回は記念すべき50回目！節目を飾るのは白蓮さんです。次回も見えてくれるかな？

第五十回・聖白蓮

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「今日はクリスマススイブですね」

『そうですね!』

タモリ

「この日に五十回目を迎えました。嬉しいですねえ」

『そうですね!』

タモリ

「……服からして、今日は白蓮さんよりフランドールさんと呼ぶべきだったかなあ?」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回の東風谷早苗さんの紹介で初登場、聖白蓮さんです!どござい」

）

拍手と共に白蓮が登場！

『白蓮様〜!!』

『ひじり〜ん〜!!』

白蓮

「どうもはじめまして。聖白蓮と申します」
丁寧にお辞儀をして白蓮登場!!

タモリ

「どうも初めまして!あ、それは?」

白蓮

「はい。鳥取県三朝町にある、三徳山三仏寺の除夜の鐘のポスターです」

タモリ

「あと一週間で大晦日ですからねえ。大人も子供も鐘を突くんでしよう」

白蓮

「いえいえ、ここには子供は行けませんよ。日本一危険な除夜の鐘といわれるほどですから」

タモリ

「え!?!そんなんですか?」

白蓮

「はい。本堂には鐘がなく、標高約490メートルの山腹にある鐘

楼堂まで1時間かけて登っていくんです」

タモリ

「そりゃ大変だろうなあ…。雪も降るだろうし、暗闇の中登山するのさ」

白蓮

「ですから18歳以上でないのだめなんです。夏場には滑落死亡事故もありますし。除夜の鐘では事故は無いそうですが」

タモリ

「でもそれだけ苦労して鐘突いたら、一年の厄も払い落せそうだなあ…。貼っついてちょうだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻樂團、命蓮寺、守矢神社、人里一同、博霊神社からも！」

白蓮

「うわ〜！ありがとうございます！こんなにたくさん…」

タモリ

「すごいですねえ」

白蓮

「お堂に飾りましょう。新年を迎えるのに丁度いいわ」

タモリ

「はっはっは。最近はどうですか？」

白蓮

「そうですね。封印から解放されて、今はみんなと楽しくやっております。昔と違って妖怪と人間にも隔たりがなくなりましたし」

タモリ

「博霊の巫女さんが全部解決してくれましたしねえ」

白蓮

「今はこの時代に馴染むことの方が大変ですね」

タモリ

「時代の差がありますか？」

白蓮

「そうですね。文明の発達を感じます。特にあの新聞記者さんが持つてるカメラには驚きましたよ」

タモリ

「見たことない人には衝撃だったでしょうね」

白蓮

「あれどうやって紙に絵を描いてるんでしょうね。中に絵のうまい妖精が何人もいるのかしら？」

タモリ

「それはちょっと違いますね。あ、ちょっと難しい説明になりますね。…どうやって説明すればいいんだか」

白蓮

「人に聞いても教えてくれないんですよね。寺のみんなもわからない」

いし、この前魔理沙に聞いたら何故か笑われましたし」

タモリ

「聞いたんですか！？大口開けて笑ったでしょうねえ」

白蓮

「私何かおかしなこと言ったかしら？」

タモリ

「うーん、うまい説明が思いつかない…」

白蓮

「まあ写すのは構いませんが、でも隠れて撮るのは止めてほしいですね。取材でしたら受けますが、隠れていると少し怖いです」

タモリ

「突然現れてきますからねえ」

白蓮

「ただ最近、その文さんから“文々。新聞に聖さんのコーナーを作りたい”と言われたんです」

タモリ

「え？そうなんですか？」

白蓮

「聖白蓮の今日の法話、というタイトルで毎号連載したいと頼まれました」

タモリ

「それ面白そうですね!」

白蓮

「ですがお断りしました。法話はやはり直に話してこそ意味のあるものかと感じまして」

タモリ

「それもそうですね……」

白蓮

「気の荒い妖怪でも、話せばわかる方もいらっしやいますし。話すつて大切ですよ」

タモリ

「そうですね。でも、風見幽香さんに説法は通用するでしょうかね?」

白蓮

「通じますよ。花を愛でる方に悪い人はいません」

タモリ

「あの人は花以外に愛でないんだけどなあ」

白蓮

「あとはそうですね…新年の準備に追われていますね。大掃除とか、しめ縄や門松作りとか。お屠蘇や鏡餅も買わないといけないし」

タモリ

「本格的ですね!」

白蓮

「今からやつておかないと大変なんですよ。私に星にムラサに一輪、雲山に小傘ちゃんにナズーリンに響子ちゃんの8人ですから」

タモリ

「小傘ちゃん手伝つてくれるんですか？」

白蓮

「お雑煮とおせち料理出すといたら喜んで引き受けてくれました」

タモリ

「それなら引き受けるでしょうね。あれ？ぬえさん手伝わらないんですか!？」

白蓮

「それがどこにもいないんですよ。どうも紅魔館のほうで宴会やるようだから、こっそり遊びに行っちゃったみたいで」

タモリ

「成程なあ、紅魔館は今頃クリスマスパーティーの準備に追われているでしょうねえ」

白蓮

「正月までには帰ってきてほしいんですけどねえ」

タモリ

「ぬえさんにしか頼めない仕事でもあるんですか？」

白蓮

「だって、能力からして上手そうでしょうっ」

タモリ

「何がです？正体不明の能力で？」

白蓮

「絶対上手よ！獅子舞ししまの役」

タモリ

「それは関係ないと思いますよ！？」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方1000人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

白蓮

「うーん。どうしようかしら？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

白蓮

「じゃあ…“今年除夜の鐘を突きに行く人”にします」

タモリ

「では“今年除夜の鐘を突きに行く人”スイッチオン！」

）

白蓮

「あ、3人ですか」

タモリ

「結構いらっしやいますね」

白蓮

「故郷のお寺で突くんでしょうかね。よいお年を！」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜!!』

早苗

「それじゃあ、命蓮寺の村沙水蜜を呼びます」

タモリ

「おお、船長ですか！」

ADさんがつながった電話を白蓮に渡す

白蓮

「もしもし？」

ムラサ

「あ、もしもし?」

白蓮

「今なにしてみました?」

ムラサ

「みんなで放送見てました。いや新鮮な気分でしたよ。聖がTV出演だなんて…」

白蓮

「ふふっ、意外だったかしら?ではタモリさんに代わるわね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

ムラサ

「もしもし、村沙水蜜です!」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか?」

ムラサ

「はい、大丈夫です!」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな?」

ムラサ

「いいとも〜！」

タモリ

「はい、お待ちしてま〜す」

）

第五十回：聖白蓮（後書き）

第五十回、聖白蓮編いかがでしたか？

年末ネタ放り込んだらすんなり書けましたね。寺を8人で掃除するんだから大変だろうなあ…。

ふと白蓮や星が割烹着かっぽりぎで掃除するシーン想像したらにやけてきました。あの雰囲気ふんいきで割烹着なら似合いますよね。

皆さんはクリスマススイブ、いかがお過ごしでしょうか？私は忘年会でもうすでに燃え尽きました。

今はこたつでまったりと小説を書いたり勉強しております。

年明けからはテストで更新が難しいです。亀更新となりますがご容赦ください。

しばらくは命蓮寺メンバーで行きたいと思います。ムラサが出演するのはまだ先になるでしょう。

さて、以前から申ししていた“いいとも増刊号”ですが、明日の正午に更新いたします。

どうぞご期待ください。次回も見てくれるかな？

第五十回特別記念・いいとも増刊号

文
「はい！メリークリスマス！清く正しい伝統のブン屋、射命丸文です！今日の、東方いいとも50回を記念した増刊号のリポーターをさせていただきます！

この増刊号では、これまでのいいともでストラップを獲得した方々が、その後ストラップをどう使っているのか取材します！
初めてのリポーターで少し緊張しますねえ。リポーターだからカメラ撮影いらないし。逆にカメラ向けられているんですよ。ねえ椀？」

椀
「どうも。今回は番組形式ということでカメラマン任せられた犬走椀です。ろくに映らないで、声のみ出演の私よりかもしれませんけど？」

文
「いやいや。私も普段と違うことだらけで大変ですよ？マイク握らされてるし、さっきからずっとカメラ向けられて変な気分なんですよ」

椀
「じゃあ文さんもすこし取材を控えたらどうですか？“人のふり見てわがふり直せ”でしょう？」

文
「いやいや、私はカメラ撮影のみ。一瞬を切り取るだけですよ。動

画は取っていませんし」

椀

「調子のいいこと言っちゃって…」

文

「それでは早速行ってみましょうー！」

（白玉楼）

文

「こんにちは」

妖夢

「あれ？天狗が冥界に何の用？この間の神霊騒ぎに幽々子様は関わっていないわよ？」

文

「あややや。そうじゃありません。あの、ストラップどつとれました？」

妖夢

「ああ、あのタモリさんのストラップのことね。あれなら…」

文

「剣の柄に付けてあるとか？」

妖夢

「しませんよ！似合うわけじゃないじゃないですか！財布の根付けとして使っているのです」

文

「根付けに？」

妖夢

「落とさないよう付けているのです。丁度よくて助かります」

文

「へえ。見せてもらえます？」

妖夢

「いいですよ。ほら」

文

「深緑の長財布ですか。ストラップがつくと和風の財布も急に現代的になりますねえ」

妖夢

「でも中身は空に近いんですけどね…」

文

「あやややや。頑張ってください。それでは」

椀

「幽々子様からお年玉が出るといいですね。よいお年を」

く紅魔館く

椀

「クリスマスモード全開ですねえ。全部真っ赤」

文

「いやいつでも真っ赤ですよ！では、早速潜入したいと思います」

レミリア

「もうすでに見つかっているのなら、それは潜入と呼べなくてよ？」

文

「うわあ！気づいてたんですか？」

レミリア

「私を誰だと思って？運命を操るレミリア・スカーレットよ？」

文

「いきなりカリスマあふれ出してきましたねえ…。それでは早速、ストラップどうされました？」

レミリア

「ああ、あれね。日傘に付けているわ」

文

「日傘に？」

レミリア

「ええ。妹の日傘と間違わないよう付けているわ。似た傘だからややこしくて…」

文

「とか言っちゃって、さりげなく自慢してません？」

レミリア

「そんなことないわよ。それに少し邪魔だしね」

文

「なら外せばいいじゃないですか」

レミリア

「それは…その、あれよ。今更外すと、かえって違和感があるじゃない？それだから仕方なくはめているのよ」
「しつこい質問攻めに少したじろぐレミリア。」

文

「本当ですかねえ？目線が少し泳いでいますよ？」

咲夜

「失礼いたします。お嬢様、紅茶が入りましたわ」

レミリア

「丁度いいわ。咲夜、この口うるさいカラス片づけて頂戴」

咲夜

「かしこまりました」

文

「丁度良かった！咲夜さん。あなたもストラップもらいましたよね？何に使っていますか？」

咲夜

「私？そうねえ…。愛用の懐中時計に付けているわ」

文

「え？懐中時計に？」

咲夜

「人から聞いたんだけど、ストラップつてものはよく使う物につける飾りなんでしょう？だから懐中時計に付けたのよ」

文

「懐中時計ですか。うーん、少しイメージと違いますねえ？瀟洒なメイドが時計にストラップ？」

咲夜

「何だっていいじゃない。じゃ、私は仕事をさせてもらっわ」

文

「ええ、頑張ってください」

咲夜

「それでは遠慮なく。“奇術”エターナルミーク！！」

椀

「仕事ってそれ！？わあああ！」

文

「あややや。これにて失敬しましょう」

く霧の湖く

椀

「はあ……はあ……。ひどい目にあいましたねえ。どうやってあんなた
くさんのナイフ投げているんだか。時を止めても普通に無理でしょ
うに……」

文

「シッ！いましたよ！」

椀

「え？」

文

「どうも……。お久しぶりです」

レティ

「あら？天狗が二人で何の用？」

文

「唐突ですが、ストラップどうされました？」

レティ

「あゝ、あれね。ほら、胸の飾りに付けているわよ」

文

「え？ああ本当ですね。先ほどまで服に隠れていましたが」

レティ

「二ついつのもアリかなあとと思ってね」

文

「新しい発想ですねえ。服につけるとは」

レティ

「気分一新、今年も寒波を巻き起こすわよー！ホワイトクリスマスにしてあげるわ！」

椀

「ほどほどにしてやってください…。コタツから出れなくなるんですから」

レティ

「あら？犬は喜び庭駆け回るんでしょう？」

椀

「童謡の中だけですって…」

「人間の里、寺子屋」

文

「失礼します」

慧音

「お。文に椀か。まあ上がりなよ」

文

「いえ、時間は取らせません。あの、ストラップどうされました？」

慧音

「ああ、あれか。しおり代わりに付けているよ」

文

「しおりに!？」

慧音

「いやあ…付けようと思ったんだが、教師として目立つところには付けられないし。それで、歴史書を読むときにしおりが無かったのでな」

文

「歴史書のしおりがストラップですか」

慧音

「初めは違和感があったが、慣れてくると読書に欠かせないものになったよ。小さなことだが、これも一つの歴史の幕開けなのかもな」

文

「寺子屋でブームになるかもしれないねえ。しおりにストラップ」

椀

「それはないと思いますけど…」

く 永遠亭く

文

「失礼します。どうもこんにちは」

鈴仙

「あら?ブン屋が薬師に何の用?風邪かしら?」

文

「風は私が操るものですよ。それに今日はあなたに用があるのです。ストラップどうされました？」

鈴仙

「ああ、あれね。ほらここに」

文

「へえ。ネクタイピンに付けているんですか？」

鈴仙

「ええ。なかなかシャレているでしょう？」

文

「斬新ですねえ」

てゐ

「おーい。鈴仙くん？何してんのさ？」

文

「丁度良かった。あなたにも聞きたいのですが」

てゐ

「え？私？」

文

「ストラップどうされました？」

てゐ

「ここに。人参の首飾りと一緒に付けているよ」

文

「飾りと一緒に付けるのが流行っているんですかねえ？」

鈴仙

「それよりてゐ？頼んでおいた倉庫の片づけはどうなったの？そろそろ片づけておかないと、お正月の時餅つきに困るんだから」

てゐ

「それが大変なんだよ。餅つきの臼が少し割れていてさあ」

鈴仙

「え！？どんな風に？」

驚きつつ、てゐに駆け寄った次の瞬間！

ベタッ！

床に塗られたノリに足を取られて前のめりにすっ転んだ！

鈴仙

「きゃあああ！！」

文

「おお！シャッターチャンス！今日は白か？シマシマか？それともレースか？」

椀

「ちょっと文さん！止めときましようよ！」

文

「何いってんの！ジャーナリストとしてこのチャンスは逃せな…っ

てあれ？」

鈴仙

「ふっふっふ…残念でした！ちゃんとスパッツ履いていたのよ！」

てゐ

「な、なんだってー!？」

椀

「兎の知恵比べも日々進歩しているんだなあ」

く 永遠亭の帰り道く

文

「さて、たしかここに…。あ、あった！すいませ〜ん！」

ミステイア

「あら、記者さんが何の用？」

文

「忙しいお昼時にすいません。ストラップどうされました？」

ミステイア

「ストラップ？ああ、あれならここに…」

文

「あやややや。額縁に入れて飾っているんですか!？」

椀

「店にやってきた有名人のサインみたいな扱いですねえ」

ミステリア

「あのときタモリさんのサインも貰っておけばよかったなあ。あ、それに対抗してか、店に来る人がサインを書いていくんですよ」

文

「あ、本当ですねえ。妹紅さんに萃香さん、紫さんのサインもありますよ！撮影しましょう！」

ミステリア

「あー！ストップ！店に来た時のお楽しみってことにして！これ見たさに来るお客さんもいるんだから！」

椀

「商魂たくましいなあ……」

く 太陽の畑

文

「さて、幻想郷危険人物ぶつちぎりワースト1位に輝く、風見幽香さんのいる太陽の畑にやってまいりました」（超小声で）

椀

「うわあ……。すごく緊張しますねえ」

文

「今は冬、ひまわりは既に枯れております。冬の花がちらほらと咲いております。流石に恐ろしいので遠くから望遠で撮影しております」

す
」

椀 「あーいましたよー！」

文

「いました！風見幽香さんです！日傘を回しつつ花畑を歩いております！椀、限界までアップに！ストラップはどこにある？」

椀

「え〜と…。あ、ありました！手に持っているカゴにつけてます！」

文

「あ、カゴから何か…。球根です！球根を取り出しました！楽しそうに笑いつつ、球根を植えております」

椀

「どうやら種やシャベルといった園芸用具を入れているカゴみたいですね」

文

「微笑んでおります！珍しい！幽香の笑顔！どんな異変より珍しい！」

椀

「こうしていると穏やかそうな女性なんですけどねえ」

文

「椀、それは花の前だけですよ。人や妖怪には情け容赦なく戦い、妖怪が集まる幻想郷でも特筆して好戦的なんですから。近づいたら

駄目です」

椛

「そんなに!?!」

文

「ええもう…。サディストな妖怪No.1で閻魔様でも怯むことなく闘う、それはそれは恐ろしい人なんですから」

椛

「あ、立ち上がりました」

文

「球根を植え終えたんですかね?立ち上がって…傘を閉じて?椛!飛んで!」

幽香

「ずいぶんなこと言ってくれるわね……マスタースパーク!」

椛

「うわあああ!」

〈彼岸〉

椛

「はーっ、はーっ…。危なかった、あと一瞬飛ぶのが遅かったら…文さんありがとございませう。幽香さんに聞こえていたんですね?」

文

「おや？逃げ回っていたら彼岸に着きました。あ、あれは…小町さんです！」

椀

「やはり…寝てますねえ。ずいぶん見事にいびきをしています」

文

「人が働いてるのにのんきですねえ。まあいいです。寝顔を一枚」

カシャツ！

小町

「ん…ん？なんだい、ブン屋もついに息絶えたのかい？」

文

「起きましたか。まだまだ健在、そう簡単に死にませんよ。ストラップをどうされたか聞きに来たんです」

小町

「ああそうかい。だったらほら、あそこぞ」

文

「あ、船の船首に付けているんですか？」

椀

「木造船にストラップですか…。これであの世に送られるっていいのかなあ？」

小町

「いいじゃないの。浮世の思い出の一つさ。さて、あたいはまたひ

と眠りするかね」

文

「ちょっとちょっと、いいかげん働いてくださいよ！」

小町

「いいじゃないか。今日はクリスマス。昼寝のプレゼントがあってもいいだろ？」

映姫

「死神に祝日も正月もありません!!」

小町

「きゃん!し、四季様!？」

映姫

「まったくもう…。私たちの仕事にクリスマス休暇がないことは分かっているでしょう!そんな事だと大晦日に仕事入れますよ!」

小町

「え!?!それは流石にかんべんしてください…」

文

「面白くなってきましたが、四季様にかられると面倒です。退散しましょう」

椀

「身から出たサビとはいえ、クリスマスに説教ですか…」

く妖怪の山く

文

「ふう、一息つけましょう。おや？」

椀

「あ、にとりだ！おゝい！」

にとり

「ん？ああ、椀に文！もう取材終わったのかい？」

文

「いや、ちょっと一息つけようかと。それにカメラのバッテリーも補充したかったですし」

にとり

「ああそうか。はいバッテリー。カメラの調子はどうだい？」

椀

「ばっちりです。さすがにとり！」

にとり

「いや、そう言われると照れるなあ」

文

「ところで、あなたはストラップどうされました？」

にとり

「ひゅい！？私？ストラップならここに……」

文

「ああ、背中のリュックに付けていましたか」

椀

「それにしても、いったい何入れているんです？」

にとり

「そりゃあ、工具一式全部入れてるよ。材料さえあれば大抵のものは作れるさ」

文

「見せてくれます？」

にとり

「いいよ。ほら」

文

「うわあ…きちんと整理されてますねえ。さすがエンジニア」

にとり

「ふっふっふ」

椀

「いつそ服をカップからツナギに変えたら？」

にとり

「それは流石に河童の意地が許さないというか何というか」

文

「では、次は守矢神社に行ってみましょう！」

く守矢神社く

文

「こんにちは！」

神奈子

「おや、いらっしやい」

諏訪子

「あれ？天狗が何の用？」

文

「ちょうど良かったです。諏訪子様。ストラップどっされました？」

諏訪子

「ああそれなら、ほらここに」

文

「鉄の輪に付けているんですか!？」

諏訪子

「そつだよ」

神奈子

「鉄の輪に付けて、わざと私に見えるところで鉄の輪投げて見せびらかしているんだ」

文

「そんなことを…」

諏訪子

「何？持ってないから悔しいの？」

神奈子

「いや全然！そんなの全くうらやましくないね！」

諏訪子

「欲しい？欲しい？」

文

（ずいぶん子供じみたことするなあ…）

椀

（諏訪大戦もこんな感じだったのかなあ？）

文

「じゃ、じゃあ私はここでおいとましますね」

↓地底、旧地獄街道↓

文

「うーん、ここは苦手なんですけどね…。あ、いましました」

勇儀

「お、ここに天狗とは珍しい」

文

「どうも初めまして。記者の射命丸文と申します」

椛

「白楼天狗の犬走椛です」

勇儀

「あー、いつぞやの天狗か！巫女と共にやってきた！」

文

「覚えていただいて光栄です」

勇儀

「どうしたい？呑みにきたのか？」

文

「あ、いや取材です。お酒はまたの機会に…。ストラップどころか
れました？」

勇儀

「あれか。ほれ、ここに」

文

「あ、ハカマの腰ひもにつけているんですね！？」

勇儀

「ああ。ちよいと粋な見せ方だろ？」

文

「あなたらしいですねえ…」

勇儀

「最初は手錠の鎖に付けてたんだが邪魔でなあ、ここに落ち着いたというわけさ」

文

「お酒飲むとき邪魔になりますからねえ」

勇儀

「あ、そうそう。同じストラップ付けた奴とさっきすれちがったよ」

椀

「え？その方ってどこに行かれたかわかりますか？」

勇儀

「たしか地霊温泉に向かっていったなあ。金髪で、赤い帽子だったな」

文

「情報ありがとうございます。では早速行ってみますね」

勇儀

「ああ、達者でな」

〈地霊温泉〉

文

「さて、目撃証言をもとに探してみましよう…。でも人が多いですねえ」

椀

「探してみましようか？」

文

「お願いします」

椀

「千里眼！」

文

「その掛け声要ります？」

椀

「いました！あそこでコーヒー牛乳飲んでいきます！」

文

「あ、穰子さん！」

穰子

「あれ？なんで天狗がここに？」

文

「穰子さんこそ何を？物産展はどうしたんです？」

穰子

「営業はしてるんだけど、営業時間を短くしたのさ。今の時期はきつくてねえ。今日は2時ごろから開店だよ」

文

「だから湯治に？」

穰子

「ええ。今からはまた忙しくなるでしょうけど。しめ縄に干し柿、焼き芋が売れるのよ」

椀

「いいですねえ。繁盛してるようで」

文

「ところで、ストラップどうされました？」

穰子

「ああ、ここにあるわ」

文

「あやや、帽子に付けていましたか。でもなんで帽子に？邪魔じゃありませんか？」

穰子

「……だって、こうしないとどっちが姉でどっちが妹かわからない人のために目印になると……」

文

「……すみません。つかぬことを聞きました。そんな深刻な顔しないで下さい」

穰子

「ぐすつ、いいのよ。私ら姉妹に人気がないのは薄々わかってるわ。二人とも似ていて区別しにくくて双子みたいだって知ってるわよ！」

文

「いやそこまで言ってませんよ！」

椛

「鬱になるとここまでネガティブになるんだなあ……」

穰子

「だいたいはかの姉妹が似なすぎなのよ！なんで吸血鬼やさとり妖怪は姉妹で髪の色が違うのよ！」

文

「いや私に聞かれなくても……。でも確かに疑問ですね」

椛

「ご苦労様です。では文さん……」

文

「行きましようか」

椛

「さて、最後の一人、リリカ・プリズムリバーはどこにいるんでしょっ？」

文

「たぶんあそこでしょう。ついてきなさい」

（紅魔館）

椛

「え、ここですか？」

文

「ええ。気づかれるとまずいから、今度こそ潜入するわよ。おそらく彼女たちは紅魔館大ホール近くの部屋にいるはず」

椀

「紅魔館でライブってことですか。それにしても、よく部屋の構造を知ってますね？」

文

「そりゃあ何度も忍び込んで…。あ、ありました！プリズムリバー楽団様控室です！早速行ってみましょう、こんにちは」

ルナサ

「お、ブン屋か？」

メルラン

「どうしたの？よくここにいとわかったわね」

文

「やはり紅魔館だと思いましたよ。クリスマスパーティーやるところはココぐらいですからねえ」

リリカ

「さっすが。それで、何の用？」

文

「あの、リリカさん。ストラップどうされました？」

リリカ

「ああ、あれならもちろんキーボードに付けているわ」

文

「やはりそうでしたか！ストラップが付いてると、心なしか新しいものに見えますね」

ガチャツ！

咲夜

「用意はいいかしら？派手に…って、またあなたたち？」

文

「あらら、これは失敬。リリカさんに用がありました」

咲夜

「……はあ、まあいいわ。パーティの最中にナイフ投げる訳にもいかないし。見逃してやるわ」

文

「そりゃどうも」

リリカ

「よし！それじゃあ円陣組もうか！クリスマスソング特別ライブ、気合い入れてくよー！」

メルラン

「ええ！最高のライブにしましょう！今夜は燃え尽きるわよー！」

ルナサ

「聖なるこの日に感動を！3、2、1、レディ、ゴーー…！」

文

「うわあ、普段見れない舞台裏のプリズムリバー三姉妹ですね！気合入ってます」

椀

「ホントですね。あ、そろそろ時間ですよ！」

文

「皆さんにも、聖夜に幸せが来ることを祈っております。第50回特別記念いいとも増刊号、レポーターは射命丸文がお送りしました！」

文&椀

「それでは皆さん、MerryX'mas!!」

第五十回特別記念・いいとも増刊号（後書き）

第50回特別記念；いいとも増刊号、いかがでしたか？

なんとか形にできました。ネタに苦勞し気づけば12/25の夜明けを迎えました。

クリスマスなのに徹夜してしまった月見草です。誤字とかあったらすいません。

ストラップのその後を文が取材というネタは以前からできていましたが、偶然にもリリカがストラップ取得していたのでラストをリリカにしました。

紅魔館ではクリスマスパーティーでしょうね。文はそのままカメラマンとして記念写真でも撮るのでしょうか？

振り返ってみると、今までに15人がストラップを取得しました。全員が出演したら、またこの企画やりたいですね。

今度やるときは裏話も入れようかなあと密かに思う月見草でした。

（大半の話を忘れているから書けるかどうか未定）

ではみなさん、メリークリスマス！そしてよいお年を！

第五十一回・村紗水蜜

）

タモリ

「はい、こんにちは」

『こんにちは』

タモリ

「明けましておめでとつございます！2012年もよろしくお願ひします。今日は船長ですねえ」

『そうですね！』

タモリ

「舟幽霊の船長ですねえ」

『そうですね！！』

タモリ

「縁起悪いと思うの私だけですかね？沈没アンカーって…」

タモリ

「それでは登場していただきましょう。前回の聖白蓮さんの紹介で初登場、村紗水蜜さんです！どうぞ」

ムラサ

「どうも！村紗水蜜です！」

アンカー抱えつつムラサ登場！

『ムラサ ！』

『船長！！』

タモリ

「どうも初めまして！アンカー持ってくるんだ！？」

ムラサ

「ここまで小型幽霊船で飛んできたけど、係留するのにアンカーいらないって警備員さんに言われました」

タモリ

「そりゃ必要ないよ！駐車場に係留って！」

ムラサ

「わかっちゃいるけどアンカー無しでは気になるわね」

タモリ

「大丈夫ですって！流されたりしませんし。駐車場にアンカーで穴あける方が問題ですよ！」

ムラサ

「そうですかねえ」

タモリ

「そうですよ…あ、それは？」

ムラサ

「はい、鳥取県境港市で毎年1月中旬に行われるカニ感謝祭のポスターです！」

タモリ

「へえ〜。境港市って、鬼太郎の作者の水木しげるさんの出身地だよね？」

ムラサ

「そうです。同時にカニがよく取れる港町ですね」

タモリ

「そうなんだ〜」

ムラサ

「この祭り、元は猛霊八惨もうれいやっさん大明神祭といいまして、海難事故で亡くなった方が妖怪となった猛霊八惨を鎮める祭りだったそうです」

タモリ

「へえ〜」

ムラサ

「鬼太郎では猛霊八惨として登場しましたが、元ネタは千葉の亡霊むつれんヤッサという舟幽霊です」

タモリ

「舟幽霊にもいろいろあるんだ…」

ムラサ

「はい。いなが貸せ、つまり柄杓びしやくを貸せと言ってくるところは同じですけどね。ちなみにムラサは鳥取の舟幽霊です」

タモリ

「そうですか。貼っついてちようだい！」

タモリ

「お花も結構届いてますね。ZUNさんに上海アリス幻樂團、命蓮寺、封獣ぬえさんからも！」

ムラサ

「ありがたいですね。菊の花持ってくるってどういこと！？」

そこには白や黄色の菊の花々が…

タモリ

「寺唯一の亡霊だからですかね？」

ムラサ

「聖…気を使ったのかもしれないけど根本的に間違ってるよ…」
頭を抱えるムラサ

タモリ

「たまにそういう間違いするんですねえ」

ムラサ

「まあ慣れましたけどね」

タモリ

「ははは…。年末年始はどうでした？聖さんが大掃除は大変だった
言っていましたか…」

ムラサ

「あー、あれね。まあ何とかなつたわ。能力を駆使すればちよちよいのちよいよ！」

タモリ

「能力？」

ムラサ

「まず板張りの廊下や本堂は、多少濡れてもいいから私の“溺符”
ディーブヴォーテックスで濡らして雑巾がけすればOK」

タモリ

「荒っぽいな！！本堂に水まくって、仏像に水かけたらダメでしょ！」

ムラサ

「大丈夫、出力を弱くして霧雨みたいにしたから。井戸から水汲んで雑巾がけは大変でしょ？風呂場や台所などの水回りも私が担当です」

タモリ

「いやそういう訳にも…。仏像に水って、白蓮さんよく許可出しましたねえ」

ムラサ

「畳の部屋は一輪が軽く掃き掃除したあと、雲山が畳の上ギリギリを飛んで行けば汚れが取れるし」

タモリ

「入道をモップみたいにしちゃダメでしょ！」

ムラサ

「フワフワしてるからホコリがよく絡み付いて取れるのよ」

タモリ

「クイック ワイパーですか!？」

ムラサ

「正月飾りの買い出しは星に任せればいいの。あの人が適当に歩いた先にいい店があるから。安くていい飾りを買ってきて助かる、って聖も大喜びで」

タモリ

「あの人ならいいお飾りが寄ってくるでしょうね。もういつそあの人七福神に入れちゃったら？」

ムラサ

「いやそういうわけにも…。他の買い物はナズーリンに頼めば一発でどの店に何があるかわかるし」

タモリ

「それなら早いですね」

ムラサ

「裏手の墓地は響子と小傘にやらせたわ。あの新入り仕事が早いのよね。助かるわ」

タモリ

「珍しい妖怪ですねえ。近頃じゃ人間のほうがダラけてるのに」

ムラサ

「でも小傘に邪魔されたわ。使い古した道具を捨てようとしたら、かたくなに止めるんだもの。聖がお経を唱えてお焚きあげしたら納得してくれたけど」

タモリ

「成程…。からかさお化けの性分ってやつでしょうね。あれ？ぬえさんは？」

ムラサ

「あー、あいつね。サボって遊び行ったから、一番面倒な天井の拭き掃除やらせたわ」

タモリ

「あらら…飛べるとはいえ大変でしょうねえ」

ムラサ

「まあ妖怪連中が掃除すればこんなものですよ。いやあ早く終わった。聖もいたから隅々まで掃除できたし」

タモリ

「え？どういうことですか？」

ムラサ

「聖ならダンスとか本棚でも簡単に運べるでしょ？」

タモリ

「一番の重労働をさせちゃダメでしょ！！寺の住職でしょうに…」

ムラサ

「いやだって、魔法で肉体強化すれば片手でダンス運べるのよ？さすが超人、聖白蓮だわ」

タモリ

「超人って！？あの人はスーパーサ ヤ人ですか！？髪の毛逆立ったりしないでしょ！」

ムラサ

「ロングヘアーだからスーパー イヤ人3かしら？」

タモリ

「なりませんよ！すごい光景だろうなあ…。尼さんが笑顔でダンスを片手で運ぶって…」

ムラサ

「そうそう！それを知らずに見た響子が見た瞬間絶叫したわ！『わああああ！？』って凄まじい音量で」

タモリ

「そうなるでしょ！！」

ムラサ

「人里まで聞こえる大絶叫だったなあ。妖怪じゃなかったらとっくに鼓膜破れてるわよ」

タモリ

「本当に凄まじかったんですねえ」

ムラサ

「でもそのおかげで里の米倉にスズメが近寄らなくなったそうよ」

タモリ

「何が良い方向に向かうかわからないものですねえ……」

）

一旦CM

タモリ

「会場の方100人がスイッチを持っていますので一人に該当するアンケートを出しますと私の携帯ストラップを差し上げます」

ムラサ

「さて…どうしようか？」

タモリ

「頑張ってください。何いきますか？」

ムラサ

「じゃあ…“海上自衛隊のイージス艦を実際に見たことある人”にします」

タモリ

「では“海上自衛隊のイージス艦を実際に見たことある人”スイッチオン！」

）

ムラサ

「お、1人!!」

ADさんがストラップを渡す

タモリ

「あの人だ！どこで見たんです？」

『佐世保で見ました』

ムラサ

「あそこか。私も見たいなあ。出来れば乗って詳しく見たい！」

タモリ

「船乗りの血が騒ぐんでしょうかねえ」

）

一旦CM

タモリ

「続いてはお友達紹介して下さい！」

『え〜！！』

ムラサ

「それじゃあ、命蓮寺の雲居一輪と雲山を呼びます」

タモリ

「あ、雲山さんも呼ぶんですか！」

ムラサ

「いや最初は一輪だけ呼んで、その次に雲山を呼ぼうとしたけど…
こういうトーク番組は苦手だということから一緒に出ることになったんです」

ADさんがつながった電話をムラサに渡す

ムラサ

「もしもし?」

一輪

「はい、もしもし?」

ムラサ

「ああ、一輪。今なにしてた?」

一輪

「みんなで放送見てたわよ。いやでも…菊の花とは。姐さんに任せつきりだったから気付かなかったわ」

ムラサ

「そうだと思ったよ…。あれ?雲山は?」

一輪

「ちゃんと後ろにいるわよ。代わる?あ、そう。いいから話を進めるだって」

ムラサ

「まったく、何を照れているんだか。体は大きいのにねえ。じゃあタモリさんに代わるわね」

受話器がタモリさんに渡される

タモリ

「もしもしタモリです」

一輪

「もしもし、雲居一輪です」

タモリ

「どうも初めまして。明日は大丈夫ですか？」

一輪

「はい、大丈夫です！」

タモリ

「じゃあ、明日来てくれるかな？」

一輪

「いいともー！」

タモリ

「はい、お待ちしてます」

）

第五十一回：村紗水蜜（後書き）

第五十一回、村紗水蜜編いかがでしたか？

聖白蓮編で出た大掃除ネタを引つ張つてみました。ここまで荒つぱくは無いだろうけど、妖怪が掃除したら簡単に終わりそうだなあ…。翼があるから天井裏でも気軽に掃除できますし。超人の白蓮様なら力仕事も簡単…いや、妖怪ならダンスも楽勝かな？

雲山は悩んだ末に一輪と一緒に出演させることにしました。公式設定に『頑固親父で無口』とあつたんで、トークは難しいとの判断です。

東方いいとも初の男性キャラとはいきませんでした…。まあいずれ霖之助出すからいいかな。でも霖之助もあまりしゃべらないキャラだったような…

次回は一輪です。次回も見えてくれるかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9799v/>

もしも笑っていいともの“テレフォンショッキング”に東方キャラが出演した

2012年1月6日12時51分発行